

# みんなのデジタルリポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 2. 研究および共同利用

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-04-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00009013">http://hdl.handle.net/10502/00009013</a>

## 2 研究および共同利用

### 概観

本館の研究は2004年度の法人化以降、「特別研究（2016年度まで「機関研究）」」「共同研究」「各個研究」という3種類の研究を柱としている。

「機関研究」は近年の研究動向や問題の所在を調査した上で、研究テーマを設定し、本館が全館規模で取り組む研究活動である。2010年4月より法人化第2期を迎えるにあたり、2009年10月から新たな研究領域「包摂と自律の人間学」と「マテリアリティの人間学」を設定し、研究プロジェクトを開始した。2016年度においては、第3期中期目標期間を通して、大学共同利用機関としての特徴を活かした研究の推進を進めるため、「機関研究」の枠組みを改め、「特別研究」として、研究プロジェクトの発展的改組を行った。

「共同研究」は、ある共通の研究テーマの下に複数の研究者が集まって研究会などを開催し、共同で研究をおこなう活動で、本館の研究活動の柱の1つであるとともに、大学共同利用機関としての「共同利用」の一環でもある。機関研究が研究テーマの設定やプロジェクトの選定から、その運営、成果の公表まで本館主導でおこなうのに対して、共同研究は研究テーマと組織について、館員のみならず、本館を共同利用する研究者の自主的な提案に基づく。すなわち、館員（客員教員を含む）を対象とした館内募集に加えて、公募もおこなっている。応募された共同研究の提案は、館内募集、公募の区別なく共同利用委員会で審査され、選定される。また、2010年度から「若手研究者による共同研究」が制度化され、一般の共同研究と同様に公募している。さらに、2004年度以来、共同研究会のメンバーだけではなく、研究者、学生、一般への研究会の公開を推進している。

「各個研究」は、館員（客員教員を含む）が自主的にテーマを設定して、個人で実施する研究であるが、館の公的な研究活動の一環に組み入れられている。

館の研究活動である「特別研究」や個々の研究者による「各個研究」を資金面でサポートするのが、館長リーダーシップ経費と科学研究費助成事業などの外部資金である。前者では「研究成果公開プログラム」という枠組みがあり、特別研究プロジェクト以外の大規模なシンポジウムの実施をはじめ、共同研究や各個研究の成果を公開するための研究フォーラムや国外の学会、研究集会での発表を支援するものである。

しかし、特別研究プロジェクト、37件の共同研究、客員教員や外国人研究員、機関研究員などを含めると100を超える各個研究の研究資金を運営費交付金だけから捻出することは到底できない。さらに研究に客観性を担保していく上でも、科学研究費助成事業などの競争的外部資金の導入を積極的に行っている。そのほか、日本学術振興会以外の独立行政法人が募集する助成金や民間の助成団体等による奨学寄付金なども積極的に受け入れている。これら外部資金に付随する間接経費は貴重な研究支援経費となっており、それらを使用した館内の研究環境整備事業が実施されている。なお、館長リーダーシップ経費の「事業・調査経費」という枠組みも同じ目的で使われる。

本館における研究成果公開の主軸のひとつである刊行物に関しては、2016年度には『国立民族学博物館研究報告』41巻1号～4号が刊行されるとともに、SES (Senri Ethnological Studies)、SER (『国立民族学博物館調査報告』または Senri Ethnological Reports)、『国立民族学博物館論集』、『民博通信』、『研究年報2015』が刊行され、外部出版制度を利用した成果公開も行った。さらに、研究成果を広く市民に公開するための学術講演会を、東京と大阪で開催している。

2014年度に共同利用に関してその強化を目的とする改革をおこなった結果、本館の共同利用では共同研究の公募、公開の推進と資料・設備の共同利用の促進を強調するようになった。なお、従来から、共同利用を積極的に推進するために、「外来研究員」「特別共同利用研究員」といった研究員制度を設けており、若手研究者の育成支援もおこなっている。

本館は開設以来40余年にわたり世界の民族と文化、社会を研究し、多様な有形・無形の民族資料とそれらに関連する情報を集積してきた。本館では、それらの資料と情報を「人類の文化資源」と位置づけ、同時代の人々と共有し、かつ後世に伝えるため、国際共同研究を組織し、国内外の複数の研究機関、大学、博物館、現地社会と連携しながら研究を推進している。この実現のため、グローバルな共同利用デジタル・データバンクとして「フォーラム型情報ミュージアム」を創出し、人類の文化資源に関する情報の発信、交換、生成、共有化を図る「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」プロジェクトを立ち上げた。このプロジェクトによって、研究者コミュニティのみならず、文化資源を作り出した現地社会との双方向的な交流も実現したいと考えている。初年度となる2014年度は、北米先住民や韓国の文化資源等に関する4件の研究プロジェクトの活動やシステムの基本設計を開始した。2015年度は、台湾原住民や北米北方先住民に関する2件のプロジェクトが加わり、合わせて6件のプロジェクトを実施するとともに、パイロット版のデータベースを作成した。3年目となる2016年度は、6件の新規プロジェクトが加わり、開発型プロジェクト3件、強化型プロジェクト6件、合計9件のプロジェクトを実施。「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」プロジェクト（開発型）にて現地台湾で開催した

国際ワークショップ「台湾資訊跨國多語言交流平台（台湾資料の国際多言語交流プラットフォーム）」のように、各プロジェクトが標本資料のソースコミュニティなどと協業してデジタル博物館の構築を促進する取り組みを実施したことによりデータベース・コンテンツの格納件数が、当初計画7,000件（140,000レコード）を上回る8,990件（150,812レコード）となった。

本館の資料は2004年度より標本資料、映像音響資料、文献図書資料、民族学研究アーカイブズ資料に大きく4分類されている。それぞれの整備および利用状況を見ると、まず標本資料は海外直接収集資料としてアメリカのキルト資料、国内購入資料としてインドの楽器資料を収蔵した。また、標交紀コーヒーコレクション等を寄贈受入した。

第1収蔵庫は、大規模な改修工事に伴い、収蔵庫の「見える化」の一環として収蔵庫内部を見学できる窓を取り付けたことで、大学のゼミや授業での収蔵庫見学希望を受け入れることができるようになった。

文献図書資料に関しては、継続的な事業として国立情報学研究所NACSISCAT（全国規模の総合目録データベース）への登録作業を推進している。2016年度は図書等約1,700冊、雑誌174タイトル、マイクロ資料約5,570点（北米学位論文約5,000点、新聞雑誌86タイトル570点）を登録した。遡及入力事業で登録された所蔵情報は、本館の図書システムの蔵書データベースとして、Internetを介して広く公開・利用されており、2016年度は本館所蔵図書資料の相互利用での貸出受付が659件、文献複写受付は1,451件と、大学間の共同利用に大きく貢献していることがわかる。また、館外者への貸出冊数も、延べ2,054冊と好評である。

2006年度に「民族学資料共同利用窓口」を設置し、利用に関する多様な問い合わせを1つの窓口で対応することにより、利用者に対するサービス向上を図っている。2016年度には277件の問い合わせに対応し、利用促進に寄与した。

また、蔵書点検5年計画の4年目として、書庫5層および書庫4層の一部、探究ひろばなどの別置図書も含め、234,915冊の蔵書の点検をおこなった。

2007年度より民族学研究アーカイブズの共同利用を促進するため、ホームページを開設し、各アーカイブの目録等を公開してきた。2016年度は、昨年度に引き続き資料の整理作業を行い、沖守弘・インド民族文化資料アーカイブの目録をWeb公開した。また、資料の受入れの流れについて現状に合うように整理検討を行った。

## 2-1 みんなの研究

### 特別研究

#### ●特別研究の意義

特別研究は、2016年度から始まった第3期中期目標期間の6年間を通じて、「現代文明と人類の未来——環境・文化・人間」を新しい統一テーマとして掲げ、現代文明が直面する喫緊の諸課題に対して解決志向型のアプローチにより実施する国際共同研究である。

近現代のヨーロッパに発する西欧文明および科学・技術の発展は、人類の生活と社会を豊かにすると信じられてきた一方で、人口増加、環境破壊、戦争、資源枯渇、水不足、大気汚染など、大きな負の代償を人類社会にもたらしているとも言える。特に環境問題と人口増加は、解決を要する大きな課題であり、これらの課題は人間生活のあらゆる面に影響を及ぼし、多くの問題をもたらしている。このような状況において、文明に対応してきた現地社会の「知」から現代文明を問い直すために、特別研究を現代の人類社会が直面する諸課題の分析と解決を志向する研究として位置づけ、環境問題や人口をめぐる地球規模の変動について直接的・間接的に起因する対立軸となる文化現象を設定する。グローバル空間・地域空間・社会空間が構成する多層的生活空間における現代の問題系としてアプローチすることで、旧来の（伝統的な）価値から、いかに多元的価値の共存を保障する社会を創成することができるかを解明し、人類社会にとって選択可能な問題解決を志向する未来ビジョンを提出することをめざす。

2016年度は、特別研究運営会議を立ち上げ、プロジェクト「生物・文化的多様性の歴史生態学——少動物・稀少植物の利用と保護を中心に」を開始した。特別研究プレ国際シンポジウムとして、「歴史生態学から見た人と生き物の関係」を2017年3月に開催した。

## 2016年度特別研究一覧

テーマ区分	研究課題	プロジェクトリーダー	研究年度
1 環境問題と生物多様性	生物・文化的多様性の歴史生態学——稀少動物・稀少植物の利用と保護を中心に	池谷和信 岸上伸啓	2016～2018

### ●特別研究テーマ区分とプロジェクト

先史から現在までの人間・環境関係の歴史生態学的アプローチを軸にして、稀少動物・稀少植物の利用や絶滅、保護の変遷およびそこでの問題を把握することを通して現代文明と環境との関係を考えること、また、寒冷地（極北）、島嶼・海洋（オセアニア）、砂漠（アフリカ）、森林（アマゾニア、熱帯アジア、日本）、内水面（中国）などの世界各地の環境特性へのヒューマンインパクトの歴史を把握することから、地球、大陸、地域レベルでの動物・植物と人間社会との相互関係について考えることが主要な研究テーマとなる。

「手生物・文化的多様性の歴史生態学——稀少動物・稀少植物の利用と保護を中心に」

代表者：池谷和信／岸上伸啓 2016～2018

### 研究目的

本プロジェクトの目的は、先史から現在までの人間・環境関係の歴史生態学的アプローチを軸にして、稀少動物・稀少植物の利用や絶滅、保護の変遷およびそこでの問題を把握することを通して現代文明と環境との関係を考えることである。また、本研究は、寒冷地（極北）、島嶼・海洋（オセアニア）、砂漠（アフリカ）、森林（アマゾニア、熱帯アジア、日本）、内水面（中国）などの世界各地の環境特性へのヒューマンインパクトの歴史を把握することから、地球、大陸、地域レベルでの動物・植物と人間社会との相互関係について考える試みでもある。

### 実施状況

特別研究プレシンポジウム「歴史生態学から見た人と生き物の関係」

Human Relationships with Animals and Plants: Perspectives of Historical Ecology

日時：2017年3月26日 10時～17時

場所：国立民族学博物館 第4セミナー室

発表者およびタイトル（同時通訳付）

「趣旨説明」池谷和信（国立民族学博物館教授）

「生物多様性の問題をアンデスで考える——ジャガイモを例として」

山本紀夫（国立民族学博物館名誉教授）

「なぜタロイモは『孤児作物』であるのか？——認識差に着目した説明を中心に」

ピーター・マシウス（国立民族学博物館教授）

「バナナと人間——東南アジア大陸部における山地農民の自然資源利用」

中井信介（佐賀大学准教授）

「先史時代のカナダ北極圏イヌイットとクジラ——儀式とシンボリズムと価値体系」

ジェイムズ・サベール（マッギル大学准教授／国立民族学博物館研究員）

「北アメリカアラスカ地域における現代の先住民捕鯨と気候変動」

岸上伸啓（国立民族学博物館教授）

「ラッコと人間——千島列島におけるラッコ利用の歴史」

手塚薫（北海学園大学教授）

「内水面漁場へのヒューマンインパクトと鵜飼い漁師たちの生業戦略」

卯田宗平（国立民族学博物館准教授）

「インダス文明期の遺跡分布の時系列動態と環境変化」

寺村裕史（国立民族学博物館助教）

「アフリカにおける環境史——象牙、ダチョウの羽、キツネの毛皮」

池谷和信（国立民族学博物館教授）



## 総合討論

参加人数 31名（発表者含む）

## 1. 研究成果の概要

環境と文明にかかわるシンポジウムを開催し、各発表者の研究報告を通して研究内容の共有と本シンポジウムの大枠の検討が行われた。

## 2. 機関研究に関連した成果

## ○出版

池谷和信「近年における歴史生態学の展開——世界最大の熱帯林アマゾンと人」水島司編『環境に挑む歴史学』43-54頁、勉誠出版（2016.10.11）

池谷和信「北東アジア地域研究の新しい地平——人やものの移動からみた自然・文化・文明」『民博通信』156号4-9頁（2017.3.26）

池谷和信 2017「狩猟採集民からみた地球環境史」池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』1-21頁、東京大学出版会（2017.3.21）

## ○公開シンポジウム

- ・特別研究シンポジウム「歴史生態学から見た人と生き物の関係」、国立民族学博物館（2017.3.26）
- ・みんなく公開講演会「恵（めぐ）みの水、災（わざわ）いの水——川、湖、海」、オーバルホール（2017.3.21）
- ・岸上伸啓「現代文明からみた生き物——クジラなどの野生動物の利用と保護をめぐって」みんなく公開講演会「スイカで踊る、クジラを祭る 生き物と人 共生の風景」、日経ホール（2016.11.10）
- ・池谷和信「野生と文化からみた生き物——栽培化や家畜化が変えた野生の風景」みんなく公開講演会「スイカで踊る、クジラを祭る 生き物と人 共生の風景」、日経ホール（2016.11.10）
- ・池谷和信「アフリカとグローバル・ヒストリー（3）アフリカの環境史とグローバル・ヒストリー——象牙、ダチョウの羽、キツネの毛皮」『日本アフリカ学会第53学術大会 大会プログラム・研究発表要旨集』、135頁（2016.5.31）

## 人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築

2014年度から、本館が所蔵する様々な人類の文化資源をもとに国際共同研究を実施し、情報生成型で多方向的なマルチメディア・データベースの構築を行う、「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」を行っている。初年度は、プロジェクトに係る基盤構築として、フォーラム型情報ミュージアム委員会のもとにシステム開発WGを置き、資料データ整備やデータベース間の総合連携、公開方法等について検討を進めた。併せて、ウェブサイト公開のため、既存紙ベース『月刊みんなく』378冊について、写真のデータ化及びPDF化を実施した。

また、「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」、「『朝鮮半島の文化』に関するフォーラム型情報ミュージアムの基盤構築」、「徳之島の民俗芸能に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」及び「民博所蔵『ジョージ・ブラウン・コレクション』の総合的データベースの構築」の4つの研究プロジェクトを開始し、ソースコミュニティとの共同作業、北アリゾナ博物館（米国）、アシウィ・アワン博物館・遺産センター（米国）及び国立民俗博物館（韓国）との国際学術協定に基づく国際共同研究等を通じて、情報の多層化、多言語化を推進した。

2016年度は、新たに「民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討」、「中国地域の文化展示のフォーラム型情報ミュージアムの構築」、「日本民族学会附属民族学博物館（保谷民博）資料の履歴に関する研究」、「楽器に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」、「日本の文化展示場関連資料の情報公開プロジェクト」、および「民族所蔵『ジョージ・ブラウン・コレクション』の総合的データベースの構築（フェーズⅡ）」の6つの研究プロジェクトを加え、合わせて9件のプロジェクトを実施した。また共同研究の実施のため、新たに、カナダのブリティッシュコロンビア大学人類学博物館と学術研究交流に関する協定書を2017年3月に締結した。

「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」研究プロジェクト

代表者*	プロジェクト課題名	区分	期間**
伊藤敦規	北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有	開発型	2014年6月～2018年3月
野林厚志	台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応	開発型	2015年4月～2019年3月
岸上伸啓	北米北方先住民の文化資源に関するデータベースの構築に関する研究——民博コレクションを中心に	強化型	2016年1月～2017年12月
齋藤玲子	民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討	開発型	2016年4月～2020年3月
横山廣子	中国地域の文化展示のフォーラム型情報ミュージアムの構築	強化型	2016年4月～2018年3月
飯田 卓	日本民族学会附属民族学博物館（保谷民博）資料の履歴に関する研究と成果公開	強化型	2016年4月～2018年3月
福岡正太	楽器に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築	強化型	2016年4月～2018年3月
日高真吾	日本の文化展示場関連資料の情報公開プロジェクト	強化型	2016年4月～2018年3月
林 勲男	民族所蔵「ジョージ・ブラウン・コレクション」の総合的データベースの構築（フェーズⅡ）	強化型	2016年12月～2017年3月

\* 2016年度実施分

\*\*開発型は4年以内、強化型は2年以内

「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」

代表者：伊藤敦規 2014年6月～2018年3月

実施状況

本年度もほぼ計画通りに研究を実施した。主な実施内容は、専門的知識を有する宗教指導者やアーティストの日本の博物館への派遣、そこでの資料調査、連携機関での進捗発表、報告書の執筆と査読付き雑誌への投稿、資料写真撮影調査、動画データの整理等からなる。

以下、時系列に則して実施内容を解説する。

4月に、米国アリゾナ州から3名のホビを広島県福山市松永はきもの資料館に派遣し、約2週間にわたり資料熟覧を行い、収蔵資料の約半数の162点の熟覧調査を映像記録した。

5月に、昨年度（2015年11月）に資料熟覧調査を実施した愛知県犬山市の野外民族博物館リトルワールドにて、プロジェクトの進捗について公開講演会を開催した。

6月までにシステム開発班と打ち合わせを重ね、フォーラム型情報ミュージアムの航海用データベースのイメージを具体的に検討した。

6月から8月までの約40日間に渡米し、2014年度に国立民族学博物館（民博）と学術協定を締結した北アリゾナ博物館を訪問し、プロジェクトの進捗を報告するパネルを開催し、約80名の聴衆が参集した。また滞在中にこれまで日本に招聘した熟覧者達とデータ整理を行い、データベース公開に向けた作業を進めた。8月29日に、第8回世界考古学会議京都大会（WAC8）にて、学術協定の締結機関であり本プロジェクトの連携機関である北アリゾナ博物館の主任学芸員である Kelley Hays-Gilpin とともに “Decolonizing museum catalogs? Collaborative catalogs and archaeological practice” と題した発表を行った。なお、WAC8には1,600名を超える考古学者が世界中から参加した。

9月に科研費（国際共同研究強化）で渡米し、コロラド州歴史協会、デンバー美術館、デンバー自然科学博物館の3館で、資料調査と合計約110点のホビ製宝飾品資料のスチール撮影を行った。今後この機会に撮影した資料写真を用いてホビ保留地などで熟覧調査を行い（デジタル熟覧調査）、そこで得られたデータをフォーラム型情報ミュージアムのデータベースに掲載する予定である。

10月には米国アリゾナ州から1名のホビを広島県福山市松永はきもの資料館に派遣し、約2週間にわたり資料熟覧を行い、4月に未実施だった収蔵資料の約半数の162点の熟覧調査を映像記録した。また、春の熟覧調査の動画については文字起こししたものについては熟覧者と確認し、カルチャル・センシティビティに該当する部分などの削

除を行った。

11月には、『国立民族学博物館調査報告 (SER)』に投稿していたフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの成果である国立民族学博物館収蔵ホピ製木彫人形資料調査報告 (約94万字) の採択が決まり、校正作業を進めている。また、国際協力事業団 (JICA) が主宰し、民博が中心となって実施している「博物館とコミュニティ開発」コースにて、世界中から集まった12名の研修生に対して、民族学博物館が収蔵する著作物的なものへの配慮の必要性について、本プロジェクトで注目しているカルチャル・センシティブティへの配慮と比較しながら紹介した。

2017年3月の館内公開に向け、12月には民博が収蔵する「ホピ製」木彫人形資料272点の熟覧調査の動画の書出などあらゆるデータを整理する予定である。

1月から2月にかけて米国アリゾナ州のホピ保留地などを訪問し、これまでに熟覧調査のために招聘したホピの宗教指導者と引き続きデータ整理を行う。また、最終年度に向け、公開されるデータベースの利用など、近未来の具体的な展開も視野に入れながら検討する予定である。さらに2014年10月と2016年2月に民博で開催した本プロジェクトに関連する2つのワークショップについて文字にまとめ、『Senri Ethnological Studies (SES)』として出版を目指すために投稿する予定である。

3月中には成果の一部について、館内公開を行う予定である。

## 成果

3年目となる2016年度は、学術協定に基づく国際共同研究を実施しながら、11月末日までに招待講演や国際学会等での研究発表 (10本)、2カ国4機関での熟覧調査、5本の短文エッセイの執筆、4本の査読付き編著の出版 (一つが出版済み。一つは校正中。二つは年度内に投稿予定) を行った。さらに、フォーラム型情報ミュージアムの本プロジェクトに関するデータを館内公開する予定のため、そのシステムデザインの監修やデータ整理を行っている。

## 成果の公表実績

### 編著

- 伊藤敦規編 2016 『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』 (国立民族学博物館調査報告) 137。
- 伊藤敦規編 2017 『ソースコミュニティと博物館資料との「再会」I 国立民族学博物館収蔵「ホピ製」木彫人形資料の熟覧解説』 (国立民族学博物館調査報告) 140。

### 論文等

- 伊藤敦規 2016 「ホストとして関わる人類学——米国南西部先住民ホピと私のこれまでとこれから」 (特集 人類学者の存在論) 『社会人類学年報』42: 67-90、東京都立大学・首都大学東京社会人類学会、弘文堂。
- 伊藤敦規 2016 「おわりに」、伊藤敦規編『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』 (国立民族学博物館調査報告) 137: 131-132。
- 伊藤敦規 2016 「はじめに」、伊藤敦規編『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』 (国立民族学博物館調査報告) 137: 1-4。
- 伊藤敦規 2016 「伝統工芸」、阿部珠理編『アメリカ先住民を知るための62章』、明石書店、pp.266-271。
- 伊藤敦規 2016 「カチーナとカチーナ人形」、阿部珠理編『アメリカ先住民を知るための62章』、明石書店、pp.261-265。
- 伊藤敦規 2016 「スネークダンス」、阿部珠理編『アメリカ先住民を知るための62章』、明石書店、pp.231-235。

### 学会発表や招待講演など

- 伊藤敦規 2016 「米国先住民墓地保護・返還法」『資料返還をめぐる先住民と博物館との新たな関係性の構築に関する文化人類学的研究 (科学研究費補助金基盤B、出利葉浩司代表)』、北海学園大学。(2016.11.22)
- Atsunori Ito 2016 “Hopi Collections Review in the US and Japan: Introduction of a Minpaku’s Info-Forum Museum Project”, Denver Museum of Nature & Science. (2016. 9. 15)
- Atsunori Ito 2016 “Hopi Collections Review in the US and Japan: Introduction of a Minpaku’s Info-Forum Museum Project”, History Colorado Center. (2016. 9. 12)
- Kelley Hays-Gilpin and Atsunori Ito 2016 “Decolonizing museum catalogs? Collaborative catalogs and archaeological practice”, WAC8 (8th World Archaeology Congress, Kyoto, Japan: 世界考古

学会議京都大会), Doshisha University. (2016. 8. 29)

Gerald Lomaventema and Atsunori Ito 2016 "History of Traditional Overlay Jewelry", Arizona State Parks Homolovi State Park Event "Suvoyuki Day", Homolovi State Park. (2016. 8. 6)

Robert Breunig, Atsunori Ito, Gerald Lomaventema, Kelley Hays-Gilpin 2016 "History of Hopi Overlay Jewelry: Origins and Continuity", Museum of Northern Arizona 83rd Hopi Festival, Easton Collections Center. (2016. 7. 3)

Robert Breunig, Atsunori Ito, Gerald Lomaventema, Kelley Hays-Gilpin 2016 "History of Hopi Overlay Jewelry: Origins and Continuity", Museum of Northern Arizona 83rd Hopi Festival, Easton Collections Center. (2016. 7. 2)

伊藤敦規 2016 「博物館資料を文化的に蘇生させる——ソースコミュニティと共に行う博物館資料の熟覧調査」『リトルワールドカレッジマスターコース 2016、第二回講義』、野外民族博物館リトルワールド。(2016.5.22)

伊藤敦規 2016 「記憶や思い出を後世に伝える方法を考える——ソースコミュニティと共に行う博物館資料の熟覧調査」大阪府高齢者大学『世界の文化に親しむ科』、大阪市社会福祉会館。(2016.5.20)

伊藤敦規 2016 「アメリカ先住民ホピの文化」大阪府高齢者大学『世界の文化に親しむ科』、大阪市社会福祉会館。(2016.5.13)

#### 映像作品など

伊藤敦規、鈴木紀監修 2016 『みんぱく映像民族誌 第18集——米国南西部先住民の宝飾品』、国立民族学博物館。新聞・テレビなど

「福山の資料館収蔵品に脚光——米先住民ホピのカチナ人形」『中國新聞 朝刊社会面27面』(2016.4.17)

#### データベースの整備実績

標本件数：281件

レコード件数：53,835レコード

基本項目：6,182レコード (281件×以下の11項目×2言語)

VR：40,745レコード (145画像×281件)

熟覧動画：800レコード (200熟覧×2種類の撮影方法×2種類の公開方法)

自己紹介動画：5レコード (1撮影×5人)

描き込みなど参考画像：約1,605レコード (281件×5人=1,405レコード + 約50件×4人=200レコード)

熟覧要約：400レコード (200熟覧×2言語)

熟覧コメント：2,000レコード (200熟覧×2言語×5人)

自己紹介文：10レコード (5人×2言語)

用語集：2,088レコード (522単語×3言語+1種類)

#### 「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」

代表者：野林厚志 2015年6月～2019年3月

#### 実施状況

台湾資料に関する基本情報を整理したうえで、日本語、中国語、英語による資料台帳の作成を完了した。さらに、これらの資料の海外博物館における収蔵状況の予備調査をインターネット、文献資料を活用して行い、収蔵館による標本名称の相違等に関する状況の概要を把握した。

これらの基盤データを基本コンテンツとする双方向型のデータベースプラットフォームを日本語、中国語、英語で設計し試行運用を館内で開始した。大きな問題点等がなかったことから、このプラットフォームの実用化のための検証実験もかねて、台湾において国際ワークショップ「台湾資訊跨國多語言交流平台 (台湾資料の国際多言語交流プラットフォーム)」を2016年11月26日に、台湾屏東県「原住民族委員會原住民族文化發展中心」において実施した。これは、当初、予定していたビレッジ・ミーティングを拡張するものであり、ソースコミュニティのメンバーだけでなく、地域の資料館の標本管理担当者を含めた国内外の複数の研究分野 (人類学、博物館学、情報学、博物学) の研究者ならびにソースコミュニティの当事者と多言語化した資料データベースを共同利用し、インターフェイスの検証と知識の共有の実践的手法について考えた。

年度末には年度活動の報告と次年度の計画立案をプロジェクトメンバー間で共有する全体会合を開催する。



## 成果

本年度は研究計画にしたがい、1) 台湾資料に関する情報収集のための現地調査、2) 蓄積されてきた台湾関係の資料情報の整理ならびにそれらの多言語化(日中英)、3) 双方向型多言語DBの試作ならびに試験的運用と設計に関連した国際ワークショップの実施については目的を十分達している。琉球列島関連資料については、台湾資料のプラットフォームの運用状況に応じた整理の方法を検討しており、台湾資料についてプラットフォームのモデルを構築したうえで、来年度に順次計画を進める予定である。

## 成果の公表実績

研究展示「台湾原住民族をめぐるイメージ」2016年8月4日～10月4日 日本館企画展示場  
国際ワークショップ「台湾資訊跨國多語言交流平台(台湾資料の国際多言語交流プラットフォーム)」2016年11月26日 台湾屏東県「原住民族委員會原住民族文化發展中心」

## データベースの整備実績

標本件数：5,671件  
レコード件数：73,723件

## 「北米北方先住民の文化資源に関するデータベースの構築に関する研究」

代表者：岸上伸啓 2016年1月～2017年12月

## 実施状況

申請時の予定をほぼ完了し、次年度には公開できる段階になった。本年度の研究実施状況は次の通りである。

- 民博北米資料約3,000点(北西海岸先住民版画資料697点、イヌイット版画405点、それ以外の標本資料1,936点)の基本情報(標本名、現地名、使用民族、使用地・年代、用途・使用方法、製作民族、文献情報など15項目)および写真を確認し、エクセル上に標本資料の情報の修正と付加するとともに、標本資料154点の追加撮影を実施した。
- 文化領域および民族集団ごとの民族誌情報等を収集し、データベースに盛り込む準備を進めた。
- グレンボー博物館、マニトバ博物館、ロイヤル・サスカチュワン博物館、カナダ歴史博物館、マッコード博物館、ケベック州立文明博物館、ルームズ博物館、ケンブリッジ大学考古・民族学博物館、大英博物館、北海道立北方民族博物館を訪問し、標本資料情報の確認を行なうと共に、現地語化の協力要請を実施した。
- 基本情報の英語化および現地語化を行なった。
- オンライン上で発信するための準備を情報科学の専門家と協議しながら進めた。

## 成果

本年度は、約3,000点の北米北方先住民資料の基本情報および画像情報を精査し、修正や不足部分の情報追加、および画像情報のない資料154点について写真撮影を実施した。また、国内外10博物館を訪問調査し、連携ネットワークを構築するとともに、標本資料の英語化・現地語化や標本資料情報の高度化を行なった。とくに、カナダのプリティッシュコロンビア大学人類学博物館とは学術協定締結のための交渉を行なった。以上の成果に基づいて、エクセルを利用してデータベースの基本形を構築し、公開のための準備を進めた。

## 成果の公表実績

### 出版

岸上伸啓(2016)「国立民族学博物館におけるフォーラム型情報ミュージアム構想について」伊藤敦規編『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』(SER135号) pp.15-23, 大阪：国立民族学博物館。

Kishigami, Nobuhiro (2016) "An Info-Forum Museum for Cultural Resources of the World: A New Development at the National Museum of Ethnology" Ito, Atsunori (ed.) *Re-Collection and Sharing Traditional Knowledge, Memories, Information, and Images: Challenges and the Prospects on Creating Collaborative Catalog* (SER 137), pp.25-33, Osaka: National Museum of Ethnology.

岸上伸啓(2017)「プロジェクト 民博收藏の北米北方先住民民族資料の高度情報化と情報発信」『民博通信』157：

#### データベースの整備実績

標本件数：3,038件

レコード件数：45,570件（15項目×3,038件）

#### 「民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討」

---

代表者：齋藤玲子 2016年4月～2020年3月

#### 実施状況

データベースの基礎情報として、民博が所蔵しているアイヌ資料のすべてについて、既存の標本資料詳細データベース（館内版）の情報をもとに、旧蔵者の台帳、購入時の書類・関連文献等とつきあわせ、データの入力・修正作業を進めた。その際、旧蔵者の台帳、購入時の書類、関連文献などで、データ化されていないものをスキニングした。また、情報がほとんど付されていなかった平取町二風谷の故貝澤守幸氏旧蔵資料約200点について、遺族を民博に招聘して資料を実見しながら調査をおこなった。

関連文献のなかでは、東京大学理学部人類学教室の資料1,000点（アイヌのみではなく、世界各地の資料）を掲載した『内外土俗品図集』（長谷部言人監修・東京人類学会編纂／寶雲舎 1938-39年発行）に、標本資料詳細データベース（館内版）に入力されていない詳細な情報が掲載されていることから、テキスト化をおこなった。

加えて、英訳の準備として、関連文献から資料の英名を拾い出す作業をおこなった。

また、館外の大学、博物館、アイヌ関係団体等の研究者・職員を共同研究員として、有用なデータベースにするための議論をおこなった。

#### 成果

上記のとおり、本年度はデータベース構築のための準備作業として、基礎情報の収集や既存のデータベースの修正・追加入力を進めた。標本資料について書かれた文献を収集しつつ、スキニングもおこなった。

また、平取町二風谷の故貝澤守幸氏旧蔵資料約200点については、情報がほとんど付されていなかったが、遺族（守幸氏の妻と子たち）を民博に招聘して資料を実見しながら調査をおこない、製作者や製作・収集時の年代・状況などの情報が得られた。

初年度として予定していた準備作業は、ほぼ実施することができた。

#### 成果の公表実績

「アイヌ民族資料の活用のために」『民博通信』155：10-11。

#### データベースの整備実績

東京大学理学部人類学教室旧蔵「土俗品目録」のうち北海道・千島・樺太資料のデータ

標本件数：916件

レコード件数：30,633件

#### 「中国地域の文化展示のフォーラム型情報ミュージアムの構築」

---

代表者：横山廣子 2016年4月～2018年3月

#### 実施状況

新構築後の中国地域の文化展示場での展示をウェブ公開できる情報ミュージアムのシステムを構築することが本プロジェクトの目的である。ウェブ公開により、博物館まで来ることができない一般の方々に、広く展示を見ていただくことが可能になる。同時に、国外の研究者やソースコミュニティの人々などとの間での双方向の情報交換をおこない、それを通じて標本資料に関する情報の充実もはかる。

今年度の最初の作業として、本プロジェクトで対象とする展示資料の範囲を定め、展示場とは異なるウェブ公開の特質を考慮してウェブ用の展示単位を検討し、確定する作業を実施した。さらに本情報ミュージアム・システムの全体デザインの検討も行なった。その結果、当初、目指していて日本語および中国語での公開に加え、日本語、中国語、英語の3言語で公開する方針を定めた。中国語は字体の異なる簡体字、繁体字があり、その両方の字体で

の公開をするため、合計4種類の文字によるウェブ公開用のデータベースを作成した。

具体的には、展示単位ごとのセクション、サブセクション、コーナーなどの解説文、写真および描画パネルのキャプション、展示資料のキャプションについて、3言語、4フォントでの文字データを揃えるための、翻訳および整理作業をおこなった。

また、展示単位ごとのウェブ公開用の写真の構成を検討し、システムにアップするためにフォルダ別に写真映像データを整理した。展示場の限られたスペースに比べ、ウェブ上では必要に応じて、展示場よりも多くの写真を掲載することが可能である。実物そのものを直接見ることができないという情報ミュージアムに弱点を、写真を中心とする展示情報を付加することで補うことができた。

## 成果

対象とする展示資料の確定ならびに展示単位確定作業を通じて、合計784の展示単位を確定した。中国地域の文化展示場で展示されている標本資料数は、1,070件近くある。標本登録上の標本資料単位数に比べて、展示単位数が少ないのは、一つのセットとしてウェブ上で公開したほうが効果的な場合、複数の標本資料を一つの展示単位としてまとめることにしたためである。また、標本資料の展示がなく、写真のみによって情報を伝えている展示もあり、その場合は、写真資料を一つの展示単位とした。

展示をウェブ上の情報ミュージアムとして提示する場合、展示場内のレイアウトとは異なる配慮が必要であり、プロジェクト・チームで協議を重ねて、ウェブ公開に適合した提示方法を編み出した。

当初は、展示資料のソース・コミュニティの主たる言語である中国語と日本語での情報発信を想定していたが、作業の進展に沿って検討した結果、中国語、英語と日本語の3言語での公開が可能であり、目指すべき目標であると判明した。3言語の文字情報の整理ならびに翻訳作業を完了し、次年度にウェブ・システムのデザインを検討し、システムを構築して公開する準備が整った。

## データベースの整備実績

標本件数：標本資料数 1,068件（784展示単位）

レコード件数：5,500件

## 「日本民族学会附属民族学博物館（保谷民博）資料の履歴に関する研究と成果公開」

代表者：飯田 卓 2016年4月～2018年3月

## 実施状況

4月17日（日）、7月17日（日）、12月3日（土）の3回にわたって研究会を開催し、1975年に民博が国文学研究資料館史料館（旧文部省史料館）から受け入れた保谷民博資料のデータベースを充実し公開していく手順を話しあった。その結果、現行の標本資料詳細情報データベースを更新していくことのほか、資料収集の状況がわかるよう収集者や寄贈者の人名データベースを別途構築・公開していくことが必要だという合意を得た。

研究会では、人名データベースと資料データベースのそれぞれについて、仕様や項目立て、運用方針などを話しあった。いずれのデータベースも2016年度中に運用を開始し、メンバーがコメントを書きこむというかたちで公開にむけての準備をおこない、2017年度にはコメントを参照しながら公開対象となるレコードを取捨選択する方針を決定した。

## 成果

上記の研究会での話しあいにもとづいてシステム構築をおこない、まずはメンバー間でデータベースのひな型を共有して、それぞれが持つ情報をコメントとしてデータベースに書きこめるようにした。人名データベースはすでに2016年12月に運用を開始し、コメントが蓄積されつつある。ここに書きこまれたコメントは、2018年3月頃におこなうデータベース更新において反映される予定である。また、資料データベースは2017年3月に運用を開始する予定である。

## 成果の公表実績

飯田卓・朝倉敏夫（編）『日本民族学会附属民族学博物館（保谷民博）旧蔵資料の研究』（国立民族学博物館調査報告として刊行予定）

#### データベースの整備実績

標本件数：14,088件

レコード件数：標本データベース：約2万件

人名データベース：648件

#### 「楽器に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」

代表者：福岡正太 2016年4月～2018年3月

#### 実施状況

楽器資料についてのデータを研究機関間で共有し、共同でデータの付与や修正をおこなえるようにすることを目指し、以下の作業を進めた。

- (1) データ共有と共同でデータの付与や修正をおこなうシステムの開発  
ウェブ上でデータを共有し、登録ユーザー間で情報の交換をできるシステムの開発を進めている。2016年度内に開発できる予定である。
- (2) 民博所蔵楽器のデータ作成  
民博が所蔵する楽器資料の約5,400点について、以前作成した楽器データベースから楽器分類コードのデータを移行し、さらに楽器学上の名称（日・英）を付与する作業を進めている。また、まだ楽器分類コードが付与されていない楽器資料約800点について、コードの付与を進める。2016年度内に終了する予定である。
- (3) 関係研究機関等との連携  
データの共有と共同でのデータ付与・修正のため、浜松市楽器博物館と協力関係を築いた。2019年9月に開催予定の世界博物館大会において、成果を発表することを目標として、さらに関係機関に協力を呼びかけていくこととした。
- (4) 寄贈受入予定の楽器資料の調査および運搬  
神戸市の立田雅彦氏所有の楽器コレクション等を、関係機関間で情報を共有しながらデータ付与を進めるモデルケースとするため、寄贈受入を目標として話し合いおよび楽器の調査をおこなった。大量のコレクションであるため、民博に楽器を運搬し、フォーラム型情報ミュージアムのシステムを利用して、リスト化、データ付与等をおこなうこととした。

#### 成果

楽器データの共有と共同でのデータ付与については、その実現を目指したシステムの開発を進めており、年度内に核となるシステムが開発できる予定である。共有を目標とするデータのうち民博所蔵楽器資料については、順調にデータ作成を進めている。他機関等の楽器データの共有については、楽器資料データベースを作成公開している機関が少ないこともあり、今後の課題として残っている。引き続き、情報収集、協力呼びかけをおこなっていく。共同でのデータ付与については、モデルとする楽器コレクションが当初の見込み以上に大量であるため、2年度に分けて運搬し、基本システムの稼働後2年度目の当初から着手する予定である。特定のテーマに沿って楽器データのコレクションを作成し、映像音響資料等を関連づけるシステムについては、2年度目に開発をおこなう予定である。ただし、前述の楽器コレクションの受け入れとデータ作成に、当初想定した以上の資源を割くことが必要であるため、計画の変更をおこなう可能性もある。

#### データベースの整備実績

標本件数：5,400件

レコード件数：16,200件

#### 「日本の文化展示場関連資料の情報公開プロジェクト」

代表者：日高真吾 2016年4月～2018年3月

#### 実施状況

本プロジェクトでは、日本の文化展示場で展示している資料について、既存の標本資料目録情報よりも、より詳細な研究情報をデータベースで公開することを目指すものである。また、日本の文化展示場に関連する書籍等についても調査し、それらを参考文献リストとして公開し、大学生、あるいは大学院生が展示から文化人類学、民俗学



を学ぶ上で、有益な情報を得ることのできるシステムを整えることも到達目標のひとつとするものである。

本年の研究では、WEB上で展開されている地方博物館のDBの現状について調査をおこなった。その結果、現状の地域博物館においては、まだDBを公開できる環境にないことが明らかになった。その理由として、日進月歩で開発の進むWEBサービスに対応できるPCの更新が追い付いていないことが大きな要因となっていることが明らかになり、地方博物館所蔵の日本関連資料のDBの相互乗り入れは厳しい環境であることが明らかになるとともに、民博で展開しようとしている本DBの検索項目についての注目の高さについて改めて認識した次第である。また、本プロジェクトでは動画の導入も視野に入れ、フォーラム型情報ミュージアム事務局と検討を重ねたが、本格的な動画を導入するにあたっての肖像権の問題、サーバーへの負荷などを考慮し、今回のプロジェクトでは一旦中断し、次の課題として取り扱うことを確認した。

以上の結果、今年度はDBで示す資料情報の項目について再整理し、各項目についての入力活動を中心におこなった。

## 成果

今年度の研究成果としては、WEB上で展開されている地方博物館のDBの現状について調査をおこなった。その結果、地域博物館においては、現状、WEB上でDBを公開できる環境にないことが明らかになった。その理由として、日進月歩で開発の進むWEBサービスに対応できるPCの更新が追い付いていないことが大きな要因となっていることが明らかになった。この点は、想定するユーザー側のPCの動作環境等についても併せておこなっていく必要があることを示していると考えられる。

次に、本DBで掲載する情報項目について、外部団体として協力いただいている国立歴史民俗博物館、東北歴史博物館、東北学院大学、枚方市旧田中家鋳物資料館のメンバーと改めて、検索項目について意見交換をおこなった。その結果、DBで掲載する基本情報として、「展示資料名」、「標本資料名」「標本番号」、資料の収集地や製作地を示す「地域」（現在の都道府県市町村まで）、資料の幅（W）×奥行（D）×高さ（H）と重量を示す「寸法・重量」、資料を民博に受け入れた西暦年度の「受け入れ年度」、資料の写真情報を示し、さらに研究詳細DBに記述されている研究情報、これまで論文等で紹介された場合の書誌情報について紹介することとした。さらに、本プロジェクトでは、文化庁文化財保護部監修、祝宮静・関敬吾・宮本馨太郎編集の『日本民俗資料事典』（1969年刊行）が提示している民俗資料の大分類項目に準じながら、資料分類をおこない、基本的な分類項目とすることを確認した。

また、本DBに関連するDBとして、サブセクション東北地方のくらしのなかの、東日本大震災コーナーで展開する津波の記憶DBを先行的に完成させ、来年度から公開する準備を整えた。

## 成果の公表実績

2016 日高真吾 「日本の文化展示場における資料情報の活用に向けて」『民博通信No.155』pp.12-13 2016年12月26日 国立民族学博物館

## データベースの整備実績

標本件数：2,022件

レコード件数：2,022×33=66,726件

## 「民博所蔵『ジョージ・ブラウン・コレクション』の総合的データベースの構築（フェーズⅡ）」

代表者：林 勲男 2016年12月～2017年3月

## 実施状況

G. B. コレクションを構成する約3,000点の民族誌資料は、パプアニューギニア1,532点（トロブリアンド諸島287点、ビスマルク諸島615点を含む）、ソロモン諸島652点、フィジー138点、サモア240点が主なものであり、これらだけで2,564点を数える。

2014年度と2015年度の2年間に、フィジーの物質文化研究者、パプアニューギニアの植物研究者、サモア研究者が資料の熟覧をおこない、データベース情報の修正・加筆をおこなったのに続いて、本年度は、予算の追加措置により、これまでの熟覧者から提供された新たな情報を日英両言語で利用できるようにした。

また、パプアニューギニアに続いて点数の多いソロモン諸島の資料652点に関して、同地域を専門とする考古学者による熟覧、情報提供を依頼した（2017年3月21日から24日に来館予定）。

第1期に実施した大英博物館、セインズベリー・センター、ディスカバリー博物館、ボウズ博物館での調査で得

たデータをデジタル化し、プロジェクトメンバーで共同作業ができる体制を作った。

さらに、第1期の英国での調査にて収集した、コレクションの購入・売却、展示、他の博物館との間でおこなわれた資料の交換等に関するデータのデジタル化とその分析、公開に向けての英国の所有者（個人・組織含む）との検討作業をおこなった。

## 成果

データベース内のフィールドとして、コアデータ・フィールド、プロジェクトメンバーおよび協力者による追加データ・フィールド、インデックス・フィールドを設け、データを整理した。また、それぞれのフィールドのデータを日英両言語で利用できるようにした。将来的にはインデックスの自動化を考えている。

データベースの一般公開に向けて、研究協力者からの提供データに関しては、アクセス制限や、引用等のデータ使用の規定の掲載など、検討はしているが結論に至っていない。

英国やニュージーランドの博物館等が所蔵する資料に関するデータの参照についても、先方と検討中である。

## 成果の公表実績

Matthews, Peter (2017) Integrating local plant knowledge into wider knowledge systems: an example of work-in-progress for the George Brown Collection Info-forum Project, paper presented on 14<sup>th</sup> Feb, for Environmental Knowledge and Material Culture

## データベースの整備実績

標本件数：2,999件

レコード件数：32,989件

## 共同研究

## 2016年度の応募・採択状況

課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究

課題2：本館の所蔵する資料に関する研究

研究会の区分		2016年度				
研究代表者	課題区分	申請	採択	継続	合計	
一般	館内	課題1	4	4	7	14
		課題2	1	1	2	
	客員	課題1	0	0	0	1
		課題2	1	1	0	
	公募	課題1	4	2	15	18
		課題2	0	0	1	
若手	課題1	4	2	1	4	
	課題2	0	0	1		
計		14	10	27	37	

## 共同研究課題一覧

○印は公募による実施課題、●印は若手による実施課題

研究課題	研究代表者	課題区分	研究年度
聖地の政治経済学——ユーラシア地域大国における比較研究	杉本良男	1	2013-2016
米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究	伊藤敦規	2	2013-2016
○ 表象のポリティックス——グローバル世界における先住民／少数民族を焦点に	窪田幸子	1	2013-2016
○ エージェンシーの定立と作用——コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望	杉島敬志	1	2013-2016
○ 宗教人類学の再創造——滲出する宗教性と現代世界	長谷千代子	1	2013-2016
○ 東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化	福岡まどか	1	2013-2016
○ 近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開	吉江貴文	1	2013-2016
現代「手芸」文化に関する研究	上羽陽子	1	2014-2017
近世カトリックの世界宣教と文化順応	齋藤 晃	1	2014-2017
家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に	森 明子	1	2014-2017
○ 政治的分類——被支配者の視点からエスニシティ・人種を再考する	太田好信	1	2014-2017
○ 生活用品から見たライフスタイルの近代化とその国別差異の研究	鏡味治也	1	2014-2016
○ 呪術的实践=知の現代的位相——他の諸実践=知との関係性に着目して	川田牧人	1	2014-2017
○ 資源化される「歴史」——中国南部諸民族の分析から	長谷川清	1	2014-2017
○ モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究——国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に	是澤博昭	2	2014-2017

● 演じる人・モノ・身体——芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点	吉田ゆか子	1	2014-2016
チベット仏教古派及びボン教の護符に関する記述研究	長野泰彦	2	2015-2018
グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究	松尾瑞穂	1	2015-2018
驚異と怪異——想像界の比較研究	山中由里子	1	2015-2018
応援の人類学——政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌	丹羽典生	1	2015-2018
○ 考古学の民族誌——考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究	ERTL, John	1	2015-2018
○ 宇宙開発に関する文化人類学からの接近	岡田浩樹	1	2015-2018
○ 放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究	中原聖乃	1	2015-2018
○ 医療者向け医療人類学教育の検討——保健医療福祉専門職との協働	飯田淳子	1	2015-2018
○ 個——世界論——中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム	齋藤 剛	1	2015-2018
○ 確率的事象と不確実性の人類学——「リスク社会」化に抗する世界像の描出	市野澤潤平	1	2015-2018
● 高等教育機関を対象にした博物館資料の活用に関する研究	呉屋淳子	2	2015-2017
捕鯨と環境倫理	岸上伸啓	1	2016-2019
世界のピースをめぐる人類学的研究	池谷和信	2	2016-2017
もうひとつのドメスティケーション——家畜化と栽培化に関する人類学的研究	卯田宗平	1	2016-2018
会計学と人類学の融合	出口正之	1	2016-2018
「障害」概念の再検討——触文化論に基づく「合理的配慮」の提案に向けて	廣瀬浩二郎	1	2016-2018
物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究	縄田浩志	2	2016-2019
○ 音楽する身体間の相互作用を捉える——ミュージッキングの学際的研究	野澤豊一	1	2016-2019
○ 現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究	浮ヶ谷幸代	1	2016-2019
○● 消費からみた狩猟研究の新展開——野生獣肉の流通と食文化をめぐる応用人類学的研究	大石高典	1	2016-2018
○● テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究	平田晶子	1	2016-2017

#### 「聖地の政治経済学——ユーラシア地域大国における比較研究」

本研究は、聖地の現代的意義について、その多様性と共通性を明らかにするための比較研究である。そのさい、聖性の定義に関しては基本的に社会学的・社会人類学的視点に立ち、比較の対象をインド、中国、ロシアに限定し、当該地域における聖地の現代的意義とその歴史的背景について比較検討しようとするものである。西欧近代世界において、宗教伝統は再定義され、それが自己意識化、実体化され、輓近のポスト・モダン状況のもとでさらに再々定義され、イデオロギーとして固定化、原理主義化される事態となっている。こうした現代的状況のなかで聖地は、実体化・イデオロギー化された「伝統宗教」の金城湯池であり、また遺産化・商品化された「消費宗教」の花園である。本研究では、いわゆるユーラシア地域大国、ロシア、中国、インド、における聖地の政治経済学的研究を通じて、宗教の現代的意義を問い直すとともに、西欧主導の聖俗論、宗教論を根本的に再考することが主要な目的である。

研究代表者 杉本良男

班員 (館内) 韓 敏 河合洋尚 松尾瑞穂

(館外) 川口幸大 後藤正憲 小林宏至 桜間 瑛 高橋沙奈美 前島訓子 望月哲男



## 研究会

2016年6月26日

櫻間 暎（東京大学）「創られるイスラーム聖地——ボルガル遺跡の復興とタタルスタン共和国」

杉本良男（国立民族学博物館）「聖人化されるガンディー」

井田克征（金沢大学）「聖地と物語——現代インドにおけるマハースバーブ派の事例から」

2016年7月28日 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター

井上岳彦「聖地創造の夢——誰が寺院や仏塔を建てているのか」

河合洋尚（国立民族学博物館）「聖地言説と信仰実践——中国梅県の呂帝廟をめぐる『聖地』の複数性」

小林宏至（山口大学）「神様の里帰り——客家地域における閩南文化」

井田克征（金沢大学）「聖地研究における語りの重層性について」

2017年2月18日

松尾瑞穂（国立民族学博物館）「ヒンドゥー聖地の資源——祖先祭祀の隆盛と在地社会の変容」

前島訓子（名古屋大学）「インド『仏教聖地』のヒンドゥー社会」

後藤正憲（北海道大学）「聖なるものはどこにある？」

杉本良男（国立民族学博物館）「総括——聖なるものの行方」

## 成果

本年度は共同研究の最終年度にあたり、研究成果のとりまとめに向けて都合3回の研究会を実施した。また、本共同研究に関連して、おもに今後の研究の進展を目指した共同研究プロジェクト「ユーラシア地域大国における聖地の比較研究」においても2017年1月に研究会を、3月には北大プロジェクトの総括の小シンポジウムをいずれも北海道大学で開催した。本年度の各研究会は、成果のとりまとめを目途として、とくにユーラシア地域大国（ロシア、中国、インド）における各地域の事例研究から相互の比較に向けた展開の可能性と、各地域を横断した「場所と空間」、「語りと現実」、「地域と国家」などの基本概念の整理とを意識して、全体のとりまとめに向けた議論が行われた。その結果、硬軟取り混ぜながらも「社会主義体制」を経験した各地域における、宗教、聖・聖性などの基本概念そのものの歴史性、地域性や、グローバル経済化の影響による聖地化、観光化などの実相とそこに惹起される様ざまな問題点が浮かび上がった。

## 「米国本土先住民の民族誌資料を用いるソースコミュニティとの協働関係構築に関する研究」

近年のITおよび交通網の整備により、世界の「秘境」は急激に消滅しつつある。現在ではかつての「秘境」に暮らす人々は、研究者に直接問い合わせをすることが可能で、民族学系の博物館にその民族集団に関連する資料情報の提供を求めたり、熟覧や適切な管理を依頼することもある。その意味で、現在、民族学系の博物館や研究者は、対象として設定するユーザー（来館者・資料等の利用者や研究成果の読者）を、来館圏居住者や学界だけではなく、資料を製作したソースコミュニティの人々にも拡大していく必要性に迫られており、それを実施するための協働のあり方を模索することが緊急の課題となっている。本研究の目的は、「調査者・被調査者（米国先住民）との関係」、「知的財産管理」、「所蔵先機関と研究者との協働」を柱として、博物館資料をきっかけとするソースコミュニティの人々と研究者や所蔵先機関との新たな関係性構築のあり方を模索することにある。そのために、米国本土先住民資料を所蔵する日本国内のいくつかの民族学系の博物館を事例として、資料情報のソースコミュニティの人々との共有のための協働に関する思想を、社会学、博物館学、歴史学、社会心理学、文化人類学などを専門とする研究者と所蔵先機関とで検討・考察する。

研究代表者 伊藤敦規

班員（館内）岸上伸啓

（館外）阿部珠理 大野あずさ 川浦佐知子 佐藤 円 谷本和子 玉山ともよ 野口久美子

水谷裕佳 宮里孝生 山崎幸治

## 研究会

2017年2月25日

梅谷昭範（天理大学附属天理参考館）「天理参考館が収蔵する北米先住民資料の沿革と今後の活用について」

渡辺浩平（立教大学大学院）「『美』を織る——ナバホ・ラグをめぐる関係の複数性と展示展開の可能性」

全 員 成果論文集の読み合わせ

## 成果

3年半の共同研究会のあいだに、合計12回の研究会を開催し、19名による発表を行った。

理論や米国全土を対象とした事例は本共同研究のメンバーの報告を元に議論し、同時並行的に実施してきた民博のフォーラム型情報ミュージアムプロジェクト（「北米先住民製民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有」と連動させることで、共同研究での議論を参考にしながら後述する民博等の収蔵する資料熟覧調査という形で実践に移すことができた。

直接的な研究成果としては、共同研究会の参加メンバー11名による原稿を現在集めている最中で、それを伊藤敦規（編）『(仮題)先住民との「協働」研究』としてまとめる予定である。本書を通じて、先住民と博物館、先住民とアカデミアという枠組みの中でどのような議論や展示を含めた実践が行われているかについて、研究倫理や協働といった視覚に経て見取り図を描くことを試みる。

それ以外にも、本研究会と関係する国際ワークショップを4回開催した。一つは2014年1月28日と29日に民博で開催した「伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望」で、その成果は伊藤敦規（編）2016『国立民族学博物館調査報告（SER）』137号として出版した。二つ目は2014年10月5日から10日まで六日間にわたって民博で開催した「資料熟覧——方法論および博物館とソースコミュニティにとっての有効活用を探る」およびその後の10月17日まで継続して行った資料熟覧調査である。三つ目は2015年4月16日と17日に民博で開催した「資料熟覧——資料熟覧のためのソースコミュニティ招聘プロセスと人類学的ドキュメンテーションの検討」、四つ目は2016年2月11日と12日に民博で開催した「フォーラム型情報ミュージアムのシステム構築に向けて——オンライン協働環境作りのための理念と技術的側面の検討」である。つまり、共同研究の二年度目から、実際に米国本土先住民を民博やリトルワールドなどの日本の民族学博物館に招聘し、収蔵資料を対象とした熟覧調査を協働で行うことができた。

ここでいう協働とは、先住民コミュニティと資料を収蔵する博物館の双方が、その行為をすることによっていかなる恩恵を得ることができるかを具体的に設定できるかどうかを鍵となる。資料情報の高度化や資料収集担当者以外の博物館職員に教育といった博物館側にとってのメリットと、ソースコミュニティ側にとっては自文化に関する自己表象の実現と情報管理への主体的参加（カルチャル・センシティブティへの配慮の指摘）などがこれまでにない両者の利点として理解・認識されたために、協働が実現した。ただし、研究者の所属（例えば大学勤務か博物館職員か）や、学問分野と研究手法（歴史学や考古学、人類学や心理学や社会学では対象とする人々との接し方や媒体が異なる）によっては必ずしも協働が実現されないこと、同じ範疇に属す民族学博物館であっても専門知識を有する学芸員スタッフの過去と現在の在籍の有無なども協働を成立させるための鍵となることも明らかになった。さらに、協働が実現するためには学問的関心以外の政治関係や予算といった要素も大きく関わることが他の民族集団や実践事例から報告されたので、そうした面にも配慮する必要性が明らかになった。

### 「表象のポリティックス——グローバル世界における先住民／少数者を焦点に」

本研究では、先住民／少数者集団が、彼らを包摂する主流社会において様々に表象されている場面に注目する。彼らが絵画や工芸品、布、衣装などを製作し、それらが市場にのり、時には国際的な注目をあつめる。こうしたモノによって表象されることで、少数者には経済的恩恵がもたらされ、地位の向上につながることもある一方で、彼らを本質化する圧力ともなり、また商品化によって表象が希薄化される場面もある。このような表象のポリティックスの違いは、少数者集団に対する各主流社会の対応と国際社会を背景にしているとともに、グローバリゼーション、ネオリベラルの動きなど多層的な社会的状況の絡み合いの中でおきている。この共同研究では、このような動態の現場に注目することによって、先住民／少数者の生のリアリティに迫り、主流社会と少数者の関係の諸相を具体的な形で明らかにすることをめざす。

研究代表者 窪田幸子

班員（館内）	上羽陽子	齋藤玲子	竹沢尚一郎	野林厚志			
（館外）	青木恵理子	池本幸生	大村敬一	川崎和也	新本万里子	田村うらら	中谷文美
	中村香子	名和克郎	深井晃子	松井 健	丸山淳子	宮脇千絵	吉田ゆか子
	渡辺 文						

## 研究会

2016年7月9日

窪田幸子（神戸大学）「ワンロード展のアボリジニ表象を考える」

展示視察

質疑応答、討議

野林厚志（国立民族学博物館）「デザインされる原住民族イメージ——台湾の学生創作ポスター展を事例に」

質疑応答、討議

2016年10月23日

これまでの成果とこれからの進め方

宮脇千絵（南山大学）論文の概要

コメント1 & 2

渡辺 文（同志社大学）論文の概要

コメント1 & 2

川崎和也（神戸学院大学）論文の概要

コメント1 & 2

2016年11月26日

これまでの成果とこれからの進め方

深井晃子（京都服飾文化研究財団）論文の概要

コメント1 & 2

吉田ゆか子（東京外国語大学）論文の概要

コメント1 & 2

新本真理子（広島大学）論文の概要

コメント1 & 2

2017年2月13日

これまでの成果とこれからの進め方

松井 健 論文の概要

コメント1 & 2

中谷文美（岡山大学）論文の概要

コメント1 & 2

中村香子 論文の概要

コメント1 & 2

## 成果

本年度は、共同研究のとりまとめを目指して、それぞれの共同研究者のこの研究にかかわる論文を完成してもらうことを目指した。全体で4回の研究会を持ったが、それぞれの回で、2から3本ずつの論文を全員であらかじめ回覧し、それぞれの論文を担当するコメンテーターを依頼し、議論を行った。まだ全員の論文の完成にはいたっていないが、およそ8割がたの論文が出そろった状況になってきている。各研究会でのコメントを踏まえて、7月までに完成稿を提出してもらう予定である。これを取りまとめ、共同研究の出版につなげる予定である。

## 「エージェンシーの定立と作用——コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望」

人間が営む生活の諸局面は、特定の具体的な権威者を中心とするコミュニケーションとして成立しており、そこでは、規範や信念への随順やその異端的解釈の抑制が図られるとともに、生々しい実在感をもち、対他的に作用する非——人間存在を含むエージェンシーが定立され、作用する。現代世界において、精霊は呪医を権威者とするコミュニケーションでは人に病気をもたらすエージェンシーとして働くかもしれないが、近代医療関係者はそうした病因を否定するだろう。同様に、米国の銃規制運動において銃は「人を殺す」エージェンシーとされるが、全米ライフル協会はそうしたエージェンシーの定立に強く異議をとる。

本共同研究では、こうしたエージェンシーとコミュニケーションとの等根源性に留意しながら民族誌研究をおこなうなかで、エージェンシーの定立と作用について適切に語るための一群の概念を開発する。そうすることで、個別におこなわれる傾向にあったモノ、技術、身体、動物に関する近年の研究と、親族、交換、儀礼、信仰、医療、土地制度などに関わるこれまでの研究を架橋する、通地域的・通研究对象的であると同時に、民族誌的データを豊かに内包する次世代人類学の理論基盤を整備する。

研究代表者 杉島敬志

班員（館内）飯田 卓

（館外）東賢太郎

小川さやか

片岡 樹

金子守恵

桑原牧子

里見龍樹

高田 明

津村文彦

中村 潔

馬場 淳

森田敦郎

## 研究会

2016年12月17日

津村文彦（名城大学）「開かれたコミュニケーションの交差するところ——東北タイの病ビットクラブーン」

里見龍樹（一橋大学）「『育つ岩』——コミュニケーション／エージェンシーの限界をめぐる試論」

杉島敬志（京都大学）「コミュニケーションとエージェンシーの定立と作用に関する諸考察」

総合討論

2017年1月7日

飯田 卓（国立民族学博物館）「知識を共有するとはどのようなことか——マダガスカルの漁撈からコミュニケーションを考察する」

高田 明（京都大学）「遊びと複ゲーム状況——サンにおける養育者——子ども間相互行為の分析から」

森田敦郎（大阪大学）“Multispecies Infrastructure: Infrastructural Inversion and Involutionary Entanglements in the Chao Phraya Delta, Thailand”

2017年1月29日

中村 潔（新潟大学）「バリにおけるムラ（慣習村）の概念について」

桑原牧子（金城学院大学）「彫られたティキをめぐる——タヒチの偶像崇拜と否定神学」

金子守恵（京都大学）「捨てられない『もの』と『ゴミ』のあいだ——エチオピア西南部における使い終えた授業ノートをめぐる人びとのやりとり」

馬場 淳（和光大学）「パプアニューギニアにおける書類の意味と力——エージェンシーの定立と作用に関する研究報告」

総合討論

## 成果

2016年12月から2017年1月にかけて3回の研究会を開催し、毎回ごとに共同研究のメンバー3～4名が研究発表をおこない、発表内容と関連する議論をおこなった。それぞれの発表は、共同研究の成果報告論集のために執筆する論文の構想を示し、コメントを得る目的で用意されたものであり、発表につづく議論と総合討論では、成果報告論集の大まかな方向性を自覚し、これから執筆する論文間のコンシステンシーを高めるために必要で有益な意見交換をおこなうことができた。こうした意見交換は、今後もオンラインストレージサービスや情報共有サイトの運営をとおして継続する。また、2016年1月30日に開催した最終回の研究会では、成果報告論集の執筆と編集のスケジュールを話しあい、共同研究メンバーの合意をえるとともに、本共同研究に関心をおもちいただいている出版社の編集者にご参加いただき、成果報告論集の編集と出版を円滑にするためのアドバイスを得るとともに、若干の意見交換をおこなった。

### 「宗教人類学の再創造——滲出する宗教性と現代世界」

合理化を推進する近代主義の影響のもと、これまで多くの地域において、人々は「宗教」を政治・社会制度から排除しようとしてきた。しかし近年、宗教原理主義や公共宗教論の盛行、宗教伝統の復興や再評価などに見られるとおり、いったん隔離したはずの「宗教」がわれわれの社会へと滲み出し、新たな姿を見せつつある。その場合の「宗教」はかつての伝統的な姿のままとは限らず、環境思想のような新たな倫理・道徳の底流に見え隠れしたり、観光資源として人目を驚かせたりしている。

このように、伝統宗教のみならず、従来の「宗教」イメージとは異なりながらどこか宗教性を感じさせる新たな現象をも視野に取り込み、現代世界の「宗教」状況をよりよく理解することが、本研究の目的である。また、その研究実践を通じて、個々の宗教的世界観の研究に特化した感のある日本の「宗教人類学」を、上記のようなグローバルな潮流に対応したものへと鍛えなおしたい。

研究代表者 長谷千代子

班員（館内）藤本透子



(館外) 岡本亮輔 加藤敦典 門田岳久 川口幸大 川田牧人 神原ゆうこ 國弘暁子  
内藤順子 西村 明 藤野陽平 別所裕介 溝口大助 宮本万里 矢野秀武

## 研究会

2016年 6月18日

長谷千代子 諸々のお知らせ

島田裕巳(東京女子大学)「宗教消滅 世俗化する世界のこれから」

西村 明(東京大学)「政教分離フィルター濾過後の残留宗教性について——戦後の公的慰霊再考」

2016年 6月19日

神原ゆうこ(北九州市立大学)「コミュニティ再生という希望——スロヴァキア地方都市における NGO と宗教団体の社会貢献活動にみる『社会的なるもの』について」

矢野秀武(駒澤大学)「道徳心理学研究と宗教(概念)論」

2016年11月19日

長谷千代子(九州大学)今後についてのお知らせ

長谷千代子(九州大学)「滲出する宗教性と現代世界を考える」

藤本透子(国立民族学博物館)「聖者(アウリエ)となった学者——カザフスタンにおける聖者崇敬とマシュフル・ジュスプの墓廟の変遷」

2016年11月20日

宮本万里(慶應義塾大学)「南アジアの肉食と宗教性——神格化される牛と周縁化される牧畜民」

河西瑛里子(大阪物療大学)「ネオペイガニズムにおける死者との関わり方から滲み出す宗教性」

川田牧人(成城大学)「民間信仰・民俗宗教・民俗信仰」

総合討論

## 成果

研究会最終年度は、まず成果論集の作成に向けて、「宗教」「宗教性」などの概念の使い方やそれが「滲出する」という表現でもっとも捉えるべきは具体的にどういう現象かといったことについて議論した。全員が完全に納得のいくところまでは議論を尽くせなかったが、宗教という言葉を各フィールドにおける近代的な概念と制度に限定して使い、最近の社会・政治状況の変化によってそこからずれてきたものを「滲出する宗教(性)」と捉えること、少なくとも「宗教性」を人間に具わった本能的なもののように捉えないことを方針とした。個人研究発表では、「宗教」は消滅するという議論(島田氏)、もしくは今後「宗教」より「道徳」がキーワードとなりうる可能性についての議論など(神原氏、矢野氏)に接し、その可能性と問題点について議論した。また、既存の「宗教」の枠組がその時代の政治状況に合わせて変形する事例(藤本氏)や、慰霊の儀礼から宗派性を取り去った後になにが現われるかについての考察(西村氏)なども紹介された。このほか、今まで在外研究のため発表機会のなかった宮本氏や、本研究会のテーマに共鳴して論集の執筆者に参加することとなった河西氏にも発表していただいた。

## 「東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化」

この研究は東南アジアの様々なポピュラーカルチャーを対象としている。研究の目的はグローバル化する現代社会における文化表現や身体表象の考察を通して、ジェンダー、エスニシティ、言語、宗教、階級などの差異が表現され、アイデンティティが生み出されるプロセスを明らかにすることである。対象地域の東南アジアは、その多くが20世紀後半に植民地支配からの独立を果たした国民国家であり、多様な民族文化を擁する国家としてのアイデンティティが模索されてきた。一方でポストコロニアル時代の国民国家は、民族や宗教の違い、地域間の格差、社会階級やジェンダーの格差などの様々な違いを抱えてきた。グローバル化する現代社会の中で、文化的表現の多くは「脱中心化」、「脱地域化」、「商品化」、「断片化」という状況を経験し、それらはしばしば既存の文化的境界を越えて流通し読み替えられている。この研究では、現代東南アジア社会における音楽、芸能、文学、映画、美術、ファッションなどの各分野におけるポピュラーカルチャー産業や各種メディアを研究対象としてとりあげ、文化的表現の生産と消費の場における人々の実践を通して現代東南アジア社会における自己意識形成の過程をとらえていきたい。

研究代表者 福岡まどか

班員(館内) 寺田吉孝 福岡正太

(館外) 井上さゆり 小池 誠 坂川直也 竹下 愛 津村文彦 馬場雄司 平松秀樹

## 研究会

2016年8月6日

福岡まどか（大阪大学）「成果発表に向けて 序論：東南アジアのポピュラーカルチャー 構想発表（2）」  
各メンバーによる執筆論文の構想発表（2）  
見市 建（岩手県立大学）「インドネシアにおける大衆文化 イスラームと地方首長の『キャラ立ち』」  
総合討論

2017年2月26日

福岡まどか（大阪大学）「成果発表に向けて 序論：東南アジアのポピュラーカルチャー」  
各メンバーによる執筆論文の内容発表  
池田茂樹（スタイルノート）「東南アジアのポピュラーカルチャー研究に関する芸術・音楽の側面からの考察」  
総合討論

## 成果

2016年度は2回の研究会を行った。外部講師の見市氏による発表と討論においては、インドネシアにおける宗教、政治、大衆文化の相互の密接な関わりが提示された。イスラームの宗教的な規範が文化を規定する主たる要因となっているインドネシアの独自性について、また政治的活動の中で大衆文化が果たす役割について、などのさまざまな議論が展開された。池田氏による発表と討論においては、東南アジアのポピュラーカルチャーというテーマを芸術特に音楽に焦点を当てて研究しその成果を書物の形で社会に広く還元していく際のさまざまな課題や可能性が示された。

また2回の研究会を通して行った成果発表に向けた序論の内容に関する検討においては、東南アジアの多くの地域で文化表現に関わる多様な価値観に関わる議論が、国民国家建設の言説へ向かっていた時代を経て、より多様な方向性に向かいつつある現状にあるという知見を得た。こうした状況の変化をふまえた上で、序論の内容を組み立てていく方針について討論を行った。また各メンバーによる論考に関する議論の中ではそれぞれの論考の全体における位置づけと、相互の関連性について検討を行った。特に第2回の研究会では、実際の草稿を持ち寄って議論を行い、編集者であるスタイルノートの池田氏によるコメントをはじめ、細部にわたる検討を相互に行った。

## 「近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開」

本研究は、15世紀末以降、スペインが世界規模で拡張した帝国統治のメカニズムについて、行政・司法・財政・宗教・軍事の諸分野を交差して領域横断的に張り巡らされた文書ネットワーク・システムの展開に焦点を当てながら解明を目指すものである。

近代初期、アジアからアメリカに至る広大な領域を支配下に治めたスペインの統治原理は、文書主義の優越というイデオロギーに支えられており、帝国内の統治機構においては、マドリッド中枢から植民地最末端の先住民までをカバーする広域的な文書ネットワークが張り巡らされていた。その網の目に沿って、植民地経営の実務を支えるヒトやモノ、情報の流れが構造化され、領域の隅々にまで拡張されることで、近代ヨーロッパ史上、類をみない規模の世界帝国を支えた統治機構の礎が整備されていったのである。

本研究では、スペインおよびラテンアメリカ、アジア各地の文書館における実地調査を通して史料分析の研鑽を積み、文化人類学、歴史人類学、識字・リテラシー研究、史料論、エスノヒストリー、文書管理論、アーカイブズ学などの方法論に精通したエキスパートたちの知見を結集することにより、スペイン帝国の礎となった文書ネットワークの成り立ちと植民地社会における展開について総合的に究明を試みるものである。

研究代表者 吉江貴文

班員（館内） 齋藤 晃

（館外） 足立 孝 網野徹哉 井上幸孝 小原 正 坂本 宏 清水有子 菅谷成子  
武田和久 中村雄祐 伏見岳志 溝田のぞみ 安村直己 横山和加子

## 研究会

2016年10月22日

共同研究員全員 これまでの研究活動の内容総括と議論のとりまとめ

共同研究員全員 共同研究成果論集の刊行にむけた企画検討  
共同研究員全員 次回の研究会（2月予定）について

2017年2月20日

共同研究員全員 共同研究成果論集の全体構成についてのディスカッション  
共同研究員全員 論文草稿に基づいた論集内容の具体的な検討  
共同研究員全員 今後の作業スケジュールの確認

## 成果

最終年度となる本年度は2回の研究会を実施した。10月に開いた第1回研究会では、これまでの議論のとりまとめを行い、スペイン帝国の構成原理の解明に文書メディアという新たな視点を導入することにより、帝国史研究の領域に新たな可能性を切り開く端緒に本研究会がなりえたこと、また、アジア、アメリカからヨーロッパにいたる豊富な事例を比較検討することにより、スペイン帝国の文書ネットワークを取り巻く諸問題（モノとしての文書の特質、文書循環サイクルの在り方、植民地周辺社会の役割等）の現状についてメンバー間の共通理解が深められたこと、などが全体の成果として挙げられた。つづく第2回研究会では、そうした議論の内容を踏まえた上で、本共同研究の最終的な成果を単行本（論集）として取りまとめ、2017年度内を目処に出版準備を進めることで合意し、論集の構成や執筆担当、題目等について出席者全員による具体的な検討を行った。

## 「現代『手芸』文化に関する研究」

本研究は、日本の手芸に相当する余暇的・趣味的仕事とその造形物の現代的展開を明らかにする。手芸とは、主に女性を担い手とする家庭内での商業化されていない趣味的な制作を意味する概念として明治期に形成された。そのため手芸の領域は、美的に評価された美術や利潤を生み出す工芸に比べて二重に周辺化されてきたといえる。しかし、現在、世界各地で、従来の日本の手芸概念ではとらえられない余暇的・趣味的仕事が多様な展開をみせている。それらは、男性も担い手に含み、アート、フェアトレード商品、エスニック雑貨などとして美術や市場の領域にも進出している。また、趣味を通じた人的ネットワークの形成や、それらの災害後におけるケアとしての機能などが注目を集めている。こうした従来の手芸概念ではとらえきれない新たな領域を「手芸」として捉え返し、その現代的展開を民族誌的に分析し、新たな「手芸」概念の創出を目指すものである。

研究代表者 上羽陽子

班員（館内） 齋藤玲子 南 真木人

（館外） 蘆田裕史 五十嵐理奈 金谷美和 木田拓也 坂田博美 新本万里子 杉本星子  
中谷文美 野田涼美 平芳裕子 ひろいのおこ 宮脇千絵 村松美賀子 山崎明子

## 研究会

2016年6月4日

上羽陽子（国立民族学博物館）「前回までの研究会の論点の整理」  
金谷美和（国立民族学博物館）「被災地の手芸——『暇つぶし』、『供養』、『ギフト』と『仕事』」  
杉本星子（京都文教大学）「『つぐらぬ』がつなぐ——被災地で『手芸』を考える」  
石井康子（特別講師）「現代日本の手芸の諸相——手芸家の視点から」（聞き手：山崎明子）  
出席者全員「今後の研究会の進め方と打ち合わせ」

2016年10月16日

上羽陽子（国立民族学博物館）「手芸が生まれる土壌を考える」  
出席者全員「これまでの議論の整理と理論的方向性についての全体討論」

2016年12月4日

山崎明子（奈良女子大学）「『つくる×技術』概説」  
中谷文美（岡山大学）・金谷美和（国立民族学博物館）・上羽陽子（国立民族学博物館）「『つくる×技術』諸相」  
出席者全員「全体討論」

2017年2月26日「ひころの里シルク館」および「さとうみファーム」

「ひころの里シルク館」における手仕事講座の活動体験および観察  
石本めぐみ（NPO法人ウィメンズアイ代表理事）「女性支援活動を通して見えてきたこと——被災地と手仕事」  
出席者全員「全体討論」

2017年2月27日

「さとうみファーム」における手仕事講座の活動体験および観察

金谷美和（国立民族学博物館）「『つながる×社会・空間』概説」

石本めぐみ（NPO法人ウィメンズアイ代表理事）、杉本星子（京都文教大学）、上羽陽子（国立民族学博物館）  
「『つながる×社会・空間』諸相」

出席者全員「全体討論」

## 成果

本年度は、狭い手芸概念の枠組みを超えた、現代の余暇的・趣味的仕事を捉える上で、被災後、多くの手芸活動がおこなわれた東日本大震災の被災地に焦点をあてた。これに関する具体的な事例をもとにした発表によって、被災地における手芸活動が、自己の癒やしや交流のツールとなり、復興における重要な役割を担っていることが明らかとなった。一方、被災地では、癒やしや交流の機能をもつ「手づくり品」と、被災者がつくり手となって商品化された「手しごと品」とが混在していることが発表を通じて浮き彫りとなった。被災地での手芸活動を「つくり手」、「価格設定」、「造形動機」、「購入者」の視点から議論を深化させる必要性がみえてきた。

今後は、このような論点を加味し、数名ずつのトークセッションをおこない、包括的なアプローチを可能にする基礎的概念の創出を目指したいと考えている。

## 「近世カトリックの世界宣教と文化順応」

本研究は、16～18世紀のアジアとアメリカにおけるカトリック教会の宣教、とりわけ「順応」と呼ばれる政策に焦点を当て、ローカルな事例の比較とヨーロッパの世界観・人間観の検討を通じて、その歴史的意義を明らかにする。順応とは、宣教師が現地の規範や慣習を学ぶことで地元社会に溶け込み、現地人の改宗を促す政策である。言語、衣食住、礼儀作法、法律、学問など、現地文化の幅広い側面が対象となる。事例としては、アレッサンドロ・ヴァリニャーノの日本宣教方針やマテオ・リッチの中国古典研究など、アジアのイエズス会の政策が有名である。特に中国での政策は「典礼論争」というカトリック教会を二分する論争を引き起こした。

近世カトリックの宣教師の順応はしばしば今日の文化相対主義の先駆けとみなされるが、この評価は正しいのだろうか。両者の共通点と相違点はなんだろうか。今日の相対主義的文化概念が近世カトリックの世界宣教に負うものがあるとするならば、それはなにか。これらの問いに答えるため、本研究は、宣教師の順応をローカルなコンテクストに位置づけ、通文化的実践としてのその特徴を探る。同時に、宣教師が順応に与えた理論的根拠を世界の諸文化の多様性についてのヨーロッパの思索の流れに位置づけ、その思想史的意義を解明する。

研究代表者 齋藤 晃

班員（館外） 網野徹哉 井川義次 王寺賢太 岡 美穂子 岡田裕成 折井善果 小谷訓子  
鈴木広光 中砂明德 新居洋子 真下裕之

## 研究会

2016年5月14日

研究成果の出版に関する全体会議

2016年7月23日

岡美穂子（東京大学）「『新仏教』としてのキリスト教受容説は成立可能か（試論）」

岡田裕成（大阪大学）「適応／収奪／交渉——征服後メキシコにおける羽根モザイク聖画・聖具の制作と活用」

齋藤 晃（国立民族学博物館）「集住化と奴隷狩り——南米熱帯低地におけるイエズス会ミッションの建設」

2016年10月1日

新居洋子（東京大学）「中国における科学宣教と清朝側の意図」

井川義次（筑波大学）「中国哲学情報のヨーロッパ啓蒙主義への流入——シュピツェル『中国文芸論』(De re litteraria Sinensium commentarius)を中心に」

鈴木広光（奈良女子大学）「言語政策と言語普遍」

2016年12月18日

小谷訓子（大阪芸術大学）「キリシタン美術におけるヴァナキュラー——日本イエズス会の「現地への適応」プロジェクトとセミナリオの絵画制作」

真下裕之（神戸大学）「ムガル帝国におけるペルシア語キリスト教典籍とその周辺」



中砂明德（京都大学）「明朝末年における受難のナラティブ」

網野徹哉（東京大学）「適応に抗した宣教者たち」

2017年2月18日

折井善果（慶應義塾大学）「イエズス会宣教師における「理性」概念の形成と日本」

王寺賢太（京都大学）「『文明化』の方向転換——イエズス会パラグアイ布教区をめぐる18世紀フランスの論争の一断面」

齋藤 晃（国立民族学博物館）「宗教と適応」

## 成果

昨年度は宣教師の異文化適応に関する重要な先行研究をピックアップし、4回の合評会を開催した。これらの合評会を通じて、アジアとアメリカの各地で展開された適応の特色、およびその地域を越えた共通性を浮き彫りにすることができた。本年度は、昨年度の成果を踏まえて、メンバー各人にそれぞれの専門に基づく研究報告をしてもらった。報告のテーマは、在来社会の再編成、在来宗教への対応、現地語の辞書・文法書の作成、キリスト教文献の翻訳、科学的知識の生産、美術品の制作、ヨーロッパ啓蒙思想への影響など、実にさまざまだった。従来の研究では、適応は一部の開明的な宣教師が主導した特殊な宣教方針として扱われがちだった。しかし、本年度の諸報告は、適応が近世カトリックの宣教実践のうちに広く、深く浸透していたことを示してくれた。それらの報告はまた、現地文化に適応しようとする宣教師の試みが、ヨーロッパ文化を自文化の亜種として扱おうとする現地人の試みとわがちがたく結びついており、結果として、適応の成果が両義的にならざるをえなかったこともあきらかにしてくれた。

## 「家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究——保育と介護の制度化／脱制度化を中心に」

本研究は、保育や介護をめぐるケアを、家族と社会の境界面でやりとりされるサービスととらえ、その制度化／脱制度化のありようを、比較研究するものである。この分析を通して、人間社会は、社会と家族のインターフェースをどのように編成してきたのか、それは今後どうありうるのか展望する。

子供の保育や老人・病人の介護などのケアと呼ばれるサービスは、その一部を家族の外部で、家族外の担い手によって行うことが可能であり、制度化もされている。このサービスを公的な支援として行うのが福祉であるが、今日、その制度は見直されつつある。福祉国家で脱制度化の動きがみられる一方で、行政の施策が未発達な地域で、ネットワークを駆使した独自の制度があらわれている。『家族に介入する社会』を著したジャック・ドンズロの視点も参照しながら、個別のローカルな状況のもとにある保育や介護の、制度化／脱制度化をとらえて比較検討する。背景には、現代世界の社会像はどのように構想されるのか、という問題関心がある。

研究代表者 森 明子

班員（館内）戸田美佳子

（館外）天田城介 岩佐光広 岡部真由美 加賀谷真梨 加藤敦典 木村周平 工藤由美  
 沢山美果子 高田 実 高橋絵里香 土屋 敦 内藤直樹 中野智世 西 真如  
 浜田明範 速水洋子 モハーチ ゲルゲイ

## 研究会

2016年5月14日

速水洋子（京都大学）「タイにおける高齢者とそのケアをめぐる家族と共同性のひろがり」

森 明子（国立民族学博物館）「幼少期への介入——ベルリン調査から考える」

全体討論

2016年5月15日

戸田美佳子（国立民族学博物館）「相互行為としてのケアを描く——カメルーン熱帯林の障害者を例に」

全員「中間段階における討論」

研究打ち合わせ

2016年6月25日

岡部真由美（中京大学）「出家からみた家族・ケア・ネットワーク——北タイ都市部を生きるシャン人越境労働者の事例より」

西 真如（京都大学）「身体と家族の境界面——昭和ゲイネスの世代とケア」

木村周平（筑波大学）「誰がケアするのか——津波のあとに残される人と物」

討 論

2016年6月26日

内藤直樹（徳島大学）「ねだりが生み出す『社会』——東アフリカ牧畜社会における『ねだり』と『ケア』」

浜田明範（関西大学）「表の抛出と裏の抛出——ガーナ南部における葬式と社会的なもの」

沢山美果子（岡山大学）「近世日本の乳を呑む子どもたちと乳をめぐるネットワークの形成」

討 論

2016年10月8日

岩佐光広（高知大学）「『普通』に死ぬということ——ラオス低地農村部における看取りの空間と時間」

モハーチ ゲルゲイ（大阪大学）「実験としてのケア 2 地域と代謝がつながるとき——東京下町における患者支援活動の事例をめぐって」

討 論

2016年10月9日

中野智世（成城大学）「カトリック・ミリューとケアのネットワーク——占領下ドイツにおける（1945-49）カリタスの事例から」

高橋絵里香（千葉大学）「規模と境界：フィンランドの自治体再編と社会福祉改革から再考する人類学的全体論」

加賀谷真梨（新潟大学）「小規模多機能型居宅介護事業の開始に伴う家族と社会の領域の再編」

討 論

2016年12月10日

速水洋子（京都大学）「重荷から力へ——タイにおける高齢者ケアをめぐるネットワークと社会の新展開」

森 明子（国立民族学博物館）「ネイバーフッドについての考察——ベルリン街区のメイキング・プレイスとケア」

土屋 敦（徳島大学）「日本の児童養護における家族とケアの境界面の地殻変動——1960年代後半から1980年代初頭における児童養護運動の軌跡から」

討 論

2016年12月11日

戸田美佳子（国立民族学博物館）「相互行為としてのケア」

加藤敦典（東京外国語大学）「コミュニティの制度化と脱制度化——地域社会の高齢者福祉に関する日越交流プロジェクトを通して」

工藤由美（国立民族学博物館）「先住民保健政策下のマプーチェ医療について——代替補完医療・非マプーチェ患者」

討 論

## 成果

メンバーの研究発表は2巡目の終盤まで済み、個別の議論をふまえて、それぞれの研究が相互にどのように位置づけられるかをめぐって検討を重ねた。本共同研究が、家族と社会の境界面の編成をケアという観点からとらえ、描き出していこうとすることについて、その意味や問題のひろがりについて、あらためて議論した。そして、他者とともに生きる社会をいかに構想するか、という問題関心を核として議論を展開していくうえで、1) ケアの回路・編成を考える方向と、2) ケアが発動する場の構成を考える方向の、ふたつの方向性を導き出した。

さらに、本共同研究と平行して展開する科学研究費補助金によって開催したコロキウム Thinking about care as social organization: A Discussion with T. Thelen and K. Buadaeng（2月19日、国立民族学博物館）に、本共同研究メンバーの大半が参加し、海外のふたりの研究者とともに、社会編成をケアからとらえることに関する集中的な議論をおこない、理論的な考察を深めた。

## 「政治的分類——被支配者の視点からエスニシティと人種を再考する」

21世紀になり、エスニシティ（文化的実践による社会的分類）や人種（肌の色による社会的分類）が構造化された社会に住み不利益を受けている人々は、カラーブラインド主義や逆差別というリベラリズムの変奏が世界規模で支持を得ている中で、不利益の是正を求める根拠すら失いかねない状況に直面している。本共同研究は、歴史的・民族誌的資料に基づいて、被支配者側からの政治的抵抗の基礎となる分類の編成を解明し、リベラル民主主義の陥穽を批判的に乗り越える契機とする研究視座の確立を目指す。より具体的には、これまでコロニアリズムの歴史に

において不可視だった支配者側のエスニシティや人種（たとえば、アイヌ民族のいう「和人（シャモ）」、沖縄の人々が発する「ナイチャー（ヤマトンチュ）」、カナカ・マオリが用いる「ハオレ」、グアテマラ・マヤ人が口にする「カシュラン」）を可視化する視点として政治的分類という考え方を提示する。

研究代表者 太田好信

班員（館内） 關 雄二 竹沢尚一郎 寺田吉孝  
（館外） 青木恵理子 池田光穂 石垣 直 川橋範子 慶田勝彦 辻 康夫 深山直子  
細川弘明 松田素二 山崎幸治 山本真鳥 横田耕一

## 研究会

2016年 5月14日

事務連絡

青木恵理子「国家的他者への呪詛と追従——フローレス島山岳民にとってのオランダ・日本・インドネシア」

質疑応答と討論

太田好信「アイデンティティの政治のアフターライフ——政治的分類と歴史の中での相対（あいたい）する倫理に向けて」

2016年 5月15日

総合討論（前日の発表に関する質疑応答と合評の継続）

2016年 6月25日

事務連絡

松田素二（京都大学）「植民地支配の暴力装置と『異人性』——西ケニアの植民地経験と KAR の事例から」

質疑応答と討論

竹沢尚一郎（国立民族学博物館）「Racism の考古学」

質疑応答と討論

2016年 6月26日

総合討論（前日の発表に関する質疑応答）

2016年10月29日

特別招聘講演者の紹介（辻康夫）と共同研究会メンバーの自己紹介（参加者全員）

James Tully（カナダ・ヴィクトリア大学名誉教授）「Decolonizing Political Theory and Anthropology」

討論1（参加者全員）

討論2（参加者全員）

2016年10月30日

成果報告の形態、編集本の方向性などに関する具体的検討

2017年 1月21日

事務連絡と今後の成果報告に関する予定確認

辻康夫（北海道大学）「多文化主義における『歴史』の問題」

質疑と討論

池田光穂（大阪大学）「『支配的存在』を名指し、可視化する試みについて」

質疑と討論

2017年 1月22日

松田素二（京都大学）「『文化人類学とアイデンティティの政治をめぐるアフターライフ』をめぐるメモ」

質疑と討論

## 成果

2016年度は合計4回の共同研究会を開催した。その方向性として、これまでどおり、第1回目と第2回目は共同研究テーマに関する参加者からの個別発表である。第3回目は先住民研究（indigenous studies）という視点から共同研究テーマを問題化する試みとなった。第4回目は、成果報告の作成に向け具体的取組を開始し、2017年度の2回開催予定である共同研究会の針路を示した。ここで特記すべきは、第3回目 James Tully（カナダ・ヴィクトリア大学名誉教授）氏の講演を通し、本共同研究のテーマにとり重要な論点も浮上したことである。一方において、文化人類学は文化間の差異を強調してきたが、他方において、カナダ先住民研究の領域では先住民的視点が重視され

てから、19世紀以降のコロニアリズムの経験をグローバル化の経験と捉え直し、文化間のつながりを重視するようになったという点である。入植者植民地主義研究 (settler colonialism studies) である本研究会の方向性にも関わる歴史観の提示であり、本年度においても議論される指摘である。

#### 「生活用品から見たライフスタイルの近代化とその国別差異の研究」

本研究は、世界各地の衣食住にかかわる生活必需品の調査を通じて、その変化が伝統的生活様式から近代的生活様式への変化にいかに関連し、またその近代的生活様式が世界的な共通性を示しつつ、なお国ごとの差異をどのような面で保持しているかを検証し、近代化の一般性と国ごとの個別性およびその要因を考察することを目的とする。国家制度や生業経済の近代化は、住民生活のレベルでは生活様式の変化として経験される。生活様式の近代化は、衣類や台所用品、また家具や部屋の間取りの刷新と連動している。そうした生活用品の変化という物質文化研究を切り口に、生活様式が近代化に伴っていかに変化したかをあぶりだそうとするのが本研究の狙いである。生活の近代化には世界規模での画一性が認められる一方、衣食住の伝統慣行に由来する国ごとの差異も予測され、近代化の過程に文化的差異が関与していることを示唆している。本研究ではそうした「近代化」の一般理論についても物質文化の観点から検討を加える。

研究代表者 鏡味治也

班員 (館内) 宇田川妙子 笹原亮二 關 雄二 野林厚志  
(館外) 阿良田麻里子 金子正徳 田村うらら 中谷純江 西本陽一 古谷嘉章 松村恵里

#### 研究会

2016年5月7日

古谷嘉章 (九州大学) 「生活用品の物質性」  
鏡味治也 (金沢大学) 「生活用品調査で目指すこと」  
出席者全員・全体討論

2016年11月5日

笹原亮二 (国立民族学博物館) 「量の可能性・再々説——民博所蔵大村しげコレクションを中心に」  
特別展見学  
出席者全員・全体討論

2016年12月11日

加賀谷真梨 (特別講師・新潟大学) 「波照間島における台所用品」  
質 疑  
野林厚志 (国立民族学博物館) 「同化の手段としての近代化——台湾における「山胞」の生活改善の施策」  
質疑・全体討論

#### 成果

本年度第1回研究会では、前年度までの世界各地での予備的調査を踏まえ、生活用品研究の位置づけと目的を再検討した。第2回研究会では生活用具についてすでに蓄積のある日本の事例の中でも個性的な大村しげコレクションを素材に、その生活用品の示すものを検討した。第3回研究会では前年度に引き続き沖縄と台湾の事例を紹介し、とくにその変化の方向性とそれが意味するものについて検討した。最終年度としての総括の機会とはとくに設けず、生活用品調査をきっかけとして種々の議論が展開できる可能性を確認し、本格的なデータ収集の構想を練りながらその機会を待つことで共同研究会を終えた。

#### 「呪術的实践=知の現代的位相——他の諸実践=知との関係性に着目して」

現代世界を構成するさまざまな実践=知 (本研究では、感覚を含む行為と知識・信念の双方にわたる概念として、便宜的に「実践=知」という語を用いる) のなかで、呪術的实践=知はいかなる位置をしめ、またそれ以外の諸実践=知といかなる関係性をもつのか。本研究では、呪術的实践=知とそれ以外の諸実践=知 (すなわち科学、宗教、病院医療、学校教育、メディア表象など) との関係性を明らかにすることによって、現代世界における呪術の個別性 (特殊性) と普遍性 (他の諸実践=知との共通性) をうきぼりにすることをめざす。

本研究は、先立つ民博共同研究「知識と行為の相互関係からみる呪術的諸実践」(2007~2009年度、代表:白川千尋)とその成果論集『呪術の人類学』(2012年、白川・川田編、人文書院)をふまえて、その基本的枠組みであっ



た「言葉／行為」を、宗教・世界観や制度との関わり、また世界とのインターフェースとしての感覚などの観点を組み込むことによって、「信じる／知る／行なう／感じる」の各理論的次元へ継承的に発展させる。それを通じて呪術論の観点から、現代世界における実践論や知識論を刷新することをこころざす。

研究代表者 川田牧人

班員（館内）飯田 卓 藤本透子 松尾瑞穂

（館外）飯田淳子 梅屋 潔 片岡 樹 黒川正剛 近藤英俊 島藺洋介 白川千尋

田中正隆 中川 敏 中村 潔

## 研究会

2016年 6月25日

飯田 卓（国立民族学博物館）「マダガスカル南西部の祖霊と憑依霊」

飯田淳子（川崎医療福祉大学）「感性と力 2人の呪者の肖像」

全体討論：「他の諸実践＝知」について

2016年 7月24日

片岡 樹（京都大学）「タイ山地民ラフの呪術と妖術」

島藺洋介（大阪大学）「『呪術的』実践と自己への配慮と——フィリピンにおける生体肝移植患者の身体的経験と実践に関する省察」

全体討論：呪術のリアリティと他の諸実践＝知のリアリティ

2016年11月27日

田中正隆（高千穂大学）「ベナンにおける宗教とメディア——在来信仰ブドゥのメディア利用」

中村 潔（新潟大学）「WITCHCRAFT\_BAZAAR」

最終年度へむけての計画、ならびに事務連絡

2017年 1月21日

松尾瑞穂（国立民族学博物館）「インド・マハーラーシュトラ州における反迷信邪術運動とその法制化」

藤本透子（国立民族学博物館）「カザフスタンにおけるエムシ（治療者）の活動と伝統医療の展開」

最終年度へむけての計画、ならびに事務連絡

## 成果

本年度は研究会を4回開催し、共同研究員の個別発表を一巡させた。上記「研究目的」にあげた本研究のねらいに対して、本年度はとくに、制度化やメディア化の側面と、宗教的体系化もしくは内面化などとの対比について検討された。その展開として、隣接するさまざまな知識実践に吸収されず、他の知識実践では代替できない呪術の実践＝知の、他の概念へパラフレーズしたり還元論の説明にとどまったりするのではない側面に関する議論が重ねられた。もう一点、「信じる・知る・行なう・感じる」という四つの動詞に関しては、必ずしも均等なウエイトをおいた議論展開ではなく、むしろ当初予想していた「触知性」「物質性」などについての集中的な議論が展開した。これは、現代世界における知識実践としての呪術の基本的性格にかかわる展開であり、「感覚」と「マテリアリティ」という新たな鍵概念へと問題意識を拡張させ、最終年度における総括の手がかりを得ることができた。

## 「資源化される『歴史』——中国南部諸民族の分析から」

「歴史」を表象、叙述、再編成し資源化する現象は人類社会では普遍的に見られる。近年、中国のインパクトが強まり、日本や世界に多大な影響を及ぼしており、中国に関する関心が高まり、その研究が緊急の課題になっている。また、中国では「中華民族」の一体性が政治的に強調される傾向が顕著である。さまざまな「歴史」の細片をハイブリッドな形で縫合して構築し、それを実利に結びつくものとして「資源化」しがちな傾向が見られる。「歴史」を「資源化」する主体は、各級政府、研究者、知識人、マスメディア、一般民等、複数あり、それらが互いに対立、交渉、妥協しあいながら、資源化の潮流を作り出している。同時に、「歴史」は「資源化」される際に、実用価値的な側面だけでなく、様々な認識主体が自分たちの正当性とアイデンティティの維持を担保しようとして構築される側面をも有する。本研究では、いかなる「歴史」が多様な主体によって、実利の獲得やアイデンティティの維持のため、どのように「資源化」されているのか、エスノ・ローカルな政治社会空間を舞台として批判的・分析的に明らかにする。

研究代表者 長谷川清

班員 (館内) 樫永真佐夫 河合洋尚 韓 敏 塚田誠之  
(館外) 稲村 務 上野稔弘 兼重 努 瀬川昌久 曾 士才 孫 潔 高山陽子  
長谷千代子 長沼さやか 野本 敬 松岡正子 吉野 晃

## 研究会

2016年7月9日

樫永真佐夫 (国立民族学博物館) 「ベトナム、マイチャウにおけるタイの移住伝承の資源化」  
上野稔弘 (東北大学) 「中国の非漢民族無形文化遺産をめぐるポリティクス——『少数民族非遺藍皮書』を読み解く」

質疑応答

2016年10月22日

国際シンポジウム「中国における歴史の資源化——その現状と課題に関する人類学的分析」共催

寺田吉孝 (国立民族学博物館) 館長補佐挨拶

塚田誠之 (国立民族学博物館) 主旨説明

韓 敏 (国立民族学博物館) 「岳飛の社会記憶とその資源化——杭州岳廟を中心に」

コメント 長谷川清 (文教大学)、兼重努 (滋賀医科大学)

高山陽子 (亜細亜大学) 「烈士陵园の景観——南部と北部の記念碑の比較から」

コメント 松岡正子 (愛知大学)、長谷千代子 (九州大学)

稲村 務 (琉球大学) 「ハニ=アカ族の記憶と記録」

コメント 上野稔弘 (東北大学)

総合討論コメンテーター 曾士才 (法政大学)

2017年1月7日

高山陽子 (亜細亜大学) 「革命の記憶の資源化——中国の記念碑の事例から」

長谷川清 (文教大学) 「問題点の整理と検討」

総合討論

## 成果

今年度は3回の共同研究会を実施した。第1回はベトナムのタイ族の移住伝説の資源化、中国の非物質文化遺産の認定作業における文化伝統の継承・保存をめぐるポリティクスについての事例分析が報告された。第2回は科学研究費補助金基盤研究プロジェクト「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」(2015-2017、研究代表:塚田誠之教授)との連携により、国際シンポジウム「中国における歴史の資源化——その現状と課題に関する人類学的分析」を開催した。中国南部地域からの事例として、岳飛の社会記憶とその資源化、烈士陵园の景観の地域間比較、ハニ=アカ族の記憶と記録に関する研究報告が班員3名によってなされたほか、総合的な討論を行った。第3回は中国革命の歴史的記憶とモニュメントの事例分析が報告されたほか、これまでの事例分析の成果を総括するとともに、理論的な枠組みを構築するために必要な論点の整理を行った。以上の研究活動を通じて、中国南部諸地域の歴史・記憶の資源化のダイナミクス、資源化に関わる各主体の表象行為や実践のバリエーション、中華ナショナリズムとの相互補完的關係などについて、人類学的観点から解明していくことの意義や課題について展望を得ることができた。

## 「モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究——国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に」

国立民族学博物館に所蔵される多田コレクション (通称「時代玩具」) は、江戸時代から戦後にかけての玩具を中心とした子どもに関わる様々なモノから構成される、総数5万数千点に及ぶ膨大な資料群である。玩具を初めとした子どもに関する多種多様なモノの数々は、それぞれの時代の子どもの対する人々や社会の意識を克明に映し出している。しかし、近代以降、それらは消費を前提として商品化されたこともあって、遺存は少なく実態は明らかではない。多田コレクションは、そうした子どもに関する品々が網羅的に収集・保存されている希有な例として価値が高い。

本研究は、児童学・美術史・玩具学・歴史学・民俗学・文化地理学・保存科学といった様々な専門分野の研究者が一堂に会し、コレクションの資料に対して多角的・総合的に検討し、分析を加えることで、コレクションの全体像を正確に把握することを試みる。それと共に、従来漠然としたイメージでしか理解されてこなかった近代日本の

子どもの文化や社会の実態を、モノを資料として活用することで具体的かつ精緻に解明する。そして、その成果に基づき、近代以降の子ども観に代わる時代に即した新たな子ども観の見通しを提示し、展示会の開催を通じて広く社会に問うことを目的とする。

研究代表者 是澤博昭

班員（館内） 笹原亮二 日高真吾

（館外） 稲葉千容 内田幸彦 香川雅信 亀川泰照 小山みずえ 是澤優子 神野由紀

滝口正哉 濱田琢司 森下みさ子 山田慎也

## 研究会

2016年5月28日

高見俊樹（諏訪 高島城）「諏訪市博物館所蔵「玩具店・一〇高見商店」資料の紹介」

民博所蔵資料の熟覧（北陸の露天商所持の玩具資料）

共同討議「縁日と駄菓子屋の玩具をめぐる」

2016年5月29日

森下みさ子（百合女子大学）「シールから知る『子ども文化』——子ども消費者と『近代』なるもの」

是澤優子（東京家政大学）「明治大正期の玩具分類について」

2016年10月8日

滝口正哉（徳川林政史研究所）「近代における江戸文化の懐古と捉え直しについて」

笹原亮二（国立民族学博物館）「生活文化と博物館展示を巡る実践的課題」

2016年10月9日

野尻かおる（荒川ふるさと文化館）「画家小松崎茂の表現背景と子どもの文化」

共同討議：昭和の少年文化を中心にして

2016年12月17日

中島透（諏訪市博物館学芸員）「高見商店営業期の諏訪市上諏訪の状況」

高見商店資料の熟覧

小林純子（諏訪市博物館館長）「高見商店資料の背景」

2016年12月18日

亀川泰照（荒川ふるさと文化館）「明治の縁日・駄菓子屋空間と『おもちゃ』について」

小山みずえ（武蔵野短期大学）「戦前の幼稚園と幼児向け教材の開発——『手技』用教材を中心に」

## 成果

子どもの社会や子どもを取り巻く社会全体との関係を解明し、近代日本の子ども観の形成過程を実証的に提示するという視点にたち、本年度は、これまでの調査研究成果をもとに各共同研究員が、それぞれの専門分野と研究テーマに基づき研究発表を行った。

さらに前年度に続き（田中本家博物館・兵庫県立歴史博物館所蔵資料）民博資料と同等の内容を有する諏訪市博物館所蔵高見商店資料（長野県諏訪市）について、研究会及び現地調査を実施した。同資料の内容や現地の研究者との議論等を通じて、それらの実態の把握を試みるとともに、一個人の観点から形成された民博資料との関連性を検証した。また少年文化に関する希少性の高い資料を所蔵し、展示会を開催した実績のある博物館関係者を招聘し、主に展示という側面から研究会を開催した。

以上のことにより共同研究の成果をもとに展示会を開催するための準備に大きな進展がみられた。

## 「演じる人・モノ・身体——芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点」

1980年代以降の人類学は、モノが人間に使われたり、意味や価値を付与される側面だけでなく、モノの側からの人間への働きかけや、モノと人の相互的作用によって出来事が生成されるプロセスに着目している。また、そこに物質性がいかに関わるのかという問いも重要性を帯びている。本研究は、こうした「マテリアリティの人類学」の関心を芸能研究に差し入れ、新たな芸能研究の視座を探求する。この芸能にはいわゆる「民俗芸能」からコンテンポラリーまでを含む。また本研究の関心は、身体や上演を取り囲む環境にも向けられる。本研究の第一の目的は、芸能を人とモノの織りなす営みと捉え直し、表現や伝承にモノがどのように関与するのかを考察する事である。

芸能に特徴的な、人とモノ（例えば仮面や楽器や他者の身体）が「一つになる」相互浸透的な在り方や、モノに

触発され想像力や創造性が刺激されるプロセスにも注目する。動きや音や物語の中で展開する人とモノの関係性の特性を考察し、人類学を進展させることが本研究の第二の目的である。

研究代表者 吉田ゆか子

班員（館内）八木百合子

（館外）佐本英規 大門 碧 田中みわ子 辻本香子 丹羽朋子 増野亜子 松嶋 健  
柳沢英輔 山口未花子 竹村嘉晃

## 研究会

2016年10月29日

吉田ゆか子（東京外国語大学）前回のまとめ、事務連絡

辻本香子（日本学術振興会（大阪大学））「『本番を乗り切る』という活動——香港の龍舞チームにおける人とモノから生じる葛藤と妥協」

イリナ・グリゴレ（東京大学）「実験的展示——人類学とアートをめぐる身体、映像、踊り」

2016年10月30日

八木百合子（国立民族学博物館）「『聖なるもの』の継承——聖像を通じてみる人・モノ・信仰」

吉田ゆか子（東京外国語大学）「バリ島の曖昧な仮面たち——アブダクションの不一致をめぐって」

全 員 今後の予定など

2017年1月21日

丹羽朋子（人間文化研究機構）「窓花から窓花展へ——上演的再現メディアとしての中国剪纸と民族誌展示」

山口未花子（岐阜大学）「動物になるとき——北米狩猟民と動物のつながりを生成するモノとしての動物の身体」  
全体討論（1）

2017年1月22日

田中みわ子（東日本国際大学）「プロテーゼとしての車椅子——『隠喩』と『機能』を超えて」

松嶋健（広島大学）「ミケランジェロの方法をめぐって——引き算としての彫刻と演劇」

全体討論（2）

## 成果

計4回の研究会を開催し、東京大学のイリナ・グリゴレさんを含む8人が研究発表を行った。そこでは仮面舞踊、演劇、車椅子ダンスなどの芸能を専門に研究してきたメンバーに加え、狩猟、聖像信仰、切り紙といった芸能そのものではないが、人とモノの多様な関わり方に焦点化して研究してきたメンバーも研究発表を行った。民族誌的展示の活動を題材とした研究報告も二つ含まれる。今年度の特徴は、仮面を被る演者や、車椅子を自在に操る踊り手の事例など、モノが人と一つになる局面について意見が交わされたことである。人がモノを自由に操れるようになるという面だけをみるのでは十分でなく、人がモノによって作り変えられる、異なる身体感覚や使い方が生じるという側面への着目や、モノの物質性もたらす種の抵抗とせめぎ合ったり、モノが要求する身体性とはあえて距離をとるところに生まれる創造性への着目も有意義ではないかということが議論された。またモノを展示することあるいはモノを制作することと、パフォーマンスすることの類似点あるいは連続性についても議論がなされた。

## 「チベット仏教古派及びボン教の護符に関する記述研究」

1979年に国立民族学博物館は「チベット仏画コレクション」を購入した。その内容は実は仏画ではなく、千点を超すチベット仏教古派及びボン教の護符とそれを刷るための版木である。チベット仏教とボン教は独自の教義・哲学・論理体系を作り上げ、東洋人の思惟方法を語る上で主要な柱の一つになっている一方で、民間信仰をも貪欲に受け入れ、独特の「行」を発展させてきた。チベットの精神文化基層においては、超越的な原理と世俗的な経済原理とが絡み合っており、その二つを有機的に結びつけるための仕掛けとして「呪力観ないし呪物」が働いていると思われる。仏教やボン教の大蔵経論部の一定のポジションが「呪法」や「脱呪法」に割かれているのはそのことと密接な関連がある。護符はそこに機能する呪物の身近なモノの一つである。

我々は、チベットに広く行われている護符に注目し、一般の人々の目線に立って、それらの内容・意味・用途の記述、文献学的裏付け、護符の加持・聖化（パワーの付与）に関する儀礼、その経済的仕組み、チベット人でない人々を含む民衆の間での現代的意味などを様々の角度から調査研究し、護符というモノを通じてチベットの宗教実践の有り様と宗教文化基層の一端を明らかにすることを目標としているが、本共同研究ではその第一歩として民博



が蔵する護符の図像とそこに書かれるマントラを含む文を記述・解析することを試みたい。

**研究代表者** 長野泰彦

**班員** (館内) 三尾 稔

(館外) 大川謙作 大羽恵美 小西賢吾 小松和彦 武内紹人 立川武藏 津曲真一  
那須真裕美 別所裕介 三宅伸一郎 村上大輔 森 雅秀 脇嶋孝彦

#### 研究会

2016年 5月21日

護符の同定・記述作業

2016年 7月13日

護符の同定・記述作業

2016年 8月24日

護符の同定・記述作業

2016年12月 3日

護符の同定・記述作業

2017年 1月29日

護符の同定・記述作業

2017年 2月 9日

研究内容「ボン教護符の記述作業」

#### 成果

- ①護符の記述作業及びその大蔵経論部などとの同定作業を、仏教文献班とボン教班に分けて引き続き行った。
- ②ボン教関係の護符については、他の財源による調査の機会を利用して、カトマンズのボン教寺院において、本資料の原収集地サムリン出身のラマについてフィールド調査を行った。

#### 「グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究」

人類学においてサブスタンス（身体構成物質）に関する研究は、主に親族研究のなかで行われてきた。特に、生殖の観念の文化的多様性に関する民俗生殖理論や、生物学的生殖に限定されない人の関係性についての議論は、自然／文化、生物学的／社会的次元の二元論を前提とする親族（研究）を批判的に乗り越えようとするものである。ところが、今日、サブスタンスは、科学技術や医学の発展、グローバルな経済市場やトランスナショナルな移動の増加という現象の最前線で、資源として取引され、流通されるようになっており、従来の親族研究の射程を超えた新たな重要性を帯びるに至っている。遺伝子やゲノムといった新たなサブスタンスが、個や家族、集団のアイデンティティ形成や社会化のあり方に影響を及ぼすさまは、医療人類学を中心に生社会性（biosociality）という点から議論されている。

本研究の目的は、オセアニア、アジア、ヨーロッパにおけるサブスタンスの社会的布置に関する比較研究を通して、グローバル化時代のサブスタンスをめぐる社会動態の包括的な理解をはかるとともに、親族研究と医療人類学で二極化されているサブスタンス研究を架橋するアプローチを提示することである。

**研究代表者** 松尾瑞穂

**班員** (館内) 宇田川妙子 深川宏樹

(館外) 澤田佳世 島藺洋介 白川千尋 新ヶ江章友 田所聖志  
深田淳太郎 洪 賢秀 松岡悦子 松嶋 健 山崎浩平

#### 研究会

2016年 6月 4日

松尾瑞穂（国立民族学博物館）「文献解読 Janet Carsten 2001 “Substantivism, Antisubstantivism, and Anti-antisubstantivism”」

栗田博之（東京外国語大学）「「赤ちゃんはどこから来るの？」とのその後」

深川宏樹（国立民族学博物館）「血が否定される時——ニューギニア高地におけるサブスタンス紐帯とその切断」



全員 ディスカッション

2016年12月17日

松尾瑞穂（国立民族学博物館）「趣旨説明」「インドにおける血の隠喩——カーストと優生学の交差」

深田淳太郎（三重大学）「戦没者と生者のあいだ——遺骨（サブスタンス）による有／無縁化」秋田大学鉱業博物館 展示解説、資料熟覧

田所聖志（秋田大学）「地下の油と食べ物の脂を結びつける語りについて——パプアニューギニアの天然ガス開発地での調査から」

宇田川妙子（国立民族学博物館）「サブスタンスのリアリティ」

ディスカッション、質疑応答

深川宏樹（国立民族学博物館）「文献解説 Mary Weismantel 著 Making Kin: Kinship Theory and Zumbagua Adoptions」

全員 今後の打ち合わせ

## 成果

本年度は研究会を2回開催した。第一回目は、外部講師として栗田博之教授を招へいし、親族論の立場からのサブスタンス研究の知見をメンバーで共有、議論をして共通理解を深めるとともに、メンバーの研究報告も実施した。また、サブスタンス研究の近年の基本文献の読解を行い、シュナイダーからカーステンに至る研究動向を把握した。第二回目は、秋田大学にて、日本文化人類学会東北地区研究会および科研「現代インドにおける遺伝子の社会的布置に関する人類学的研究」（松尾瑞穂代表）との共催で、公開ワークショップとして開催した。メンバー4名が研究報告を行い、南アジア、オセアニア、ヨーロッパにおけるサブスタンスをカギ概念とした研究枠組みとその方向性について、隣接分野の研究者らと討議を行った。また、第一回目同様、講読文献も継続した。二年目に当たる本年度は、これらの活動を通して、研究会としての共通理解を深めるとともに、個別の研究報告を積み重ねることで、地域横断的な多様なサブスタンスの様態が徐々に姿を現すとともに、分析に際してのパースペクティブをいくつかの段階に分けて設定することが可能となった。

## 「驚異と怪異——想像界の比較研究」

ツヴェタン・トドロフが『幻想文学論序説』（1970）で定義したように、「驚異」marvelous や「怪異」uncanny は、自然界には存在しえない現象を描いた幻想文学、いわゆるファンタジーの部類に入るとみなされる。近代的な理性の発展とともに、科学的に証明のできない「超常現象」や「未確認生物」はオカルトの範疇に閉じ込められてきた。しかし近世以前、ヨーロッパや中東においては、犬頭人、一角獣といった不可思議ではあるがこの世のどこかに実際に存在するかもしれない「驚異」は、空想として否定されるべきではない自然誌の知識の一部として語られた。また、東アジアにおいては、実際に体験された奇怪な現象や異様な物体を説明しようとする心の動きが、「怪異」を生み出した。

本研究会では「驚異」と「怪異」をキーワードに、異境・異界をめぐる人間の心理と想像力の働き、言説と視覚表象物の関係、心象地理の変遷などを比較検討する。その成果は、当館における特別展示のかたちで公開することを予定している。

研究代表者 山中由里子

班員（館内）菅瀬晶子 吉田憲司

（館外）榎村寛之 大沼由布 香川雅信 金沢百枝 黒川正剛 小林一枝 小松和彦

小宮正安 佐々木聡 寺田鮎美 林 則仁 松浦史子 松田隆美 宮下 遼

安井眞奈美

## 研究会

2016年8月27日

佐々木聡（大阪府立大学）「中国の〈人魚〉をめぐる怪異表象——祥瑞災異思想の観点から」

山中由里子（国立民族学博物館）「驚異と怪異の接点としての人魚」

総合討論

2016年8月28日

特別展「立体妖怪図鑑——妖怪天国ニッポン part II」資料閲覧

れきはくアカデミー「妖怪としての人形」(香川雅信) 講演聴講  
ディスカッション

2016年12月3日

木場貴俊(神戸女学院大学)「近世日本の『怪異』の見方——自然観との関わりから」

山中由里子(国立民族学博物館)「『心の進化』から驚異・怪異を考える——人類の自然理解に関する認知科学的  
研究の紹介」

総合討論

2016年12月4日

みんぱくの幻獣探訪(本館展示場において幻獣資料を各自調査)

小林一枝(早稲田大学)「イスラーム美術における星座と蝕の表象——その形成に関する一考察」

松浦史子(二松学舎大学)「東アジアに於ける異形の表象と政治・文化——獣頭の鳳凰について」代読:佐々木  
聡(大阪府立大学)

金沢百枝(東海大学)「ヨーロッパの海獣イメージと想像力——なぜ海獣は海図に描かれたのか 人魚とケート  
スを例に挙げて」

総合討論

## 成果

木場の発表「近世日本の『怪異』の見方——自然観との関わりから」を通して、分析概念としての「自然」とい  
う用語と、近世日本の文献に登場する「自然」という語を混同してはならないという共通認識を得た。また、山中  
は「『心の進化』から驚異・怪異を考える——人類の自然理解に関する認知科学研究の紹介」において、認知考古  
学や進化心理学の研究を参照しつつ、驚異や怪異に関する文化相対主義的な研究を、より普遍主義的な認知科学の  
成果に照らし合わせて捉えなおすことによって、人類に共通の行動や表象のパターンを見出す可能性を示唆した。  
小林、松浦、金沢の発表で、天・地・海の驚異・怪異のモチーフを比較した。

怪異現象や異界との交信の非物質的な部分は、絵画やモノなどの静的な視覚資料ではその本質を表すことは難し  
く、伝承においてはそれが「異音」として登場することも多い。異界と人間界をつなぐものとして「音」に注目す  
るというアイデアが、本共同研究における議論の中から生まれ、「『怪異の音』の映像音響資料収集」という情報  
プロジェクトの企画申請につながった。

## 「応援の人類学——政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌」

本研究は、応援という切り口から、人類学的研究領域の拡大を図り、人間文化の特質の一端を解き明かすことを  
目的としている。実践的な関心とも関係する開発援助から福祉やケアサービスなど「支援」に関する研究や、アニ  
メなど現代風俗のファン文化に関する研究は、人類学のみならずさまざまな学問分野において近年数多くなされて  
いる。本共同研究会では、こうした個別研究を横断的に架橋して、政治やスポーツにおける応援まで含めたいうで、  
人間にとっての利他性の特質にも迫りたい。応援(support)という行為一般を対象とするが、さしあたり政治・ス  
ポーツ・ファン文化の下位領域に分けて焦点を当て、民族誌的データをもとに比較分析を行う。

研究代表者 丹羽典生

班員(館内) 笹原亮二 三尾 稔

(館外) 岩谷洋史 梅屋 潔 小河久志 風間計博 亀井好恵 木村裕樹 熊田陽子

瀬戸邦弘 高野宏康 高橋豪仁 立川陽仁 椿原敦子 難波功士 前川真裕子

山田 亨 山本真鳥 吉田佳世

## 研究会

2016年6月11日

吉田佳世(神戸大学)「変転する女性像——日本の大学応援団における女子団員の参入とその変遷」

質疑応答

木村裕樹(龍谷大学)「『団史』のなかの応援団——『応援歌』をめぐる予備的考察」

質疑応答

総合討論

2016年10月1日

高橋豪仁（奈良教育大学）「スタジアム空間の統治——統制される観客と管理される私設応援団」

質疑応答

瀬戸邦弘（鳥取大学）「応援団という空間とその世界観」

質疑応答

全体討論

2016年12月10日

山田 徹（筑波大学）「参加型スポーツにおける応援——トライアスロンイベントを事例として」

質疑応答

高野宏康（小樽商科大学）「近代日本における政治演説と雄弁家——永井柳田郎を中心に」

質疑応答

全体討論

2017年2月25日

椿原敦子（龍谷大学）「デモと応援——A. オングの vicarious 概念を手がかりに」

質疑応答

前川真裕子（神戸大学）「オーストラリアの反捕鯨キャンペーンにみる応援の政治学」

質疑応答

全体討論

## 成果

今年度は、4回の共同研究会を開催した。これまでは応援という現象を考える上で比較的理解しやすいスポーツの領域の事例を中心に取上げてきた。今年も引き続き大学の応援団の事例が取り扱われ、バンカラなイメージを代表する応援団が現在では女性の参入が必要不可欠となっている現状とそれに至る歴史的経緯について検討された。また応援団にはつきものの各種の歌（応援歌、学生歌、寮歌）について、幅広く資料を取りそろえた研究発表が行われた。

スポーツも学生スポーツの枠に留まらず、プロスポーツ（野球など）やアマスポーツ（トライアスロンなど）の現場における応援についても対象として取り上げ、議論がなされた。さらに今年度の後半にはいと、政治という文脈における応援の現象の特徴にも着目する研究発表が行われた。それらのスポーツの領域との違いについて、日本、オーストラリア、アメリカなどの事例紹介を通じて検討した。

## 「考古学の民族誌——考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究」

考古学は一般に過去についての科学的な研究と捉えられている。しかし同時に、考古学的知識や出土品が、時に観光資源として利用され、国家・民族をめぐる政治と結びつくように、現代を形作る実践的な学問でもある。この「科学としての考古学」と「社会実践としての考古学」の間の緊張関係をめぐって、考古学者も、植民地主義やナショナリズムの歴史との関わり等、考古学の倫理について内省的な検討を始めているが、それらはまだ考古学内部にとどまっている。本共同研究では、考古学的知識が作られ、消費される、その多様なあり方を検証することによって、考古学がどのように社会関係や人々の世界観を形成し、変化させ、新たな景観をも作り出しているのかについての広範な理解を目指す。そのために、次の3つの視点から複数フィールドにおける考古学的実践の民族誌・歴史的研究を行う。(1) 考古学的知識・技術習得のプロセスは、どのように個人のものの見方、コミュニケーション、行為に影響を与えているのか。(2) 発掘現場やラボで、出土品などのモノはどのように考古学的データに変換されるのか。(3) 考古学は遺跡観光、国家・民族の歴史の修正、社会運動にどのような影響を与えているのか。

研究代表者 ERTL, John (アートル、ジョン)

班員 (館内) 關 雄二 寺村裕史 ピーター, J. マシウス 野林厚志  
(館外) 石村 智 市川 彰 岡村勝行 サウセド セガミ ダニエル ダンテ 渋谷綾子  
寺田鮎美 中村 大 松田 陽 溝口孝司 村野正景 山藤正敏 吉田泰幸  
米田 穰

## 研究会

2016年6月25日

開会 趣旨説明 (John Ertl, 渋谷綾子)

ゲストスピーカーによる講演1 藤尾慎一郎 (国立歴史民俗博物館) 「歴史になった縄文・弥生時代の展示——  
相対年代から数値年代へ」 質疑応答ゲストスピーカーによる講演2 後藤 真 (国立歴史民俗博物館) 「人文情報学と総合資料学——情報技術は人  
文学の方法論とどのような関係を持つようとしているのか」 質疑応答話題提供1: 中村大 (立命館グローバル・イノベーション研究機構) 「GISと縄文時代研究——北東北の後・晩  
期の事例を中心に」

ディスカッション

2016年6月26日

事例紹介: 寺田鮎美 (東京大学総合研究博物館インターメディアテク研究部門) 「サイエンスをどう展示するか」

話題提供2: 渋谷綾子 (国立歴史民俗博物館) 「微細植物遺体分析におけるデータ生成と解釈、誤解」

話題提供3: 寺村裕史 (国立民族学博物館) 「考古学とオープンサイエンス——フィールドで取得したデータを  
どのように扱うのか」

質疑応答

文献解題 (司会: 渋谷, Ertl)

ディスカッション

今後の研究会の進め方、次回の研究会について

連絡事項

閉 会

2016年11月5日

趣旨説明 (ジョン・アートル、ダニエル・セガミ、山藤正敏)

基調講義: 關 雄二 (国立民族学博物館) 「ペルーの小村における考古学的プロジェクトから発生した社会的記憶」

事例紹介1: 市川彰 (名古屋大学) 「メソアメリカ考古学と日本人研究者」

事例紹介2: ダニエル・セガミ (国立民族学博物館) 「日本における外国考古学者の苦難」

事例紹介3: 村野正景 (京都文化博物館) 「『アートと考古学』の導入と展開について——日本と中米の事例から」  
討 論

2016年11月6日

事例紹介4: 山藤正敏 (奈良文化財研究所) 「西アジアでの考古学: 日本隊の60年」

講 義: 溝口孝司 (九州大学) 「世界の中の日本考古学」

総合討論: 溝口孝司 “A Future of Archaeology” (2015) を題材に

次回共同研究会について

2017年1月28日

アートル ジョン (金沢大学)、松田陽 (東京大学)、岡村勝行 (大阪文化財研究所) 「開会 趣旨説明」

岡村勝行 (大阪文化財研究所) 「この共同研究はいかに日本、世界の現代考古学に資するのか?」

ピーター J. マシウス (国立民族学博物館) 「Building a house without walls and roof: archaeological  
reconstruction from the perspective of plant domestication and crop history」

松田陽 (東京大学) 「なぜ (一部の) 人々は遺跡を復元するのか」

アートル ジョン (金沢大学) 「Aims and Outline of Joint Research Publication 1: “Archaeological Data  
Making” (tentative title)」

吉田泰幸 (金沢大学) 「出版物の目的と概要2: ふくげん——考古学的想像力がかたちづくるものがたり」

Discussion

## 成果

共同研究会第三回は「考古学におけるデータの多様性」をテーマとし、放射性炭素年代測定 (ゲストスピーカー・藤尾慎一郎)、GISとデータベース作成 (中村大、寺村裕史、国立歴史民俗博物館・後藤真)、微細植物遺体分析 (渋谷綾子)、科学展示 (寺田鮎美) の実践者の講演の後、データベースに関する重要文献をもとに議論を行った。共同研究会第四回は「日本人考古学者の外国における考古学的実践/海外からみた日本の考古学的実践」をテーマとし、この視点からの中南米 (關雄二、市川彰、村野正景)、西アジア (山藤正敏)、日本 (ダニエル・セガミ) における

ケーススタディと、それを包括しうる溝口孝司による理論考古学の文献をもとに、議論を行った。共同研究回第五回は「本共同研究会の意義とその成果の発表方法」について、岡村勝行の問題提起をもとに改めて議論を行い、大きくは考古学的データの生成（具体例をピーター・マシウス、ジョン・アートルが発表）と復元（具体例を松田陽、吉田泰幸が発表）を軸にすることを確認した。

#### 「宇宙開発に関する文化人類学からの接近」

本研究の目的は、宇宙開発を対象にした人類学的研究の可能性を探り「先端科学技術」の人類学という新しいテーマに接近するための方法論的検討をおこなうことにある。20世紀後半から宇宙開発に関わる科学技術の進展、宇宙空間の利用が本格化し、宇宙は単に科学技術の研究対象に留まるだけではなく、国際的に展開する政治的かつ経済的な背景やローカルな社会文化的な基盤や生活文化とも密接に関わる問題領域となりつつある。本プロジェクトは、(1) 想定される宇宙に関する具体的なトピック（宇宙産業、ツーリズム、人間の身体的かつ認知的変容など）に対する従来の概念の有効性や方法論を検討する。(2) は、科研費によるJAXAとの共同調査プロジェクトと併行して行われ、宇宙開発技術者に対するインタビュー調査データの検討・解釈作業を進める。本研究は最終的に近代科学技術の検討を射程に入れた「宇宙人類学」という総合的な主題を設定した研究領域の確立を目指す。

研究代表者 岡田浩樹

班員（館内） 飯田 卓 上羽陽子

（館外） 磯部洋明 岩田陽子 岩谷洋史 大村敬一 川村清志 木村大治 佐藤知久

篠原正典

#### 研究会

2016年6月25日

長谷川義幸（JAXA）「日本の有人宇宙開発」

2016年6月26日

水谷裕佳（上智大学）「宇宙研究と北米先住民社会のかかわり」

成果出版、および今後の活動方向の打ち合わせ

2016年12月3日

宮嶋宏行（国際医療福祉大学）「宇宙居住や生命維持システムに関する研究」

意見交換

2016年12月4日

成果出版、および今後の活動方向の打ち合わせ

2017年2月18日

鳴沢真也（兵庫県立大学）「地球外知的生命探査論」

2017年2月19日

成果出版、および今後の活動方向の打ち合わせ

菅 浩二（國學院大學）「冥王星と宇宙葬」

#### 成果

本年度は、主に科学系分野を中心とした他分野の外部講師を招き、宇宙開発に関する様々なトピックについて、人類学的接近の可能性を探り、議論を深めることができた。まず、宇宙関連施設と地域住民の関係については、「科学人類学」「技術人類学」の課題として重要なフィールドであることが明らかになった。すなわち、現代の最先端科学技術の知識と科学的世界観、論理が一般市民、地域住民や先住民に受容され、理解されているかの問題であり、同時に、開発と地域社会、先住民との関係という古典的テーマが交錯するフィールドである。次に、閉鎖実験棟における生命維持システムの問題は、住環境や環境認識、さらには文化としての居住空間という人類学的問題と接続することが明らかになった。そして地球外生命体との交信の問題（NASAのSETI Project）は、異文明、異文化とのコンタクトの問題やコミュニケーションの問題という重要な議論に展開しうる。宇宙開発技術者に関するインタビューデータについては、日本の有人宇宙開発の中心的役割を担ったJAXAの長谷川氏の講演および質疑応答を通して、今後の研究方針を明確にすることができた。



## 「放射線影響をめぐる『当事者性』に関する学際的研究」

核実験や原発事故による放射線影響を受けた社会については、人体や自然環境への影響に関する自然科学分野の研究、加害責任を明らかにする歴史学研究、放射線影響の基準を決定する政策学的研究、社会的影響を明らかにする社会学および人類学的研究などが蓄積されてきた。

しかしながら実際には、遺伝的疾患や食料に対する不安を訴える当事者の発言は「感情論」として切り捨てられる傾向にある。これまでの放射線影響に関する研究により、その不確実性が科学的に明らかにされてきたにも関わらず、実社会における被害対応や予防では、放射線影響の不確実性を生きる「生活者の視点」からの被害の理解は十分ではない。

そこで、本共同研究では、被害者の「当事者」としての「生きること」や「生活」の視点からの被害観の解明を目的とする。これまで個別に研究してきた人類学を中心として、医学、政治学、歴史学の学問分野と連携し、米国、マーシャル諸島、日本、太平洋を調査対象としたこれまで個別に行われてきた研究を統合・深化させる。

研究代表者 中原聖乃

班員（館内）林 勲男

（館外）市田真理 猪瀬浩平 岡村幸宣 越智郁乃 間間 元 桑原牧子 小杉 世  
島 明美 関 礼子 西 佳代 根本雅也 三田 貴 吉村健司

## 研究会

2016年6月11日

成果報告について、他の研究プロジェクトとの連携、新メンバーの自己紹介

桑原牧子（金城学院大学）「フランス領ポリネシアの核実験被ばく問題へのキリスト教的支援についての研究計画」

小杉世（大阪大学）「ニュージーランドから見た太平洋核実験——キリバス、仏領ポリネシアを中心に」

2016年10月29日（丸木美術館 埼玉県）

壺井明展ギャラリートーク参加 被ばく放射能汚染に関する芸術について学ぶ

丸木美術館館内にて作品鑑賞

2016年10月30日（丸木美術館 埼玉県）

放射線影響に関する基礎知識を学ぶワークショップ（小沢 洋一）

2017年2月4日

今後の研究計画および成果報告のための話し合い

特別講師による研究会

菅野利行（福島県富岡町職員）「富岡町の役割と復興への軌跡」

2017年2月5日

関 礼子（立教大学）「原発事故と当事者性の社会学」

島 明美（ふくみみラボ）「福島原発事故における情報リテラシー——当事者から見た6年間～ジャーナリズムの役割」

根本雅也（一橋大学）「科学・制度・経験——原爆被爆者の視点から考える放射線の影響」

## 成果

本年度は、3回の研究会を開催した。初回は、フレンチポリネシアにおける核実験とキリバスにおける核実験に関する現代的情報を共有することを目的とした。第3回目は、大規模な放射線被害の原点である広島原爆投下の被害者をめぐる状況について、また最も新たな放射線被害である福島原発事故を事例として取り上げながら、社会学による「当事者性」の分類について情報を共有した。同じく3回目には、富岡町の行政職員の方のお話を伺い、国と市民の間で重大な決断を迫られる現場を垣間見た。放射線被害の構造的なありようを確認できた。また、第2回目は、芸術が放射線被害をどう捉えられているのかを知るために、メンバーの所属先である埼玉県丸木美術館で開催された壺井明特別展『無主物』を、ギャラリートークとともに見学し、アートが制度によって認められえない放射線被害をあぶりだす手段となっている点を確認した。これまでの研究会で、放射線被害の世界的な広がりの中でとらえるとともに、それぞれの放射線影響に関する歴史的な文脈および社会的状況を知ることができた。

## 「医療者向け医療人類学教育の検討——保健医療福祉専門職との協働」

少子高齢化、医療の高度・専門分化、患者の権利意識の変化等に伴い、保健医療福祉の現場では、医療者とクラ

イアントあるいは多職種の間でのコミュニケーション不全の問題等、医療福祉系の個別の学問では対応しきれない複雑な課題が生まれている。これらの課題に日々直面する保健医療福祉専門職（以下、「医療者」）にとって、事象をその社会的文化的文脈の中で理解する視点、他者理解や自己相対化の視点を提供する医療人類学の知見の有用性は高く、医療者教育の現場でもその潜在的需要がある。また、医学教育では国際的な教育の質保証のため、今後5年程度の間には全国80大学が認証評価を受審するという動きがあり、その評価基準のなかで医療人類学も言及されている。こうしたなか、現代の日本の医療者を対象とした医療人類学教育のあり方を検討することは喫緊の課題である。そこで本共同研究では、複数の職種の医療者との協働により、医療者を対象とした医療人類学教育のあり方を検討し、その教材を開発することを目的とする。

研究代表者 飯田淳子

班員（館内） 鈴木七美 松尾瑞穂

（館外） 伊藤泰信 梅田夕奈 大谷かがり 工藤由美 辻内琢也 照山絢子 錦織 宏

濱 雄亮 浜田明範 星野 晋 堀口佐知子 宮地純一郎 吉田尚史

## 研究会

2016年7月3日

吉田尚史（東京福祉大学）「医療人類学の受容の系譜について——医療現場の要請から考える」

梅田夕奈（東京都立松沢病院）「医学を身に刻む——医学教育の内在的理解の試み」

参加者全員・総合討論

2016年11月12日

小田原悦子（聖隷クリストファー大学）「日本の作業療法教育と医療人類学への期待」

沖田一彦（県立広島大学）「語りに基づく医療と理学療法教育——理学療法士の卒前・卒後教育を実施して感じた課題」

参加者全員・総合討論

2017年2月5日

錦織 宏（京都大学）「日本の医学教育における社会医学、行動科学、社会科学、そして医療人類学」

宮地純一郎（浅井東診療所）「人類学者・医療者共同での症例検討会を通じた医療人類学教育——家庭医療学の視点から」

参加者全員・総合討論（医学教育モデル・コア・カリキュラム改訂に向けて）

## 成果

臨床医でもあり人類学者でもある2人の共同研究員による発表をはじめ、理学療法士・作業療法士の教育に関わる専門家、そして臨床医・医学教育研究者の発表をもとに、医療者教育において人類学が提供できる可能性のあることについての検討をおこなった。医療者の発表によれば、臨床現場では患者を社会的存在として見る見方、社会的・文化的文脈における行為や経験の意味の理解が必要とされる。また、近年は臨床家の間で「ナラティブに基づいた医療（NBM）」の重要性が指摘され、それに関する教育をすべきと言われていた。医療者は人類学者が思うほど実用や問題解決のみを求めている人ばかりではなく、対象や現象を理解するための視点やそれを表現する言葉を求めている人も多いということも指摘された。以上のことは必ずしも人類学の先端的な潮流とは合致しない面もあるが、医療者からの要望や期待に応え、医療専門職と人類学者が協働し、臨床と関連付けた形での医療者向け人類学教育をおこなっていくことの重要性が明らかになった。

## 「個—世界論——中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム」

中東は、古来より多様な人々が民族、宗教、言語の違いを超えて離合集散と交渉を繰り返してきた巨大な交流圏の一つである。この圏域では人名、地名、出来事で満たされたリフラと呼ばれる旅行記が精力的に産出されてきたが、固有名への強い関心は日常生活・会話の中でも広く見受けられ、人々の生活を基礎づける重要な関心の持ち方であると想定される。このような関心の広がりや、中東を基点として広がる世界において、生身の個人という存在と移動という経験、未知なる人・場・情報との遭遇こそが、世界を形成・構想するうえでの根幹と見なされてきたことを示唆する。

本研究は、中東を一つの基点として活躍する具体的個人に焦点を定めて、彼らの人・場・情報との出会い・交渉・関係の形成はいかにして実現されているのか、超地域的な人・物・知の交流とミクロな生活の場の形成とがどのよ

うに関連しているのかを探求することを通じて、個人が織りなす世界の特徴を解明しようとするものである。

研究代表者 齋藤 剛

班員（館内）西尾哲夫

（館外）池田昭光 宇野昌樹 大坪玲子 奥野克己 小田淳一 荻谷康太 佐藤健太郎  
椿原敦子 鳥山純子 堀内正樹 水野信男 嶺崎寛子

## 研究会

2016年6月4日

齋藤剛（神戸大学）「これまでの研究会の論点の整理」

奥野克己（京都文教大学）「ムスリム墓からみる個と社会」

2016年6月5日

鳥山純子（桜美林大学）「能動的な状況定義の考察に向けて——エジプトの学校教員にみる〈シャクセイヤ（shakhsiyya）〉とは何か」

2016年10月29日

小田淳一（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）「ラモン・リュイは『プリコルール』か？」

2016年10月30日

嶺崎寛子（愛知教育大学）「質問者と法学者の間——2000年代エジプトのファトワー相談電話を事例に」

2017年1月28日

池田昭光（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）「レバノンで民衆文化を考えること——相互行為的事例を用いた試み」

西尾哲夫（国立民族学博物館）、椿原敦子（龍谷大学）、鳥山純子（桜美林大学）「中東における〈民衆文化〉を巡って」

2017年1月29日

水野信男（兵庫教育大学）「アラブ音楽会議1932再考」

全員「本年度の共同研究の総括」

## 成果

本年度は、2016年6月、10月、2017年1月の都合3回、共同研究会を開催した。6月には齋藤が前年度の研究会を総括しつつ、そこで明らかになった検討課題を提示した。その後の研究会が取り扱った対象は多岐にわたるものであり、墓、調査者をも巻き込んだ日常的相互行為、キリスト教とイスラームの影響が交錯する中世西地中海を中心として活躍したキリスト教知識人ラモン・リュイの生涯と彼が編み出した世界解釈の理論の再検討、イスラーム法学者のファトワー相談電話、1932年に開催されたアラブ音楽会議の再検討などである。これらの事例を通じて浮かび上がって来た点の一つは、複数の文化、宗教、民族が交錯する中で、それらの文化、宗教、民族、さらには当該社会の規範と関わりながらも、同時に個人が規範、文化をいかにして組み替えているのかを明らかにしようとしている点である。

本共同研究では、こうした成果とあわせて、民衆、民衆文化の再検討を進め、2017年3月にはパリで開催された国際シンポジウム「La culture populaire au Moyen—Orient: Approches franco—japonaises croisées」を組織し、研究成果を発表した。

## 「確率的事象と不確実性の人類学——『リスク社会』化に抗する世界像の描出」

不確実な未来に人間がどう向き合うのかは、伝統社会を対象に、近代的・科学的な形式知では説明がつかない様々な生活実践を扱ってきた人類学において、重要な関心領域を形成してきた。一方で、社会学で台頭してきた「リスク社会」の議論は、学問分野の枠を超えて、人類学にも大きな影響力を与えている。近年の人類学では、「リスク社会」論をもとに、確率的事象を数量的に捉えて管理の対象とする「リスク」と、リスク計算による管理が困難な「不確実性」とを区別し、今日の社会・経済・政治的諸制度が後者の領域をも制御しようとする営為を、新たな考察対象としている。

しかし、上記の二分法的な不確実性の理解は、確率的事象の二面性を把握し切れていないと、本研究は考える。すなわち、集会的・統計的には計算可能で制御の対象とし得るが、一回限りの生起においては根源的な制御不可能性が露わになる。本研究はその両面に目を向けて、リスク管理の技術に依拠した諸制度の設計や人間の取扱いと、

個人の認識や実践との間に生じる深刻なずれを、考察の主題にする。その上で、人類学的「不確実性」研究の考察視角を拡張することにより、既存の「リスク社会」論の俎上に載らない「リスク社会」の姿を描き出す。

研究代表者 市野澤 潤平

班員 (館内) 飯田 卓

(館外) 東賢太郎 阿由葉大生 碓 陽子 井口 暁 磯野真穂 牛山美穂 近藤英俊  
土井清美 松田素二 吉直佳奈子 渡邊日日

## 研究会

2016年7月2日 (東京大学駒場キャンパス)

牛山美穂 (日本学術振興会) 「医療人類学における不確実性にかんする研究サーベイ」

碓 陽子 (金沢大学) 「文化人類学における不確実性にかんする研究サーベイ」

2016年7月3日 (東京大学駒場キャンパス)

東賢太郎 (名古屋大学) 「呪術・災因論および周辺領域における不確実性にかんする研究サーベイ」

全 員「研究会の理論的方向性の検討」

2017年1月7日

磯野真穂 (国際医療福祉大学) 「心房細動の抗血栓療法における不確実性」

土井清美 (青山学院女子短期大学) 「ツーリズム研究における『不確実性』の問題の射程」

2017年1月8日

吉井千周 (都城工業高等専門学校) 「『負の遺産』の処理と不確実性——廃炉作業人材育成と山住民」

全 員「不確実性概念にかかわる理論的検討」

## 成果

2016年度は、2回の研究会を開催した。本年度の研究会は、「不確実性」という研究視角の拡がりを押さえることを主眼とし、人類学における複数の研究領域において不確実性がいかにして議論されてきたのかをサーベイした (牛山美穂、碓陽子、東賢太郎、土井清美)。加えて、まさに現在、社会の着目を集める現象を二つ取り上げて、「不確実性の現在」にかかわる事例報告を行った (磯野真穂、吉井千周)。広範囲な理論的サーベイ/検討と、事例を深く掘り下げての分析を平行して実施していくことにより、不確実性への新たなアプローチへの示唆が数多く得られている。不確実性研究の新たな可能性への期待がふくらむが、その一方で、あまりに多岐にわたる関心を含むテーマであるために、議論を厳密にするための領域確定が、容易ではない。本研究会としては、新たな論点を見いだすことを最重視して、なるべく限定をかけずに視野を広げ、そこから重要なポイントを絞り込んでいく作業を、2017年度以降も継続する。

## 「高等教育機関を対象にした博物館資料の活用に関する研究」

近年、日本の高等教育機関では、大学教員の教育能力の向上が推進されており、個々の大学で大学教育の改革 (Faculty Development、以下、FD) が行われている。特に、大学教員を対象としたワークショップでは、学生主体の学びの開発が重視されていることから、学習教材の一つとしてモノ資料が見直されつつある。しかしながら、大学教員による博物館の利用は、展示見学にとどまっており、モノ資料による思考のあり方を検討するまでには至っていない。

そこで、本共同研究では、大学教員が博物館という「場」に足を運ぶ機会を提供し、モノ資料に触れ、それを活用した教育実践を、博物館関係者を交えて議論し、高等教育機関と博物館の連携による、より創造的な教育の可能性について検討を試みる。このような取り組みを通して、モノ資料を用いたFDの発展的貢献を図るとともに、大学と博物館とのアクセス回路の構築および高等教育機関における博物館資料の積極的な活用を目的としている。

研究代表者 呉屋淳子

班員 (館内) 河合洋尚

(館外) 稲澤 努 吉岡 乾 末森 薫 永田貴聖  
横山佐紀 金田純平 黒田賢治 五月女賢司 坂本 昇 時任隼平 如法寺慶大  
吉田早悠里



## 研究会

2016年4月23日

呉屋淳子（山形大学）成果物に関する打ち合わせ  
 呉屋淳子（山形大学）「ミュージアムが内包する高等教育の可能性」  
 総合討論  
 発表の計画概要（参加者全員）

2016年12月17日

河合洋尚（国立民族学博物館）「民族教育の〈場〉としての博物館——中国、オーストラリアにおける華人系資料の活用」  
 稲澤努（尚絅学院大学）「大学教育における博物館資源の活用——みんぱくを事例として」

2016年12月18日

石倉敏明（秋田公立美術大学）「メソコスムとしてのミュージアム体験」  
 時任隼平（関西学院大学）「教科『情報』におけるみんぱくを使った情報収集能力育成に関する実践」  
 如法寺慶大（南山大学）「博物館に『参加』する——博物館作業の経験から得る学びの一事例 アルバイトから得る学びについて考える」  
 出席者全員「これまでの議論の整理と来年度の出版計画について」

## 成果

2016年度は、4回の会合を持った。今年度は、おもに、博物館・美術館における「教育的経験」に着目し、発表者の専門分野や教育実践に基づいた発表を通して、博物館・美術館の資源の活用とその可能性について検討した。まず、本研究の軸となる、呉屋の近年の高等教育機関におけるFD（Faculty Development）の状況とその可能性について確認し、博物館・美術館と高等教育機関が連携することによる新たな教育の場の生成について検討した。これらを踏襲して稲澤は、博物館資料の活用事例を初等・中等教育に比べ、より柔軟性のある高等教育の教育環境について検討した。

また、空間としての博物館・美術館と高等教育機関がどのように関わっていくのかについて事例をもとに検討を行った。時任は、中等教育における「情報」の科目における教育実践の事例を通して、インターネットからの情報と、モノ資料から読み取る情報を併せた情報収集の方法の検討を行い、モノ資料を用いた新たな授業改善の可能性について指摘した。如法寺は、自身の博物館教育における「経験」を通して、学芸員としての知識をどのように身につけ、それを実際の博物館業務の中でどのように活かされているかを、過去から現在までの経験と併せた実体験から指摘した。河合は、中国の民族教育の場としてのミュージアムの検討から、公共空間としてのミュージアムに求められる役割について問題提起を行なった、ゲストスピーカーとして参加した石倉からは、「メソコスムとしてのミュージアムの経験」の事例を通して、「世界を分類する場所」から「世界の価値を見出す場所」としての博物館・美術館の可能性について指摘した。今年度は、ディシプリンを超えて、活発な議論を行うことができた。

## 「捕鯨と環境倫理」

人類は5000年以上にわたり鯨類を食料や原材料として持続的に利用してきたが、1982年に国際捕鯨委員会（IWC）において大型鯨類13種の商業捕鯨の一時的な捕獲禁止が決定された。その後、現在に至るまで同捕鯨は再開できないままである。この捕鯨をめぐる動きは、動物福祉・動物愛護・環境保護団体による反捕鯨運動と連動し、反捕鯨を支持する人びとや政府が増加し、世界各地の捕鯨や捕鯨文化は存続の危機に直面している。

反捕鯨運動の背後には、世界各地におけるクジラと人間の関係やクジラ観、環境観の歴史的変化が存在している。この共同研究では、世界各地の捕鯨の現状および欧米に端を発する反捕鯨運動について把握したうえで、世界各地の反捕鯨運動とその背後にあるクジラ観や環境・動物倫理がどのように形成され、世界各地に広がり、世界各地の捕鯨文化にいかなる影響を及ぼしているのかについて検討を加える。より具体的には、アラスカやカナダ、グリーンランド、カリブ海地域等の先住民等による捕鯨、日本の調査捕鯨と小型沿岸捕鯨、ノルウェーとアイスランドの商業捕鯨等の現状と、動物福祉・動物愛護・環境保護団体による国際的な反捕鯨運動およびその諸影響について比較するとともに、その背後にあるクジラ観や環境観、捕鯨政策を学際的に検討する。

研究代表者 岸上伸啓

班員（館内） 出口正之

（館外） 赤嶺 淳 李 善愛 生田博子 石井 敦 石川 創 伊勢田哲治 白田乃里子

河島基弘 倉澤七生 佐久間淳子 真田康弘 高橋美野梨 浜口 尚 本多俊和  
吉村健司 若松文貴

## 研究会

2016年11月5日

岸上伸啓（国立民族学博物館）共同研究「捕鯨と環境倫理」の全体計画について  
共同研究における各自の研究テーマについての検討（全員）

2017年1月22日

趣旨説明（岸上伸啓）

「グリーンランド捕鯨の歴史、現状と国際関係」

本多俊和（放送大学）「文化人類学の視点から」

高橋美野梨（北海道大学）「国際政治学の視点から」

浜口 尚（園田学園女子大学短期大学部）「カリブ海ベクウェイ島におけるザトウクジラ捕鯨——歴史、現状および課題」

岸上伸啓（国立民族学博物館）「北アメリカにおける先住民による捕鯨の歴史と現状——アラスカのホッキョククジラ鯨を中心に」

総合討論

## 成果

本年度は、共同研究の初年度にあたるため、第1回研究会では、問題の共有を行った後に、研究計画について検討し、今後の方針を決めた。

第2回研究会では、国際捕鯨委員会の管轄下にある先住民生存捕鯨（Aboriginal Subsistence Whaling）の事例としてグリーンランドの捕鯨、ベクウェイ島におけるザトウクジラ捕鯨、アラスカ先住民イヌピアットのホッキョククジラ鯨について報告し、検討を加えた。その結果、次のことが明らかになった。

- (1) デンマークが構成国のひとつである EU（欧州連合）は、鯨類保護を政策のひとつとしており、デンマーク領グリーンランドにおける捕鯨に反対している。これに対し、デンマーク政府は、グリーンランド人の意思の尊重と、干渉しないという政治的立場に基づいて、グリーンランドの捕鯨を認めている。
- (2) グリーンランドでは鯨肉や脂皮が公設市場などで販売されているため、商業的ではないかと、反捕鯨団体から批判されている。また、現代のグリーンランド人の中には鯨肉よりも牛肉や羊肉を好む傾向がある。さらに、グリーンランドの捕鯨には脱儀礼化が顕著に認められる。
- (3) ベクウェイ島ではザトウクジラ捕鯨が実施されているが、近年、環境 NGO が捕鯨をホエール・ワッチング業に転向させるための活動をしている。しかし、ザトウクジラは2月から5月にかけて同島の近くを通過するだけなので、ホエール・ワッチングを事業とすることは困難である可能性が高い。
- (4) アラスカのホッキョククジラ鯨は先住民の生活や世界観、アイデンティティと深く関連している。しかし、その実施には現金が必要であることや、温暖化の悪影響、環境団体や動物福祉団体の反捕鯨運動、捕鯨に反対する国家の増加等のために、ホッキョククジラ鯨は存続の危機に直面している。

以上から、世界各地で実施されている先住民生存捕鯨の将来は明るくないということが分かった。

## 「世界のビーズをめぐる人類学的研究」

本研究は、本館の所蔵する標本資料の一つであるビーズ（トンボ玉や勾玉を含む）を主な対象にして、人類の生活にとってのビーズの役割とは何かを明らかにすることを研究目的とする。まずビーズとは、何らかの素材を紐で通したものとして定義する。その素材は、木の実、植物の種、動物の歯や骨、貝殻、ダチョウの卵殻、石や金や琥珀のような鉱物、鉄、ガラス、粘土、プラスチックなど多様である。また、ビーズ細工には首飾りのような線状のものから、バッグのような面状のものまで形もさまざまである。さらに、それは単なる美しさを求める装身具としてのみならず、富の象徴や社会的威信、および集団のアイデンティティなどを示すなど社会的役割を持っている。本研究では、本館のビーズ資料そのものの分析に加えて、主として歴史考古資料や民族誌のなかでビーズの技術的・社会経済的意味について考察することから、人類にとって美を追求することには普遍性があるのかを論議する。

研究代表者 池谷和信

班員（館内）印東道子 齋藤玲子 野林厚志 末森 薫 戸田美佳子

(館外) 遠藤 仁 落合雪野 門脇誠二 川口幸也 河村好光 木下尚子 後藤 明  
佐藤廉也 田村朋美 中村香子 谷澤亜里 山花京子 山本直人

## 研究会

2016年10月10日

池谷和信(国立民族学博物館) 研究会の趣旨「ビーズをめぐる人類学的研究——「ビーズ学」の可能性を求めて」  
門脇誠二(名古屋大学) 「ホモ・サピエンスの出現・拡散とビーズに関する考古記録」  
山本直人(名古屋大学) 「贈り物としての縄文時代の翡翠ビーズ」  
河村好光(石川考古学研究会) 「日本諸島の石製ビーズ概観」  
谷澤亜里(九州大学) 「弥生——古墳移行期の社会とビーズ」  
田村朋美(奈良文化財研究所) 「製作技法と化学組成からみたガラスビーズの交易ルート」  
末森 薫(国立民族学博物館) 「中国仏教壁画に描かれたビーズ」  
木下尚子(熊本大学) 「琉球列島の貝玉文化」  
後藤 明(南山大学) 「ソロモン諸島のビーズ製貝貨について——ニューアイルランドの貝貨幣とトロブリアン  
ドのクラの財宝(ビーズ製首飾り)との比較」  
印東道子(国立民族学博物館) 「オセアニアのガラスビーズの歴史性」  
齋藤玲子(国立民族学博物館) 「アイヌのタマサイ——首飾りに使われるガラス玉を中心に」  
野林厚志(国立民族学博物館) 「台湾原住民族のビーズの歴史と現在」  
落合雪野(龍谷大学) 「東南アジア大陸部、ジュズダマ属植物の種子ビーズをめぐる文化」  
中村真里絵(国立民族学博物館) 「焼物からネックレスへ——土製ビーズの誕生」  
遠藤 仁(秋田大学) 「南アジアにおける準貴石製ビーズの過去と現在——紅玉髓を中心として」  
戸田美佳子(国立民族学博物館) 「カメルーンの身体装飾とビーズ」  
佐藤廉也(大阪大学) 「ビーズ着用の様相と変容」  
中村香子(京都大学) 「『伝統衣装』の変容と維持——ケニア牧畜民のビーズ装飾を事例に」  
出席者全員「全体討論」

2016年12月11日

### ◇第1部：研究紹介

山花京子(東海大学) 「ビーズの文化とチェーンの文化——古代エジプトと古代東地中海世界との対比」  
川口幸也(立教大学) 「アフリカアートとビーズ」

### ◇第2部：交易とビーズ

池谷和信(国立民族学博物館) 「趣旨説明」  
後藤 明(南山大学) 「交易の理論とオセアニアの貝ビーズ」  
遠藤 仁(秋田大学) 「インダス文明期における準貴石製装身具の製作技術と流通」  
田村朋美(奈良文化財研究所) 「ガラスビーズから見た東西交易——日本出土『西のガラス』の考古科学的研究」  
中村香子(京都大学) 「東アフリカとチェコのガラスビーズ」  
総合討論

## 成果

本研究会は、民族学・考古学・地理学など学際的な視点から世界のビーズの歴史の変遷と現状を把握することを目的とした。第1回目では、研究会のメンバーがほぼ全員みずから研究を報告することによって十万年にわたるビーズの歴史および地球のすみずみまでに広がった多様なビーズの現在について明らかにされた。そこではガラスビーズのみならず草の実や木の実、貝殻、卵の殻、動物の歯や骨、石などの多様な素材が使われており、世界的に見ると地域文化におけるビーズの特性が明らかになった。第2回目においては、「ビーズと交易」というテーマのもとでエジプト文明およびインダス文明、古代日本そしてオセアニアの貝殻や東アフリカの牧畜民のガラスビーズと交易の関係が明らかにされた。

以上のことからビーズを対象にした人類学的研究においては、多様な素材、素材と交易とのかかわり方、素材そのものの変化などを考慮することによってビーズの歴史的な変遷および地域間比較が可能になるとまとめられる。

### 「もうひとつのドメスティケーション——家畜化と栽培化に関する人類学的研究」

本研究の目的は、人類による家畜化や栽培化にかかわる新たな事例を比較検討することで、それらの現象を整理

し、概念枠組みを明確にすることである。ここでいう新たな事例とは、野生性の保持や野生種の利用、反馴化というように、家畜動物特有の性質（非攻撃的性格や馴れやすさなど）を獲得させない動物飼育の事例や栽培化症候群（脱粒性の喪失や無毒化など）を起こさない植物栽培の事例のことである。本研究では、こうした事例を「もうひとつのドメスティケーション」という言葉で表現する。

具体的には、本研究では(1)「もうひとつ」の動植物利用にかかわる民族誌的事実の報告をおこない、(2)複数の事例を比較検討することで、動植物に対する人間の働きかけを類型化する。これにより、対象とする生き物の利用形態の普遍性と特異性を導きだすことができるであろう。そのうえで、(3)従来のドメスティケーションの議論を踏まえながら、本研究の独自性と概念枠組みを明確にする。なお、本研究ではまず生業活動のなかで「手段」として利用される動植物を取りあげる。これは、鶉飼や鷹狩、狩猟、魚毒漁などで利用される動植物には上述の事例が多くみられるからである。その後、ほかの動植物利用の事例に研究対象を拡大する。

研究代表者 卯田宗平

班員（館内）池谷和信 野林厚志  
（館外）梅崎昌裕 小谷真吾 小坂康之 齋藤暖生 篠原 徹 須田一弘 竹川大介  
那須浩郎 広田 勲 藤村美穂 古澤拓郎 安岡宏和 山本宗立

## 研究会

2016年12月17日

卯田宗平（国立民族学博物館）「共同研究会の趣旨説明と問題意識の共有」

共同研究会メンバーの自己紹介と研究展望

須田一弘（北海学園大学）「野生のジャコウネコ利用について」

藤村美穂（佐賀大学）「宮崎県の山村における狩猟犬の飼育について」

竹川大介（北九州市立大学）「山師がもつ自然に対する考え方や態度について」

小谷真吾（千葉大学）「パプアニューギニアにおける狩猟犬と人とのかかわりについて」

梅崎昌裕（東京大学）「腸内細菌とドメスティケーションについて」

安岡宏和（京都大学）「pigミーの農耕化と野生ヤムの利用について」

小坂康之（京都大学）「外来植物のドメスティケーションについて」

野林厚志（国立民族学博物館）「人類社会における排泄物の利用について」

山本宗立（鹿児島大学）「鹿児島の花岡胡椒の栽培化と遺伝的な変化について」

山本紀夫（国立民族学博物館）「奇形に対する考え方と多様な品種保全とのかかわりについて」

齋藤暖生（東京大学）「ハビタットの改変について」

篠原徹（滋賀県立琵琶湖博物館）「カブの品種保全について」

質疑応答

相馬拓也（早稲田大学）「イヌワシ——モンゴル西部アルタイ山脈における鷹司とイヌワシとのかかわり」

質疑応答

2017年1月28日

卯田宗平（国立民族学博物館）「前回の共同研究会での指摘を踏まえて」

広田勲（岐阜大学）「自己紹介と展望」

那須浩郎（総合研究大学院大学）「植物考古学からの視点」

質疑応答

竹川大介（北九州市立大学）・南香菜子「人はどのように鷹を理解するのか——鷹狩の調教における『慣れ』と『狩り』のプロセス」

質疑応答

卯田宗平（国立民族学博物館）「ウミウ——『手段』としての動物と鶉匠とのかかわり」

質疑応答

## 成果

2016年度は計2回の研究会を開催した。第1回目の研究会では代表者である卯田が「もうひとつのドメスティケーション」に関わる問題意識と今後の研究方針を示した。具体的には、動物の家畜化や植物の栽培化の過程で獲得される Domestication syndrome（家畜化・栽培化症候群）について、植物の生理生態の変化や動物の行動上の変化



を整理し、研究会メンバーと共有した。その後、相馬拓也氏（早稲田大学）によるモンゴル西部アルタイ山脈における鷹狩研究の成果報告をおこなった。この結果、鷹匠たちは調教の過程でイヌワシに目隠し帽を被らせたり、睡眠制限をしたりすることでイヌワシを服従させる一方、食事制限をすることで狩りへの闘争本能を忘れさせないようにするという働きかけもおこなっている事実が明らかになった。この研究報告を踏まえて、第2回目の研究会ではさらに日本の鷹狩と鶺鴒の事例に焦点をあて、動物利用の共通性を検討した。この結果、鷹匠や鶺鴒匠たちの働きかけのなかにも調教の過程で「狩り」と「慣れ」という相反する二つの志向性が内在していることが明らかになった。こうした研究成果を踏まえ、研究会では今後も引き続き「手段」としての動物に着目し、そこにみられる共通した動物利用の論理をさらに検討していく必要があるという結論にいたった。

### 「会計学と人類学の融合」

地中海時代のイタリアに端を発する近代会計学は、口別計算から期間損益計算、現金主義から発生主義へという進化主義的発想を明確に持つディシプリンの一つであるといえる。また、企業会計を中心に発展してきたことから、企業のグローバル化に伴い、必然的に会計基準のグローバル化を求めるようになっていった。その結果、各国の企業会計の違いを超えたグローバル・スタンダードとしてのIFRS（国際財務報告基準）が策定されて、会計関係者の間ではIFRS適用問題が大きな関心事となっている。

他方で文化人類学者は進化主義思考やグローバリゼーションに対してクリティカルに見る方法を駆使してきた。市場主義的かつ自己規律的な Audit Cultures (Shore&Wright 1999, Strathern2000) についても批判を加えている。しかしながら、Audit Cultures の中核に位置するともいえる会計学者にその声が届いているとはとても思えない現状もある。

本研究会はこうした状況をかながみて、両者が議論しやすい課題として会計基準の中でもガラパゴス化した非営利会計基準（平成20年公益法人会計基準、平成23年学校法人会計基準、平成27年社会福祉法人会計基準など。これらは実は全く異なっている）に焦点を当てる。これらは、各法人制度の文化的側面を色濃く残し、また、いずれもごく最近になって改訂が加えられたという特徴を持つ。接点が難しい会計学と文化人類学の中で、会計と文化、普遍化と個別化の問題を両学問からアプローチするのに最も適したテーマであると考え、本申請はこれらを中心に会計学と人類学の学際研究を試みようとするものである。

研究代表者 出口正之

班員（館内）宇田川妙子

（館外）石津寿恵 大貫 一 尾上選哉 金セツピョル 西村祐子 早川真悠 深田淳太郎  
藤井秀樹 古市雄一朗

### 研究会

2016年10月29日

出口正之（国立民族学博物館）「文化人類学と会計学はどこで繋がるのか」

共同研究員全員 討論

博物館内見学

尾上選哉（大原大学院大学）「公益法人会計基準の変遷：アカウントビリティ・コンセプトの観点から」

質疑（共同研究員全員）

共同研究員全員「研究会の進め方とアウトプットのイメージ」（進行：出口）

2016年11月26日

出口正之（国立民族学博物館）「『会計』及び『会計基準』等の定義について」

藤井秀樹（京都大学）「会計システムの比較制度分析」

討論

早川真悠（摂南大学）「ジンバブエのハイパーインフレーション」

討論

2017年1月21日

出口正之（国立民族学博物館）「本日の研究会の趣旨」

岸上伸啓（国立民族学博物館）「文化人類学における贈与論」

討論

石津寿恵（明治大学）「病院の財務情報開示——日米の制度比較を踏まえて」

## 討 論

### 次年度の研究会の進め方

#### 成果

研究会の「会計」の作業定義を定めることができ、会計学者と文化人類学者の「トランスフォーマティブ・リサーチ」としての共同研究の基礎固めを行った。

#### 【本研究会における「会計」の作業定義 2017.1版】

「会計」は、ある主体の「贈与としての事業」及び「非贈与取引としての事業」の成果を表す「言語」である。ここで、「言語」とは、数量的及び記述的表現を含むものである。

ここで、括弧付きの「贈与」を強調したのは、企業会計は商取引だけを見るので、現実的に、寄付やボランティアは考慮されない。それに対して、非営利組織では、カネやモノの寄付、ボランティアなどは、当たり前のように存在する。こうした点で人類学者との接点を切り開こうとするためである。また、同じく括弧付きの「言語」をいれたのは、「会計は事業の言語」(伊藤邦雄2014)という会計学者もいるので、ここでの「言語」は、他者を前提にした伝達という相互行為の手段としての意味を含むものとして使用している。

さらに「数量的及び記述的表現を含む」とは、会計は、貨幣経済を前提としない、より普遍的な社会にも存在するものと仮定して理解する。例えば、「腕輪と首飾りの交換をした」という表現上の記述は「会計」の定義に含まれるものとした。また、英国の「チャリティ」(「公益の組織として認められた団体」を示す法律用語)の報告書で、「会計実務勧告書」と会計学者に訳されているSORP (Statement of Recommended Practice) (注:「チャリティ」が活動の内容を社会や政府に報告するときの推奨される書類)には、チャリティの活動がどのように公益を増進させたかを記述することなどが求められている。そこで、このような記述的報告内容も含んで「会計」と定義している。(伊藤邦雄 『新・現代会計入門』東京:日本経済新聞出版社。2014)

また、非営利法人会計と企業会計の相違を考えたときに、非営利法人会計には、寄付やボランティアといった「贈与」が入り込んでいることから、まず切り口として、「贈与論」との関係を整理した。

#### 『「障害」概念の再検討——触文化論に基づく『合理的配慮』の提案に向けて』

2016年4月、障害者差別解消法が施行された。現在、さまざまな分野で障害者に対する「合理的配慮」のあり方について議論が始まっている。米国のADA(アメリカ障害者法)は1990年に制定され、その理念が社会に定着するまで20年以上かかった。日本でも今後、差別解消法に基づく諸システムを構築していくために、「障害」に関する幅広い研究が求められているといえよう。

一方、2020年のオリンピック・パラリンピックの東京開催に向けて、ユニバーサル・ツーリズム(誰もが楽しめる観光・まちづくり)の必要性が各方面で強調されている。旅行業界では、障害者対象のツアーを企画・実施するケースも増えた。パラリンピック効果による障害者への関心の高まりを一過性のブームで終わらせないためにも、娯楽・余暇における「合理的配慮」の形態を文化人類学的に研究する試みが不可欠だろう。

本共同研究の目的は、2012~14年度に実施した「触文化に関する人類学的研究」を継承し、「ユニバーサル・ミュージアム」「手学問」などの理論を駆使して、「障害」概念を再検討することである。公共施設(とくに博物館)での「合理的配慮」の具体像を探究し、広く社会に発信したい。

研究代表者 廣瀬浩二郎

班員(館外) 石塚裕子 大石 徹 大高 幸 岡本裕子 黒澤 浩 小山修三 篠原 聡  
鈴木康二 原 礼子 藤村 俊 堀江典子 真下弥生 宮本ルリ子 山本清龍

#### 研究会

2016年11月27日

廣瀬浩二郎(国立民族学博物館)「新規共同研究プロジェクトの意義と目標」

小山修三(国立民族学博物館)「ユニバーサル・ミュージアム研究の回顧と展望」

ハイディ・ラム(早稲田大学東アジア太平洋研究科)「『歴史』を体感する作法と手法——日光江戸村・太秦映画村のフィールドワークから考える」

さかいひろこ(イラストレーター)「わかりやすい触知図とは何か——手探りと手作りの現場から」

石塚裕子(大阪大学未来戦略機構)「ユニバーサル・ツーリズムの実践的研究——いわきの過去・現在・未来を感じるツアーの立案」

2017年3月5日（国際基督教大学博物館）

増子 正（青森県立盲学校）「視覚障害教育と博物館利用」

山田菜月（北海道教育大学岩見沢校）「ユニバーサル・ミュージアム研究の展望——私の卒業論文から」

岡本裕子（岡山県立美術館）「美術館事業の幅を広げる『合理的配慮』——“美術館ワークショップ”について考えてみる」

篠原 聡（東海大学）「美術鑑賞の新たな可能性——触常者と創る美学研究の未来」

原 礼子（国際基督教大学博物館）「触察展示の意義——博物館における『合理的配慮』の検討に向けて」

## 成果

障害者差別解消法の施行をきっかけとして、各地の大学、図書館では「合理的配慮」に基づく環境整備が始まった。一方、博物館における「合理的配慮」に関しては、取り組みが遅れている。そういった現状を踏まえ、11月の研究会では、本共同研究が果たすべき役割、目標を確認した。初回研究会では、幅広い視点で「合理的配慮」をとらえるために、観光・まちづくりと博物館の比較を試みた。

2016年8月に、前回の共同研究「触文化に関する人類学的研究」（2012～14年度）の成果として、廣瀬編『ひとが優しい博物館』が刊行された。博物館での「合理的配慮」を考える場合、本書が議論の出発点となるのは間違いない。3月の研究会では、拙編著の刊行後のユニバーサル・ミュージアムの最新動向について実践報告があった。今年度、廣瀬は兵庫県立美術館の企画展（7月～11月）、奈良県国民文化祭イベントの体感展示（2月）にアドバイザーとして参加・協力した。今後も共同研究の成果を活用しつつ、展示やワークショップ企画に取り組んでいきたい。

## 「物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究」

本研究では、アフロ・ユーラシア乾燥地全域を対象としつつ、とりわけサハラ沙漠、ナイル河岸、紅海沿岸、アラビア半島、イランに位置する5つの異なるオアシスにおける生活の持続と変容について、物質文化に焦点をあてて検証することにより、沙漠社会の移動戦略の比較研究を推進する。注目する物質文化は、(1)ラクダと船に関わるモノ（陸域と海域の連続性）、(2)飲料と食料に関わるモノ（食品保存と運搬性）、(3)衣装と住居に関わるモノ（熱帯と温帯・寒帯の対称性）である。これらの物質文化の検討をもとに、人類の進化と適応、社会組織の可変性と開放性、物質加工の技術と担い手の交流という3つの観点から沙漠社会の移動戦略を解明する。並行して、片倉もとこ（文化人類学者／地理学者）によるアラビア半島に関する現地調査資料（1968-2008）、小堀巖（地理学者）によるアルジェリア・サハラ沙漠に関する現地調査資料（1968-2010）といったおよそ半世紀前に記録・収集された学術資料を活用して、生活空間・物質文化・移動戦略の関係性とその変化についても検証していく。

研究代表者 縄田浩志

班員（館内）西尾哲夫

（館外）石山 俊 遠藤 仁 片倉邦雄 河田尚子 郡司みさお 児玉香菜子 坂田 隆  
真道洋子 中村 亮 西本真一 原 隆一 藤本悠子 古澤 文 渡邊三津子

## 研究会

2016年10月7日

縄田浩志（秋田大学）「みんなく資料概要説明」  
展示準備室にて片倉もとこ収集資料200点の実見

2016年10月8日

縄田浩志（秋田大学）「研究会の目的」  
中村 亮（国立民族学博物館）「ダウ船からわかること」  
研究会メンバー自己紹介とこれからの研究会について議論

2016年11月25日

縄田浩志（秋田大学）開催趣旨説明  
ムハンマド・アフマド・ムハンマド・スリマーン（エジプト考古省近代遺跡局長）「イスラーム時代アレクサンドリアの水システム（621-1952）」  
縄田浩志（秋田大学）「紅海産黒サンゴのお数珠としての利用」  
深見奈緒子（日本学術振興会カイロ研究連絡センター長）コメント

## 総合討論

2016年11月26日

片倉邦雄、藤本悠子、古澤文（片倉もところ記念沙漠文化財団）「文化人類学者・片倉もところが遺したモノ」

河田尚子（片倉もところ記念沙漠文化財団）「文化人類学者・片倉もところが著した世界」

郡司みさお（早稲田大学国際情報通信研究センター）「サウジアラビアの女性の生活と物質文化」

総合討論

## 成果

本共同研究初年度の2016年度には、物質文化の中でも沙漠に接する海域に関わるモノとして船と黒サングソして水の利用に焦点をあてた。また、国立民族学博物館の標本資料目録にある所蔵品を本館バックヤードで研究メンバー全員で実見しながら、片倉もところによるアラビア半島の現地調査資料の活用について議論した。

例えば「H0100191/漁船/アラブ首長国連邦/1982年」に注目した。片倉もところ記念沙漠文化財団に残されている漁船収集当時のアラブ首長国連邦のシャルジャの造船場での現場写真、購入経緯がわかる通関書類、その社会的背景に関する資料と照合した。残念ながら2013年3月には漁船本体は廃棄処理がなされていたことがわかったが、廃棄前に撮影された写真、解体した際の観察等の資料調査記録を参照することができたため、船体の形状や特徴から20世紀後半アラビア湾にて使用されていた木造漁船としての学術的価値を確認できた。アラビア湾で20世紀後半に使用されていた木造漁船の構造を「インド洋海域世界」で比較研究することで、物質文化の視点から海上ネットワークをつうじた沙漠社会の交流史と移動戦略を再検証していく視点を獲得できた。

## 「音楽する身体間の相互作用を捉える——ミュージッキングの学際的研究」

音楽の人類学的研究は半世紀ほどの歴史をもつが、従来の研究の多くは、音楽の意味を音（テキスト）に求める「音楽学」寄りの研究と、音の文化的背景（コンテクスト）に音楽の存在意義を求める「人類学」寄りの研究とに分かれる傾向にあった。また、両者の学術的対話の困難さもこれまで指摘されてきた。

他方で近年では、人類学と音楽学とを架橋する研究者らが、人間の音楽的な営みを“音楽すること musicking”として理解することを提唱している。music の動名詞型にあたる「ミュージッキング」には、歌い・奏し・踊ることだけでなく、手拍子や聴取といった行為までも含まれる。これは、音楽の実践における身体性に着目することで、“音楽”という近代的かつ抽象的な概念を根本から再考するために提案された鍵概念である。

本研究は、記述・分析の対象を「音楽」から「ミュージッキング」へとずらし、パフォーマンスのさなかにある身体同士のやりとりを音楽的出来事に不可欠な一部分として語るための方法論を確立することを目的とする。

研究代表者 野澤豊一

班員（館内）川瀬 慈

（館外）青木 深 井手口彰典 岡崎 彰 梶丸 岳 大門 碧 武田俊輔 谷口文和  
西島千尋 伏木香織 増野亜子 松平勇二 矢野原佑史 輪島裕介

## 研究会

2016年10月15日

野澤豊一（富山大学）「趣旨説明 音楽する身体間の相互作用を捉える」

全 員 メンバー自己紹介および今後の計画についての打ち合わせ

2016年10月16日

武田俊輔（滋賀県立大学）「『民謡』生成の『場』を読む思考——柳田國男の民謡論」

梶丸 岳（京都市立芸術大学）「掛唄大会という場——民謡のエスノメソドロジー」

全 員 総合討論

2016年12月17日

野澤豊一（富山大学）「サウンドによる seamlessness と感情の共有——米国黒人ペンテコステ派キリスト教会のミュージッキング」

川瀬 慈（国立民族学博物館）「『精霊の馬』上映——ザール憑依儀礼の映像記録・表現をめぐる」

全 員 総合討論



## 成果

初年度（2016年度）は2回（のべ3日間）の共同研究会を実施した。初回では研究代表者の野澤が趣旨説明を行い、本研究会のねらいや問題意識、今後の方針について述べた。つづいて、出席したメンバー全員の調査地域や研究テーマを紹介し合い、各々が本研究会にどのように貢献するかを話し合った。その後の研究会の発表内容は次の通りである。理論面では、野澤が musicking や participatory music という概念と本研究とのかかわりを報告し、武田は柳田國男が民謡の歌われる場をダイナミックな相互行為が起こる場として把握する必要性を説いていたことを報告した。事例研究では、梶丸が秋田県横手市の金澤八幡宮で行われている掛唄大会や直会の場における歌唱による相互行為について、野澤が米国の黒人キリスト教会における音とダンスのかかわりについて、川瀬がエチオピアにおけるザール憑依儀礼の動態を映像作品の上映によって、それぞれ報告した。なお、当初予定していた「ミュージッキングの場を当事者として経験すること」をテーマにした発表および討論は、主要な発表者が長期の海外滞在中であったため、次年度に開催することにした。

### 「現代日本における『看取り文化』の再構築に関する人類学的研究」

本研究は、現代日本の超高齢社会における地域包括ケアシステムとそこに通底する死生観や人格観、家族観を明らかにしながら、「医療の生活化」という概念を手掛かりに、地域社会での「看取り文化」を新たに構想することを目指す。

日本は世界に類を見ないスピードで高齢多死社会に突入しつつある。病院死がおよそ80%占める一方、「終活」の展開や葬儀の多様化が進み、「その人らしい死」「死の自己決定」という死の文化的、社会的変容が起こっている。また「独居老人」や「孤独死」という言葉に見られるように家族観の変容と地域社会の変貌が指摘されている。近年、厚生労働省は高齢多死社会を見据えて病院医療から在宅医療への転換を打ち出し、終末期医療の再検討を始めた。これにより日本各地で在宅（施設を含む）での「看取り」のあり方が模索され始めている。今日、在宅の「看取り」には医療福祉制度の充実や多職種連携は不可欠であるが、そこには実践的課題と学術的課題がある。前者は、既存の地域包括ケアシステムが抱える問題、公的介護と家族介護とのバランスという課題である。後者は、死の医療化論、死生観と家族観の変容、死の個人化を促す地域社会の再検討という理論的課題である。本研究では、国外の「看取り」実践を参照点とし、上記の二つの課題を横断的に捉えつつ、現代日本における「看取り文化」の再構築への道筋を提示する。

研究代表者 浮ヶ谷幸代

班員（館内）鈴木七美

（館外）相澤 出 渥美一弥 鈴木勝己 田代志門 田中大介 松繁卓哉 山田慎也

## 研究会

### 第1回共同研究会

2016年10月22日

共同研究員の自己紹介と共同研究における役割分担

浮ヶ谷幸代（相模女子大学）「現代日本における『看取り文化』の再構築に関する人類学的研究」についての趣旨説明と問題提起

田代志門（国立研究開発法人国立がん研究センター）「『死の社会学』の系譜」

2016年10月23日

松繁卓哉（国立保健医療科学院）「地域包括ケアシステムの中で構想されている『看取り』」

### 第2回共同研究会

2016年12月10日

田中大介（桜の聖母短期大学）「『死の人類学』の系譜」

総合ディスカッション「『看取り文化』の再構築のための学術研究の方向性——第1回の田代報告と松繁報告を踏まえて」

2016年12月11日

相澤 出（医療法人社団爽秋会岡部医院研究所）「看取りをめぐる体験との向き合い方——在宅緩和ケアのケア提供者側に焦点をあてて」

## 成果

本共同研究では、古い、就活、ターミナルケア、死、葬儀、墓に至るまでのプロセスを視野に入れ、広義の「看取り文化」の再構築を目指すことを確認した。理論的枠組みとして「医療の生活化」論と「ケア論、コミュニティ論、地域論」を整理した。次に、二つの課題のうち、学術的課題として「死の社会学」の系譜から、認識論的研究（死のタブー化、死の自己決定権批判）と実証的研究（ホスピス等の遺族研究、悲嘆研究）の流れを近代化の中に位置づけ、これまで欠落していた「死に逝く人の経験」の研究を課題として示した。また、「死の人類学」研究では、葬制・儀礼研究からデス・スタディの周辺と医療人類学や民俗学の領域へとシフトしていることを示した。他方、実践的課題として「終末期医療」「医療ニーズ」「医療的介入」「規範」「地域で看取る」という観点から、日本の地域包括ケアシステムがはらむ問題を提起した。次年度以降の事例研究の導入として、宮城県の緩和ケアホスピスにおけるケア提供者と遺族のお迎え体験に関する意識調査の結果を報告した。

## 「消費からみた狩猟研究の新展開——野生獣肉の流通と食文化をめぐる応用人類学的研究」

本研究は、現代の日本を含む世界各地における狩猟を、消費の視点からとらえることを目的とする。狩猟は、文化人類学や日本民俗学では、これまで伝統的な生業として捉えられることが多かった。しかし、ブッシュミート交易など農山村地域から都市圏への獣肉供給の需要増大に伴う商業狩猟に加えて、その延長上に国際的な市場流通を視野に入れた産業狩猟も見られるようになってきている。そこで、(1) 近年、とくに国内で獣害対策の観点から見直されている狩猟と野生獣肉（ジビエ）の活用をめぐる現場の取り組みを民族誌的な一次データをもとに検討するとともに、(2) 世界各地における野生獣肉の流通・消費の事例と比較することで、日本における野生獣肉消費をめぐる動向をグローバルな状況のなかに位置づける。とくに、消費者による野生獣肉の消費のありかたの変化が、解体や分配の方法、狩猟法（狩猟道具や動物の殺し方）、精肉方法とその背景にある衛生概念、流通にかかわる組織の編成、食物や環境に関する人々の意識を変容させている可能性に着目し、海外の関連事例との比較を試みることで、国内における取り組みの独自性と潜在的な問題点について考察を深める。

研究代表者 大石高典

班員（館内）野林厚志 戸田美佳子

（館外）小林 舞 近藤祉秋 高橋美野梨 濱田信吾 比嘉理麻 兵田大和 安井大輔

安田章人 山口未花子

## 研究会

2016年10月15日

大石高典（東京外国語大学）「共同研究の趣旨説明——目的・方法・ねらい」

全 員「自己紹介と共同研究への期待・提案など」

全 員「今後の計画についての討議」

2016年10月16日

安田章人（九州大学）「猟師としての実践研究からみた日本における狩猟と獣肉消費」

比嘉理麻（沖縄国際大学）「ブタとの関わりと断絶——沖縄における豚肉の大量消費と養豚場排斥運動」

総合討議：消費からみた狩猟研究の理論と方法

2017年1月28日

「総合地球環境学研究所持続可能な食の消費と生産を実現するライフワールドの構築（FEAST）プロジェクト」  
共催

大石高典（東京外国語大学）「趣旨説明と獣肉に関する研究の動向」

田村典江、小林舞（総合地球環境学研究所）「ローカルフードシステムの視点から考える狩猟肉利用」

高柳敦（京都大学）「野生動物の価値と野生動物利用——野生動物文化の形成へ」

William Kamgaing TOWA（京都大学）「Evaluation of Mammal abundance and Bushmeat Hunting patterns to Enhance Sustainability in Central Africa: A comparative analysis from two Communities in Southeast Cameroon」

討 論：野生動物管理と持続可能な獣肉利用

2017年1月29日

「総合地球環境学研究所持続可能な食の消費と生産を実現するライフワールドの構築（FEAST）プロジェクト」  
共催

大石高典（東京外国語大学）「1日目の論点整理と2日目への導入」

兵田大和（同志社大学）「京都近郊における獣害管理と都市住民による狩猟の可能性と問題点」

総合討論：現代日本における獣肉利用の新しい担い手との協働と課題

## 成果

初年度は、2回の研究会を実施した。初回は、まず共同研究全体の枠組みについて代表者が説明を行った後、メンバー全員の顔合わせと獣肉の流通・消費に関わる問題意識について洗い出す作業を行った。そのうえで安田氏から自身の狩猟経験や九州大学における「狩り部」の活動について、また比嘉氏から沖縄の豚肉の生産・流通・消費について報告をいただき、獣肉研究を進めていく上での手がかりを探った。第二回目の研究会では、メンバーの専門分野でカバーしきれていない野生動物保護管理の分野に焦点を当て、京都大学の高柳氏、カムゲン氏、地球研の田村氏の3人の特別講師を招いて獣肉の持続的な消費をめぐる学際研究の課題と可能性について検討を行った。兵田氏からは、獣害が深刻化する中での狩猟の新たな担い手としての都市住民による狩猟の可能性と課題について報告があった。今年度は、本共同研究を特徴づける二つの点である①応用人類学的／アクションリサーチ的視点と②超学際的アプローチに関連して研究会を進めることができた。今後に向けて、メンバー間で一定の共通認識が得られたと考える。

## 「テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究」

ICT (Information and Communication Technology) の活用が我々の生活のさまざまな側面に浸透し、直接対面的なコミュニケーションが減少している現代社会において、今改めて身体的相互行為の価値が問われている。本共同研究では、身体技法の伝承・表象・実践にテクノロジー（ここではコンピューター技術の活用を意識したICTを指す）やデジタル技術の導入が、人の記憶やイメージにどのような作用を及ぼし、それにより身体技法がいかに変化し再構築されているか、地域ごとの事例に基づいて比較検討を行う。

身体化することが求められる芸芸や知識等は、従来、口伝や観察に基づき自得されてきたが、近年ではデジタル技術の発展に伴い芸芸をデータ化する傾向が顕著である。それによりメディアやネットなどを通じてより拡大された社会関係のなかで身体技法の共有が可能になっている。しかし、身体技法の伝承の過程で導入されているデジタル技術の役割についてはこれまで十分な検討が為されてこなかった。事実、人間の動作、発声、表情、体温などを可視化・言語化・定量化できるが、間や旋律、リズムなどの身体知は、科学的に測りきれない。そこで身体技法の伝承におけるテクノロジー利用の役割に着目した本研究は、身体論や相互行為をめぐる議論、さらにはコミュニケーション論に関する理論的貢献を目指す。

研究代表者 平田晶子

班員（館内） 廣瀬浩二郎

（館外） 伊藤 悟 岩瀬裕子 宇津木安来 久保明教 CAITLIN COKER 紺屋あかり  
柴田香奈子 谷岡優子 柳沢英輔

## 研究会

2016年11月26日

平田晶子 共同研究の趣旨説明

参加者の自己紹介および共同研究内での役割や問題意識を発表

2016年11月27日

特別講師（1）八村広三郎（立命館大学）「無形文化財のデジタルアーカイブ」

質疑応答

特別講師（2）阪田真己子（同志社大学）「オモシロイを科学する——いかにして現象をハカルか」

質疑応答

全体討議

次回に向けて他

2017年2月12日

問題意識の共有

廣瀬浩二郎（国立民族学博物館）自己紹介の続き

特別講師（1）吉川侑輝（慶応義塾大学大学院）「テクノロジー利用を伴う身体技法の分析可能性——音楽の

CSCW/HCI 研究を補助線として」

特別講師 (2) 阪田真己子 (同志社大学) 「ハカれるものとハカれないもの——日本舞踊界の事例から」

質疑応答

総合討論、次回に向けて

## 成果

今年度は、共同研究メンバー間でデジタル技術や身体技法論における先行研究成果の検討や研究発表に対するディスカッションを通して問題設定などを共有し、今後の基盤を築くために2回の研究会を実施した。第1回の研究会では代表者である平田がデジタル技術を伴う身体技法に関する学際的研究の問題提起をし、二人の特別講師を招いて最先端のデジタルアーカイブ化の実態からデジタル技術が身体技法の記録、保存にどのように活用されているかを検討した。また定量化が難しいとされていた現象をハカルことの可能性や限界についても議論した (八村、阪田)。第2回の研究会では、①従来、触れない物を触れる物に変換する人間の創意工夫の積み重ねから生まれた「触覚」のみで鑑賞する世界とそこに経ちあがる代替可能性と一回性、②エスノメソドロジー研究と身体技法との関わりについて考察した (廣瀬、吉川、阪田)。

## 研究成果公開プログラムによる館のシンポジウム、研究フォーラム、国際研究集会への派遣

### ●館のシンポジウム

国際シンポジウム「中国における歴史の資源化——その現状と課題に関する人類学的分析」——

2016年10月22日 国立民族学博物館

代表者：塚田誠之

現在の中国では歴史がさかんに資源化されている。政治目的に活用されたり、実利の獲得、アイデンティティの構築など多様な目的と形態で進行している。たとえば、政府が「民族英雄」を創出し活用することで民族の統合に役立て、中華民族の一体性の構築に活用し、また史跡を愛国主義教育の基地にしている。さらに、政府や企業が歴史的建造物や史跡を観光開発などの実利に結びつけ、知識人や一般民が自らの正当性とアイデンティティの維持のため歴史を再構築する場合が見られる。書かれた記録や口頭伝承も資源化の対象となり得る。本シンポジウムは、中国において歴史が誰によってどのように資源化されているのかについて、民族英雄、史跡・景観・文物、記録・記憶・伝承といった問題領域に分けて、政府・知識人・企業・民衆など諸主体の関与のありよう、諸民族の文化との関わりに留意しながら、人類学的立場からその現状を明らかにし、残された課題について展望を得る。なお、本シンポジウムは国立民族学博物館共同研究「資源化される歴史——中国南部諸民族の分析」(代表者：長谷川清)、科学研究費補助金(基盤A)「中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究」(代表者：塚田誠之)と合同で開催する。

中国は、広大な国土に多様な民族集団が居住し、長い歴史を持ち膨大な史料と文化資源を有するが、その歴史の資源化はこれまで研究が少なかった。本シンポジウムは新しい研究領域の開拓を目指すものである。また、政府、知識人、企業、民衆など立場によって資源化に対する関わり方が異なることが予測されるが、そうした実態を解明することによって政府や知識人などの歴史に関するスタンス、ひいては中国人の歴史観のあり方について展望を得て中国文化を理解する鍵となることが期待される。また、シンポジウム終了後は参加者によるプロシーディングスを取りまとめて国立民族学博物館調査報告(SER)で公表をする予定であり、その点でも学問的な意義が大きい。

### 実施状況

現在の中国では歴史がさかんに資源化されている。中華民族の一体性の構築をはじめとする政治目的に活用されたり、観光資源開発による実利の獲得、アイデンティティの構築に利用されたりと、多様な目的と形態で進行している。本シンポジウムでは、中国において歴史がいかに資源化されているのかについて、民族英雄、史跡・景観・文物、記録・記憶・伝承といった問題領域に分けて、政府・知識人・民衆等の諸主体の役割、諸民族の文化との関わりに留意しながら掘り下げた検討を行った。

館長挨拶(寺田吉孝館長補佐が代読)、責任者の塚田誠之による主旨説明の後、3つのセッションで6名が報告をし、6名がコメントを行い、報告者との間で質疑応答を行った。第4セッションは総合討論である。全体の議論の要点は次の通りである。第一に、歴史の資源化をめぐる諸主体の関与のあり方が明らかにされたが、状況は多様・複雑で、民族・国家・宗教・地域性等の諸方面の違いに関連している。この点について韓敏・松本ますみ・高山陽



子・廖国一・権香淑の諸氏が報告を行った。第二に、歴史のもつ属性は多様であるが、記録され政治的な意味合いを持つ歴史と、民衆の間で伝承される歴史とがある。この点について稲村務氏が報告を行った。歴史は異なる時点において異なる価値観を持つ人々によって選択され構築され続けてきた。それゆえ時代や人の価値観に左右されるのである。こうした歴史の属性に関連する指摘は韓敏・松本報告においてもなされた。さらに中国の南北での相違や中国の枠組みを越える事例も指摘がなされた。漢族のほか回族・ハニ族・朝鮮族の事例が取り上げられた。

以上の論点を踏まえて、総合討論において、塚田が全体の報告と議論の整理をした後に、大野旭・横山廣子・廖国一・曾士才・蔡志祥の諸氏がそれぞれの視点から総合的なコメントを行った。

本シンポジウムによって、中国における歴史とその資源化の現状について、研究の最前線から最新の事例に基づいて議論を行い、解明を試みるとともに、今後に残された課題を確認した。

## 成果

成果の概要を国立民族学博物館ホームページおよび『民博通信』155号「研究成果の公開」欄に公表する。

国際シンポジウム「現代アジアにおけるお盆・中元節・七月の祭り——あの世とこの世をめぐる儀礼」

2017年3月4日～3月5日 国立民族学博物館

代表者：横山廣子

東アジア地域に広く見られる7月の死者儀礼は、日本では現在も全国的に行われており、最も身近な毎年の行事の一つである。アジア地域に広がる同様の儀礼を見渡すと、起源やその内容に関して軌を一にし、類似する側面もあるが、各地で独自の展開もある。

この時期は「中元」といった暦の上での位置づけと同時に、台風や洪水、猛暑などによる災害や病気が発生しやすい、人びとが乗り越えねばならない危機を伴う時節ともいえる。この時期に各地で行われてきた活動には、祖先祭祀や無縁の死者の供養といった宗教儀礼以外に、盆踊りやさまざまな芸能活動としての展開など、多様な内容が見られる。

本シンポジウムは、この7月の儀礼をアジア地域の広範な視野において比較検討し、それぞれを位置づけ、その歴史、当該社会とかかわる展開の状況、現在までそれが継続されている意味などについて、新たな理解を得ることを目的とする。多数の若手研究者による報告を特に重視し、その育成にも貢献する企画である。

これまで、本テーマで、東アジアの広い領域において研究された成果を集めて議論をおこなったシンポジウムは開催されたことがなく、今回の報告ならびにその議論の成果を整理し、日本語および中国語によって刊行する。それぞれの論文を日本語と中国語の両方で刊行することにより、東アジアを研究する多数の研究者に対して、多くの貴重な学術成果を公開することになる。

## 実施状況

本国際シンポジウム「現代アジアにおけるお盆・中元節・七月の祭り——あの世とこの世をめぐる儀礼」は、本館と香港中文大学歴史系との主催により、香港、台湾、中国本土の海外から11名、日本国内から11名を招聘し、本館の4名の研究者とあわせて総勢26名の研究者が報告、コメント、座長を担当して、一般公開の形で開催した。研究報告の対象地域は、朝鮮半島、日本、中国本土、香港、台湾、東南アジアに及び、本シンポジウムの目的は、この東アジア地域の各地で7月におこなわれてきた死者儀礼を核として展開してきた儀礼や祝祭活動を、さまざまな異なる観点から研究した結果を一堂に会することで、各地の活動を位置づけ、その歴史、当該社会とかかわる展開の状況、現在までそれが継続されている意味などについて、新たな理解を得ることであった。多数の若手研究者による報告を特に重視し、その育成や、今後の学術交流の拡大にも貢献することを目指した。

元来、この地域に広く普及した太陽太陰暦において、中元節や盂蘭盆会という名称で7月15日に刻印された祭祀活動が各地に伝播し、それぞれの地域の元来の宗教的・文化的土壌や生態学的環境などを背景に、長い歴史の中でさまざまな発展を見せていることが明らかになった。異なる様態を見せる要因としては、政治経済学的力関係や、当該地域における集団間の関係やアイデンティティ、農事暦、文化政策、儀礼行為や芸能のもつ意味合いの幅の広さなどが挙げられ、学術的に洞察を深めることができた。また、広範な領域に広がる各地の事例を理解することを通して、たとえば、現状では7月の死者儀礼あるいは祖先祭祀がないといえる韓国社会について、従来とは異なる視点からの理解の可能性が確認できた。日本における盆行事は一部では廃れてきているとはいえ、現在も全国的に見られ、最も身近な毎年の行事の一つである。公開で実施した本シンポジウムには、50名の申し込み参加者が集まり、学術的な内容の豊富さと密度の濃さに対して、研究者以外の方々からも関心と一定の評価を得ることができた。

## 成果

日本語と中国語の2種類の成果を刊行する予定である。シンポジウムの議論を経て、シンポジウム用に提出された各報告者の草稿に加筆修正をおこない、それぞれ元の言語に加えて、日本語あるいは中国語で翻訳を作成する。蔡志祥と横山廣子が最終的に翻訳文を監修し、刊行する。日本語版は国立民族学博物館論集の1冊としての刊行を、中国語版は香港の中華書店（予定）より出版することを考えている。

またシンポジウム実施報告として、今回の全ての報告の要旨を日本語と中国語で作成したもの、会議の状況写真や若干の会議情報をホームページに掲載する。また、*Minpaku Anthropology News Letter* に英語でシンポジウムの総括を掲載する。

## ●館のシンポジウム

### 第6回国際食アジア会議「食文化の交流——過去・現在・未来」

---

2016年12月3日～12月5日 国立民族学博物館

代表者：河合洋尚

2016年12月3日から5日にかけて、国立民族学博物館の学術交流協定先である立命館大学と、第6回国際食アジア会議「食文化の交流——過去・現在・未来」を開催する。本国際集会は、立命館大学草津キャンパスで主に開催されるが、国立民族学博物館も共催機関として運営に参与する。具体的には、国立民族学博物館は、3つの分科会を組織し、海外からの招へい、連絡、要旨や原稿の整理などの任務を引き受ける。3つの分科会は、①歴史、②身体性、③制度・表象をテーマとしており、それぞれ池谷、野林、河合が担当する。それぞれの分科会では1人ずつ欧米から主要な講演者を招へいするとともに、その他の渡航者とも連絡をとり、研究成果を整理する。それにより、それぞれのテーマにおける食文化研究の現状を再検討し、新たなアプローチを導き出すための議論をおこなう。分科会では、総合研究大学院大学の特別共同利用研究員や博士課程院生を含める若手研究者をメンバーとすることで、若手研究者の育成にも力を注ぐ。

本国際集会は、アジア食文化論壇として中国を中心に開催されてきたものであり、第6回目である今回は初の日本開催となる。今大会は、従来の方式を尊重しながらも日本や欧米の食文化研究者にも広く公募をし、東アジアにおける食文化研究の議論の場をつくる方針を掲げている。そのなかで国立民族学博物館は、分科会を3つ形成し、それぞれのテーマをめぐって国内外の研究者と学術交流をおこなうことで、特に人類学・民族分野における食文化研究の発展に寄与することが期待できる。他方で、各分科会は、会議終了後に成果をまとめ、個別に書籍や雑誌などの形式で文字として発表する予定である。特に国立民族学博物館刊行の紙媒体で分科会の成果を発表することで、国立民族学博物館における食文化研究を継承・発展することを目指している。

## 実施状況

2016年12月3日から5日にかけて、立命館大学との共催で国際シンポジウム「食文化の交流——過去・現在・未来」を開催した。3日から4日にかけてのシンポジウムでは、日本、中国、台湾、韓国、マレーシア、アメリカ、フランスなどの国から100名を超す研究者が集まり、研究発表をした。国立民族学博物館は、当経費により共催の準備をただけでなく、池谷、野林、河合がそれぞれ分科会を組織し、司会・趣旨説明・研究発表などをおこなった。また、5日は海外から招へいした研究者の大半を国立民族学博物館に招へいし、池谷、野林、河合がそれぞれグループを組んで展示の案内をし、さらに展示や今後の研究などについての意見交換をおこなった。なお、シンポジウム要旨集の編集作業も当経費により実施した。

## 成果

池谷、野林、河合が主催した3つの分科会に関する研究成果は、それぞれを論文集としてまとめ、*Senri Ethnological Studies* もしくは『国立民族学博物館調査報告』に投稿する予定である。

国際シンポジウムの開催状況や成果については、*Minpaku Anthropology Newsletter* にて英語で書き、国際発信する予定である。なお、河合の学会発表内容については、中国の学術雑誌『南寧職業技術学院学报』にて独占インタビューの形で整理され、まもなく写真付カラーで刊行される予定である。

## ●国際研究集会への派遣

## 第23回アフリカ考古学会での発表

2016年6月26日～7月2日 フランス・トゥールーズ大学

竹沢尚一郎

アフリカ考古学会は2年に一度開催される、同種の学会としては最も権威のある組織である。今回の第23回大会は、フランスのトゥールーズ大学で6月27日から7月1日にかけておこなわれる。その学会大会の分科会、「African Kingdoms」のチェアであるブリュッセル自由大学のピエール・デ・マレ教授から発表を依頼されたため、発表を実施し、他の分科会でもコメントをする予定である。学会は一週間と長い、連日発表がくまれており、申請者の成果を他の研究者に知らせ、他の研究者の最新の成果を理解するには一週間の滞在が必要である。

申請者は1999年より西アフリカマリ共和国で考古学発掘調査を実施しており、世界的に見てきわめてユニークな成果を上げている。この間の成果をまとめた仏文報告書を、マリの研究機関である人文科学研究所の機関誌『Etudes maliennes』の増刊号として出版する予定であり、初校校正まで終えている。ところが、出版社の資金難などにより印刷が停滞したので、科学研究費助成事業により2016年5月に出版の予定である。これまでに私たちが外国の研究誌『Cahiers d'études africaines』等で出版した論文等は高く評価されてきたので、本報告書もそれと同等以上の評価を受けることが予想される。その評価を学会大会で確認することと、トゥールーズ大学出版会を初めとする出版社と出版の可能性を探ることが目的である。

## 実施状況

フランス・トゥールーズ大学で開催された第31回アフリカ考古学研究会に出席し、分科会「African Kingdoms」で研究発表を行った。発表題目は「The first Kingdom of Gao and its relations with the Aian Civilizations」であった。また学会開催時に、Pierre De Maretブリュッセル大学前学長、Jean Poletパリ第一大学名誉教授、Susan McIntoshライス大学教授、Kevin MacDonaldユニヴァーシティ・カレッジ・オブ・ロンドン教授、Thomas Vernetパリ第1大学准教授に、本年6月に刊行された*Sur les traces des Grands Empires*を贈呈し、書評や引用をしてもらえるよう依頼した。Thomas Vernet氏は、パリ第1大学で出しているアフリカ史研究のウェブ雑誌 *afriques.revues.org* に書評を書いてくれることを承諾してくれた。また、第三世界関係のL'Harmattan出版社や考古学専門のArcheopress出版社に印刷物を渡し、出版を検討してもらっている（4～8週間以内に返答するとのこと）。

## 成果

本年6月に出版した科研報告書*Sur les traces des Grands Empires*を国外の著名なアフリカ考古学者に贈呈し、書評や引用を依頼した。パリ第一大学アフリカ学科が公開しているウェブ雑誌 <http://afriques.revues.org> に書評を掲載してくれることが決まった。

## International Institute for Conservation of Historic and Artistic Works (IIC: 国際文化財保存学会) 2016 Los Angelesでの発表

2016年9月10日～9月17日 アメリカ・ロサンゼルス

末森 薫

国際文化財保存学会 (IIC) は、二年に一回開催される文化財の保存に関する国際的な学会である。2016年大会は、9月12～16日の日程でアメリカ・ロサンゼルスにて「現代美術の保存修復」をテーマに開催される。みんなが収蔵する民族資料は、現代美術の作品と同じく、多様な材質から構成され、大きさも様々であることから、その有害生物対策は大きな課題となっている。みんなくでは、これまで有害生物に対する様々な研究・活動に取り組むとともに、恒常的な対策を実施していく上での体制を整えてきた。本大会では、園田・日高・末森の連名で、みんながこれまで行ってきた化学薬剤を用いない殺虫処理法の開発に関する研究成果について、実践例を示しながら発表する。発表は既に査読審査を経ており、題目はIICのホームページにも掲載されている。今回の学会では、若手の育成に鑑み末森が日高准教授と共同で発表を行うことを予定している（日高准教授の旅費については別経費から支出する予定である（調整中））。なお、学会前日の9月11日に、発表会場の下見、発表準備・打ち合わせを実施する予定である。

今回の発表題目は、国内外の多くの博物館が抱える課題であり、みんなが行ってきた研究成果を発信することの意義は大きい。またIICは、国際博物館会議国際保存委員会 (ICOM-CC) と並ぶ、文化財の保存修復に関する二



大国際学会であり、各国の研究者が一同に会する数少ない機会でもある。共通の課題に取り組む各国の研究者との交流を通して、課題への対策に向けて、新たな展開が生まれることが期待される。また、みんぱくが行う研究成果を国際的な場で発信することにより、みんぱくの国際的な認知度を高めることにも繋がると考えられる。本大会での発表内容は、IICが発行する国際学会誌 *Studies in Conservation* に査読付英語論文として、掲載される予定である。

#### 実施状況

2年に一回開催される国際文化財保存学会（IIC）2016年大会が、9月12～16日の日程でアメリカ・ロサンゼルスにて「近現代アートの保存修復（“Saving the Now –Crossing Boundaries to Conserve Contemporary Works”）」をテーマに開催され、本プログラムの助成を受けて参加した。みんぱくが収蔵する民族資料は、近現代アートと同じく、多様な材質から構成され、大きさも様々であることから、その有害生物対策は大きな課題となっている。本大会では、園田・日高・末森の連名で、みんぱくがこれまで行ってきた化学薬剤を用いない殺虫処理法の開発に関する研究成果（大型船資料の二酸化炭素処理の事例、および展示場における展示品の低酸素処理の事例）について、ポスター発表をおこなった（題名：“Common challenges for ethnographic and modern art collections: Pest control in complex and large objects containing new materials”）。大会当日のポスター解説は、若手の育成を鑑み、本プログラムの助成を受けた末森が、日高真吾准教授（科学研究費補助金での参加）と共同で担当した。

大会の各セッションでは、世界各国における近現代アートの保存修復事例、保存修復に関する取り組みが報告された。本大会が「近現代アート」に焦点をあてたものであり、保存科学者の参加が限定的であったこともあったためであろうか、有害生物対策に関する発表は少なかったが、事例発表を通して近現代アートにおいても生物被害は大きな課題であることを改めて認識することができた。また、当方のポスター発表を通じて、近現代アートを専門とする世界各国の保存修復家や研究者に、みんぱくが実施する有害生物対策の考え方・方法を発信する良い機会になったと考える。さらに、現代アートの保存においては、存命の作者の意向などを考慮した上で、保存修復者がどこまで保存修復に介入するべきかという大きな課題があることを知る機会となった。同様の課題は、先住民との関連が課題となる民族資料の保存・管理・活用とも通じるテーマであり、みんぱくにおける今後の資料保存・管理を考えていく上で有用な情報を得ることができたと考える。

#### 成果

本プログラムで参加した学会の内容・様子について、IIC-Japanが発刊する「ニュースレター」、文化財保存修復学会が発刊する「通信」にそれぞれ寄稿を予定している。

研究発表を文章化したものが、“Studies in Conservation, Supplement 2 2016 - Saving the Now; Crossing Boundaries to Conserve Contemporary Works (IIC 2016 Los Angeles Congress Preprints)”（2016年9月発行）に掲載された（査読付き）。オンラインでも部分閲覧およびダウンロード可能である。

<http://www.tandfonline.com/doi/abs/10.1080/00393630.2016.1188255?journalCode=ysic20>

## 館長リーダーシップ経費による事業・調査

みんぱく研究公演「黒森神楽×雄勝法印神楽 in みんぱく公演」

国立民族学博物館では、東日本大震災以降、被災地の有形・無形の民俗文化財への支援を継続しており、これまで4年間にわたって無形民俗文化財である芸能団体を招聘し、研究公演を実施してきた。現在、被災地では復興に向け日常の生活に戻る動きもあり、芸能団体もその活動が落ち着きつつあるが、その一方で、日常が意識されるほど、震災に対する記憶の風化が懸念されるとともに、震災以前の地域文化の記憶をどのように伝えるのかという課題が浮かび上がってきた。

そこで、2016年度の震災支援プロジェクトの企画として、岩手県、宮城県を代表する神楽で、国の無形民俗文化財に指定されている黒森神楽、雄勝法印神楽を招聘した。また、本公演において、震災以前、震災後、そして現在と両神楽の調査をおこなってきた研究者と2つの神楽の神楽師によるパネルディスカッションを実施し、地域における神楽の存在のみならず、地域文化の重要性を議論した。

東日本大震災から5年という節目の年におこなった本公演は、改めて被災地の地域文化遺産としての芸能を見つめなおし、これからの復興のあり方を考える機会となった。招聘した2つの神楽は震災以前から地域のアイデンティティとして認識され、震災後は復興の象徴的な役割を担い、地域の再生に大きく寄与してきたが、その一方で、震災からの復興事業のなかで、地域そのものが大きく変貌し、これらの神楽もその在りように適していくべく、幾



つかの変化が生じるとともに、変化しない本質的な部分が視覚化されている。本公演では、こうした地域の文化遺産の変貌について、その動態を明らかにしつつ、地域文化の継承の重要性について、主にパネルディスカッションで明らかにすることができた。このことによって、より実践的な人間文化研究のあり方について、広く社会に提示することができたと考える。

#### 東日本大震災等大規模災害に関わる人間文化研究

本研究は、連携研究「文化遺産の復興に向けたミュージアムの活用のための基礎的研究——大学共同利用機関の視点から」を引き継ぐものである。2016年度は「被災地における無形の文化遺産の保護活動」の継続実施と「災害の記録・記憶の継承」を目的として開発中の「記憶をつなぐDB」の一般公開を図った。

「被災地における無形の文化遺産の保護活動」では、これまで継続調査をおこなってきた岩手県三陸沿岸部の芸能の実態調査を引き続きおこない、これまでの成果として、大船渡市で一般公開の研究集会「文化遺産の継承と発展 郷土芸能復興支援メッセ」を開催し、これまでの活動で得た知見を研究対象としていた地域に還元した。また、「記憶をつなぐDB」については、最終データの修正をおこない、国立民族学博物館のサーバーへの移行を完了し、2017年度にWEB上での一般公開を実施することができるようになった。さらに、本件は現在進めているフォーラム型情報ミュージアム「日本の文化展示場関連資料の情報公開プロジェクト」とも関連させ、東日本大震災コーナーでも展示が可能となるようにシステム改修を行った。

#### みんなく映画会「みんなくワールドシネマ」

「みんなくワールドシネマ」は、映像に描かれる〈包摂と自律〉というテーマのもと2009年秋から2015年度末までに継続して33回実施されており、国立民族学博物館の一般向け催しとして人気、知名度ともに高い。この事業の意義は、広報活動に大いに貢献しつつ、劇映画という親しみやすいメディアを活用しながら、来館者に世界の諸民族の文化を学ぶ機会を提供できる点にある。

機関研究「包摂と自律の人間学」終了に伴い、2016年度はテーマを〈出会いと創造〉に刷新し、諸民族の出会いとそこから生じる文化的な創造性が描かれた劇映画を上映した。

第34回～36回を次のように実施し、3本の映画を通じて、異質な他者との遭遇から何が生まれるかという問いかけを試みた。第34回では、イスラム原理主義者と一般のイスラム教徒との関係、第35回ではゲイ＝レズビアンなどの性的少数者と炭鉱労働運動の出会い、第36回は障がい者と健常者のコミュニケーションの問題に焦点をあてた。映画上映後、専門家の解説と質疑応答を行った。

##### 第34回：2016年9月22日（木・祝）

上映作品＝「禁じられた歌声」（フランス＝モリタニア合作）

解説＝竹沢尚一郎（国立民族学博物館 民族文化研究部・教授）

参加人数＝378人

##### 第35回：2016年12月4日（日）

上映作品＝「パレードへようこそ」（イギリス）

解説＝吉田俊実（東京工科大学 教養学環・教授）

参加人数＝203人

##### 第36回：2017年2月11日（土・祝）

上映作品＝「幸せのありか」（ポーランド）

解説＝信田敏宏（国立民族学博物館 文化資源研究センター・教授）

参加人数＝296人

#### 新中央・北アジア展示フォーラムの開催

2016年6月16日にオープンした新中央・北アジア展示を広報するため、2016年6月から8月までの約3か月間、「中央・北アジアを駆けめぐる——夏のみんぱくフォーラム2016」と題して、展示の内容に関連したさまざまなイベントを企画・運営し、その一環として、①コンサート「音楽でつなぐ中央・北アジア」と、②映画会シリーズ「映画で知る中央・北アジア」を行った。

①に関しては、シベリアの「サハの口琴」のコンサートを7月17日に、中央アジアのカザフの弦楽器による「カザフ草原の調べ」のコンサートを7月31日に実施し、研究者による司会のもと、現地出身者と日本人の演奏家による演奏と解説を行った。②に関しては、6月12日にイベントとして「デルスー・ウザーラ」（シベリア）、6月25日に「モンゴル」、7月9日に「山嶺の女王クルマンジャン」（ケルグズスタン）、7月18日に「クルミの木」（カ

ザフスタン)の4本の映画を上映し、研究者による解説を行った(うち1作品は日本初公開)。映画会上映前には、新しくなった展示場で研究者によるミニレクチャーも実施した。また、③ゼミナールに関しても、午前中に展示場で研究者による展示場案内を行った。

これらのイベントを通して、中央・北アジアの社会と文化に関する理解を深める機会を提供することができた。①②の参加者の合計は1,901名であり、新展示の広報にも貢献した。

#### 新アイヌの文化展示フォーラムの開催

2016年にオープンする新アイヌの文化展示を広報するため、2016年12月から2017年2月まで、展示の内容に関連したさまざまなイベントを企画・運営し、その一環として、①アイヌ民話人形劇「ふんだりけったりクマ神さま」と②「トンコリ×ウポポ——アイヌ音楽ライブ by OKI / MAREWREW」、③「アイヌ・アートにふれる日～木彫の可能性～」として新展示で取り上げた木彫家による実演と解説、および館外研究者を招聘したゼミナールを実施した。

①はアイヌの人形劇を阿寒からアイヌの方々を招聘して行い、子どもから大人までアイヌの世界観と造形などを楽しみながら理解していただけた(594名参加)。②はムックリ(口琴)やトンコリといったアイヌの楽器によるコンサートで、申込者多数のため2回公演とし、演奏と合間の解説および客席との一体感が好評であった(739名参加)。

①～③は、新展示のコンセプトでフォーラムの趣旨とした「伝統を継承しつつ、新たな文化を創造する人びとの姿をイベントを通して紹介する」を実現でき、アイヌ語をテーマにしたゼミナールも326名参加と盛況だった。いずれのイベント時も展示場での解説をおこない、多数の参加者を得て、アイヌ文化への理解を深める機会を提供でき、広報にも貢献した。

#### 研究公演「時を超える南インドの踊り」に基づいたマルチメディア番組の製作

2015年11月22日に開催した研究公演「時を超える南インドの踊り」の映像記録素材を編集し、日本語、英語対応のマルチメディア番組を制作した。これは、研究公演でおこなわれた質の高い演奏を番組化し、館内外で広く利用できるようにすることを目的とする。

本公演で上演されたバラタナーティヤムは、南インドのヒンドゥー寺院で行われた奉納舞踊を起源とし、1930年代に舞台芸術として再生した舞踊ジャンルである。現在、インドを代表する古典舞踊ジャンルの一つとして、インド国内はもとより、世界各地の南アジア系移民コミュニティでも盛んに実践されている。しかし、舞台芸術化の過程で、寺院舞踊伝統の大部分が失われ、一舞踊学校で作り上げられたスタイルが舞踊界の主流となった。本番組は、寺院舞踊に基づく伝統を継承してきた舞踊家の一人、ナルタキ・ナタラージ氏の舞踊公演を番組化することで、寺院舞踊の伝統を記録し、今後の比較研究の資料とすることができた。

収録映像には、前奏曲、舞踊演目他に、館長挨拶、報告者による口頭の解説が含まれ、文字情報として、演目および出演者の紹介と用語一覧を付した。また、全演目のうち歌詞のある6曲に字幕をつけ、踊りの所作と歌詞の関連がわかるようにした。なお、歌詞の言語の内訳は、タミル語4曲、サンスクリット語2曲で、翻訳にあたってはナルタキ・ナタラージ氏の全面的協力を得た。

#### 研究公演「息づく仮面——バリ島の仮面舞踊劇トベンと音楽」に基づいたマルチメディア番組の製作

2015年12月6日に国立民族学博物館講堂で開催した研究公演「息づく仮面——バリ島の仮面舞踊劇トベンと音楽」の映像記録を、前日に開催したワークショップの映像および吉田ゆか子氏提供の現地映像とあわせて編集し、マルチメディア番組を制作した。これは、研究公演およびワークショップの映像記録を中心とし、若干の現地での上演の映像を加えた番組により、展示を補完し、東南アジア文化への理解を深める基礎資料となすことを目的とする。なお、東南アジア展示の「芸能と娯楽」セクションでは、バリ島の仮面舞踊劇に使用する仮面を展示している。

また、研究公演では、バリの舞踊家2名が、日本で活躍するガムラングループ及び踊り手と共演した。本番組は、東南アジア芸能の日本や世界への広がりについても紹介し、芸能がグローバルな文脈において活性化されたり、新たな意味を付与されたりしていることも示す資料ともなる。

#### みんぱく研究公演「城山虎舞 in みんぱく公演」

国立民族学博物館では、東日本大震災以降、被災地の有形・無形の民俗文化財への支援を継続しており、これまで4年間にわたって無形の民俗文化財である郷土芸能を継承する団体を招聘し、研究公演を実施してきた。現在、被災地では復興に向け日常生活に戻る動きもあり、芸能団体の活動も落ち着きつつあるが、その一方で、日常が

意識されるほど、震災に対する記憶の風化が懸念され、震災以前の地域文化の記憶をどのように伝えるのかという課題が浮かび上がってきた。

そこで、2016年度の震災支援プロジェクトの企画として、岩手県の三陸沿岸部で広く分布する芸能である虎舞のなかでも、同時期に開催している企画展「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」で協力いただいた城山虎舞を招聘した。

本公演では、城山虎舞の演舞の他、岩手の芸能支援に尽力した研究者と協力者及び保存会代表とともに、芸能の支援と協同、そして継承のあり方をテーマとした「郷土芸能の保存科学——支援から協働へ」のパネルディスカッションをおこなった。ここでは、釜石の虎舞の影響を受けた城山虎舞の発足の経緯を起点に、郷土芸能の広がり、伝播、保存することの意義とその在りようについて討論し、次の世代に継承するということの意味と、更なる拡がりの可能性を模索する大阪への虎舞移植プロジェクトといった多岐にわたる内容の討論となった。これらによって地域文化の重要性について考える場を創出することができ、また、企画展と有機的に結ぶ公演ともなった。

(その他館の運営などに関するもの6件)

## 民博研究懇談会

第272回 2016年6月29日

ジェーン・ツァイ 「止まるべきか止まらざるべきか——音声言語と手話言語の韻律的特徴の比較」

第273回 2016年8月3日

内田吉哉 「写真資料のデジタル化とその地域研究における活用——昭和中期の大阪を撮影した写真資料による事例」

第274回 2016年9月14日

ゲヴォルグ オルベイアン 「博物館の活性化」

第275回 2016年10月26日

コープマン・ジェイコブ 「インドにおける献血運動に関する社会生活——信仰心、禁欲主義とグル」

第276回 2017年1月25日

Elisabeth Engberg-Pedersen 「手話言語における（不）確実性表現」

第277回 2017年2月22日

ジェイムズ・M・サバール 「カナダ極北地域におけるパレオエスキモーの人口史（4800年前～800年前）およびその中後期完新世の気候変動との関係」

## 2-2 人間文化研究機構 基幹研究プロジェクト

### 人間文化研究機構 基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構総合人間文化研究推進センターは、2016年度より6カ年にわたり、国内外の大学等研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を推進し、人間文化の新たな価値体系の創出を目指している。基幹研究プロジェクトは、(Ⅰ)機関拠点型、(Ⅱ)広領域連携型、(Ⅲ)ネットワーク型（地域研究および、日本関連在外資料調査研究・活用）の、3類型から構成され、その研究成果については、出版、データベース、映像および展示の制作等を通じて、学界や社会に広く発信するとともに、大学における新たな教育プログラムとして活用をはかる計画である。

本館が担当しているプロジェクトは以下のとおりである。

#### ●広領域連携型

日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築

みんばくユニット「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」

代表者：日高真吾

## 概要

日本列島は、南北に長く、海岸部から平野部、そして中山間部に居住地が広がり、それぞれの環境に適応させた多様な地域文化を育んできた。一方で、これらの地域文化は、グローバル化する社会変容のなかで、地域特有の文化が見えにくくなり、表面的には日本社会全体で画一化されたような印象を私たちに感じさせている。また、多発する大規模災害からの復興で、コミュニティの再編を余儀なくされた地域は、それまで受け継がれてきた地域文化を再構築せざるを得ない状況になることもしばしば見られる現状がある。

そこで、本研究では、地域文化に着目し、さまざまな地域でどのような文化が継承され、新たな文化が構築されているのかの実情を明らかにする。また、これらの動向に人間文化研究がいかに関与し、現在（いま）への社会貢献、未来への社会貢献を視野に入れた研究成果を目指す。

具体的には、「地域文化の再発見」、「地域文化の保存」、「地域文化の活用」という三つの視点から研究を展開する。その上で、平常時において埋没している地域文化を再発見し、その文化をそこに住まう地域住民と外部社会の双方にとって地域文化を有意義な形で表象するためのシステムを構築する。

## 調査研究活動

- 2016年5月26日～5月28日 別府大学において地域文化を対象とした別府大学の教育プログラムに関する意見交換をおこなった。（日高真吾、飯沼賢治、段上達夫、渡辺智恵美）
- 2016年6月3日～6月4日 新潟県村上市旧荃太小学校収蔵庫の資料保管状況の調査および教育キットを用いた資料活用に関する打ち合わせをおこない、十日町市立博物館所蔵蕪糸織りの保存状態の観察と活用に関する打ち合わせ、中越地震で被災した蕪木家文書の赤外線撮影を中心とした詳細調査をおこなった。（日高真吾、末森薫、小谷竜介、加藤謙一）
- 2016年6月6日 平取町二風谷に伝わるチセの建築技術を活用した民博所蔵のチセの葺き替えに関する意見交換を萱野茂二風谷アイヌ資料館でおこなった。（日高真吾）
- 2016年6月9日～6月12日 11月に台湾で開催予定の国際フォーラムに関する打ち合わせを台北市内でおこなった（日高真吾、黄貞燕）
- 2016年6月18日～6月19日 第1回全体会議を国立民族学博物館でおこなった。（日高真吾、平井京之介、寺村裕史、政岡伸洋、小谷竜介、川村清志、伊達仁美、加藤謙一、武知邦博）
- 2016年7月4日 「神戸大学との協定事業に伴う本研究会との連携に関する打ち合わせを大阪市梅田でおこなった。（日高真吾、奥村弘）
- 2016年7月9日 徳島県内の津波碑に関する所在調査をおこなった。（日高真吾）
- 2016年7月13日 地域文化の概念についての意見交換会を東北学院大学でおこなった。（日高真吾、政岡洋、小谷竜介、川村清志）
- 2016年7月26日 金沢美術工芸大学所蔵の百工比照の調査及び展示活用の可能性についての打ち合わせを金沢美術工芸大学でおこなった。（日高真吾、加藤謙一）
- 2016年7月27日 穴水町教育委員会による地域文化を活用したワークショップの調査を能登中居鋳物館でおこなった。（日高真吾）
- 2016年7月30日～7月31日 中越地震で被災した蕪木家文書の赤外線撮影を中心とした詳細調査を十日町情報館でおこなった。（末森薫）
- 2016年8月18日 広島大学総合博物館の展示に関する調査及び2014年豪雨で被災した安佐地区の現状調査を広島大学、広島市内でおこなった。（日高真吾）
- 2016年9月23日 村上市旧荃太小学校収蔵庫の虫害被害の実態調査をおこなった。（日高真吾）
- 2016年9月28日 「企画展『津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録』に関する打ち合わせを大槌町役場でおこなった。（日高真吾）
- 2016年10月12日 「郷土芸能復興支援メッセ 文化遺産の継承と発展」に関する打ち合わせを陸前高田市博物館でおこなった。
- 2016年10月13日～10月15日 「企画展『津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録』展示資料の借用と打ち合わせを大槌町役場でおこなった。（日高真吾）
- 2016年10月16日 「せんだい3.11メモリアル交流館」における展示内容の調査をおこなった。（日高真吾）
- 2016年12月6日 国立民族学博物館において、現在作成中の津波の記憶DB、日本の文化展示場DB、国立民族学博物館国内調査委員会調査結果DBの内容について意見交換をおこなった。（日高、寺村、川村、政岡）
- 2016年12月8日～12月9日 「企画展『津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録』展示資料の借用をおこなっ



た。(日高真吾)

- 2016年12月10日 東北歴史博物館で2017年1月14日から開催予定の特別展「工芸継承」のキュレーションの状況と、2018年度の巡回展の可能性について意見交換をおこなった。(日高、小谷)
- 2017年2月2日～2月4日 東北歴史博物館において国際研究ワークショップ「地域文化の発見を考える」を開催する。ここでは、台湾国立台北芸術大学の黄准教授を招へいし、国立民族学博物館で開催の企画展「津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録」、東北歴史博物館で開催する特別展「工芸継承」、川村清監督作品「明日に向かって曳け！」をテーマに地域文化の再発見における民俗学の新たな試みと可能性について議論する。
- 2016年3月 別府大学において、別府大学における世界農業遺産支援の取り組みをテーマとした研究会を実施予定。

## 研究成果

### (1) シンポジウム・予稿集

- 2016年11月12日 人間文化研究機構、国立民族学博物館、国立歴史民俗博物館の協定事業の一つとして開催した「地域歴史文化大学フォーラム」にコメンテーターとして参加した。(日高真吾)
- 2016年11月13日 大船渡市立三陸公民館大ホールにおいて、国立民族学博物館主催による「郷土芸能復興支援メッセ「文化遺産の継承と発展」を開催した。(日高真吾)
- 2016年11月25日～11月26日 国際フォーラム「地域文化の発見、保存と活用」を国立民族学博物館(日本)、国立台北芸術大学(台湾)で主催し、台湾桃園市大溪で開催した。なお、本国際フォーラムは、国立民族学博物館と国立台北芸術大学の協定事業の一環としても位置付けられるものである。(日高真吾、政岡伸洋、小谷竜介、末森薫、伊達仁美、平井京之助)

### (2) 教育プログラム等

小学校の授業で利用できる教育キット「地域文化宝箱シリーズ」の作成に向け、気仙沼市旧月立中学校資料、村上市旧荃田小学校収蔵庫資料、枚方市立田中家鋳物民俗資料館資料、京都市左京区久多収蔵庫資料を対象に開発を進めている。また、地域文化宝箱バックシリーズの作成に当たっては、全体デザイン、設計を上マリコオフィス、資料保存の対策について文化創造巧芸より助言を受けている。開発のための準備研究会は以下の通り。

- 2016年7月12日 「気仙沼資料を活用した教育キット『地域文化宝箱バック——気仙沼』に関する研究会」
- 2016年7月22日 「京都市左京区久多資料を活用した教育キット『地域文化宝箱バック——久多』に関する研究会」
- 2016年7月29日 「村上資料を活用した教育キット『地域文化宝箱バック——村上』に関する研究会」
- 2016年9月27日 「枚方資料を活用した教育キット『地域文化宝箱バック——枚方』に関する研究会」

### (3) 展示等

- 2017年1月19日～2017年4月11日 企画展『津波を越えて生きる——大槌町の奮闘の記録』を本館企画展示場で開催。

## 研究プロセスの国内外に向けた情報発信

- 2016年7月11日 追手門大学との協定事業における研究会において、「地域文化の見せ方、捉え方——国立民族学博物館の展示をめぐる」を追手門学院大学で発表した。(日高真吾)
- 2016年8月6日 国立民族学博物館で開催された『「記憶の劇場」大学博物館を活用する文化芸術ファシリテーター育成講座』において、「被災文化財の支援から考える 地域文化の保存と活用」を発表した。
- 2016年12月21日 大阪市梅田のグランフロントのナレッジキャピタルにおいて、「展示キュレーションの誘惑——新しい日本の文化展示ができるまで」の発表をおこなう。
- 2017年3月19日 国立民族学博物館研究公演「城山虎舞 in みんなく」を開催する。(日高)

## 若手研究者の人材育成の取組み

- 30代の若手研究者(末森薫・国立民族学博物館)は、台湾でおこなった国際フォーラム「地域文化の発見、保存、活用」において、コメンテーターとして登壇した。また、現在、中越地震で被災した古文書の保存科学調査を実施し、2017年度の文化財保存修復学会、2018年度開催予定の国際シンポジウム「地域文化の保存」(仮称)で発表する予定である。
- 30代の若手研究者(寺村裕文・国立民族学博物館)は、DB関連の開発を担い、現在、津波の記憶DBの今年度の公開、2017年度公開予定の日本の文化展示場DB、2018年度公開予定の国立民族学博物館国内調査委員会調査結果DBの公開の準備を進めている。また、DBの技術的なサポートをセカンドブレンよりいただいている。これらの成果は、2019年度開催予定の国際シンポジウム「地域文化の活用」(仮称)で発表する予定である。

- 30代若手研究者（天野真志・東北大学）は、来年度から本格的に大学の授業で利用できる被災古文書および被災民具のレスキューパックの開発を進める準備をおこなっている。これらの研究の成果は、2018年度の文化財保存修復学会及び2019年度開催予定の国際シンポジウム「地域文化の保存」（仮称）で発表する予定である。また、地域文化宝箱パックシリーズの作成に当たっては、全体デザイン、設計を上マリコオフィス、資料保存の対策について文化創造巧芸より助言を受けている。

## ●広領域連携型

### アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開

#### みんぱくユニット「文明社会における食の布置」

---

代表者：野林厚志

#### 概要

本研究の目的は、食の概念とその体系的な実践とを、文明社会を支える文化装置としてとらえ、食の社会的機能や歴史動態を解明し、食をめぐる社会的共存や衝突の原理を探究することである。

食は個体の生命を維持するための基本的な営みであると同時に、文化や経済と深く関わる行為としてとらえられてきた。一方で食糧資源の大量生産、大量廃棄、地球規模の人口増加と数億人にもおよぶ飢餓人口は、生態学的適応に乖離した現代社会の食の実態を物語っている。

こうした現代社会の食に関わる諸問題を超域的な視点で連結させるとともに、異なる視点をもつ研究分野の協働として、人類史の視点からの文明の盛衰と食との関係、生態学的アプローチからの食の機能等を議論に組み込み、文明社会の中における食の健全なありかたを探究していくことも本研究の狙いである。

なお、本研究プロジェクトは総合地球環境学研究所が中心となり推進する「アジアにおける『エコヘルス』の新展開」の一つのユニット研究として実施する。「エコヘルス」は、医療や疾病研究の視点で捉えられてきた「健康」を、社会変容と環境変化が急速に進む近現代における、暮らしや生態環境、生業、食生活等との関わりから探究しようとする新たな研究の視座である。

#### 調査研究活動

- (1) 研究会合の実施：ユニット内の研究会合を4回実施。

年度はじめの研究会合において、研究代表者より、環境、身体、制度・文化の3つの大きな枠組で研究を進めていくことを提案し、環境を中井信介佐賀大学准教授、身体を梅崎昌弘東京大学准教授、制度・文化を野林ユニット代表に中心に進めていく方針を決定した。

第2回目の研究会合は、サントリーグローバルイノベーションセンターで実施し、産学協働の研究についての意見交換を実施した。

第3回目の研究会合では、身体グループで実施したフィールド調査の報告を行い、結果についての討議と今後の方向性についての意見交換を実施した。

第4回目の研究会合は本年度の研究成果の報告と次年度における研究内容についての議論を実施。

また、環境グループでも独自の研究会合を実施し、ユニット代表とともに時間軸の異なる生態環境の利用についての研究を進めていくことを相互確認した。

- (2) フィールド調査の実施：環境グループでは、日本、タイにおける環境利用の変動に関する調査を実施した。身体グループでは若手研究者を中心にした食事調査の基礎的フィールド調査をインドネシア、タイで実施した。制度・文化グループでは、フードスケープ、社会運動、味覚とメディア等に関する課題についての調査を、オーストラリア、イタリア、シンガポール、台湾で実施。
- (3) 第6回国際アジア食論壇において、「食の交流史」「政治環境と食」「味覚と健康」を具体的テーマとした分科会を組織した。
- (4) 研究成果を一般社会に還元するための公開講演会を実施。

#### 研究成果

- (1) シンポジウム・予稿集  
2016年12月 The 6th Asian Food Study Conference
- (2) 教育プログラム等  
各研究会合において意見交換を実施

## 研究プロセスの国内外に向けた情報発信

総合地球環境研究所のHPに研究の内容等のコンテンツを提供

## 若手研究者の人材育成の取組み

身体班では、梅崎グループリーダーの指導のもとで、若手助教ならびに大学院生（修士課程）のフィールド調査を実施し基礎データの収集を实践させた。

## ●ネットワーク型：北東アジア地域研究

北東アジアにおける地域構造の変容——越境から考察する共生への道

中心拠点「自然環境と文化・文明の構造」

代表者：池谷和信

## 概要

国立民族学博物館北東アジア地域研究拠点は、民博館内の文化人類学・民族学およびその隣接分野の研究者、および連携機関である国立歴史民俗博物館の考古学の研究者を中心に構成され、北東アジアを対象に、人とモノの移動と交流、政治及び経済のシステムの導入と影響に着目して、先史時代から現代に至るまでの長期的な時間幅の中で、自然環境と文化、文明の構造と変容の解明を目指している。

ここでの北東アジア地域とは、国・地域で言えばロシアのシベリア及び極東地域、モンゴル、韓国、北朝鮮、中国、日本に広がる空間を対象としている。従来は国家の枠組みにおいて研究が行われてきたが、これらの国・地域を横断的に捉える新たな試みである。

なお本拠点は、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東北大学東北アジア研究センター、富山大学極東地域研究センター、島根県立大学北東アジア地域研究センター、早稲田大学総合研究機構現代中国研究所の各拠点とともに、中心拠点として本プロジェクトを推進している。

## 調査研究活動

- (1) 北東アジア地域研究会・民博拠点（以下、「月例会」）を5月以降原則として毎月（2016年5月26日、6月27日、7月24日、9月29日、10月25日、12月1日、12月22日、および1、2、3月予定）開催し、拠点構成員が発表、議論を行い、共通課題を見いだしつつある。これは北東アジア地域研究への学術的貢献への足がかりを形成するものとなる。
- (2) 拠点構成員各人が調査（モンゴル、カザフスタン、中国、日本）、研究発表（ロシア、英国）、資料整理を行っている、またはその予定である。これらは今後の研究の質的、量的両面の礎になるものである。
- (3) 2016年8月28日～9月2日 京都で開催された第8回世界考古会議京都大会（WAC-8）において、本拠点リーダーの池谷が連携拠点の構成員である藤尾とともにパネルを組織した。これは世界レベルで研究成果を示すものである。
- (4) 連携機関である国立歴史民俗博物館においては、6月、12月に調査を行い、資料所蔵機関である東亜細亜文化財研究院と成果報告に向けた検討を行っている。これは学術的な貢献とともに、韓国との研究体制の国際的協業による成果としても重要なものとなる。

## 研究成果

- (1) 報告書・成果論集、シンポジウム、データベース等

「シンポジウム」

- ① 連携機関である国立歴史民俗博物館と合同で2017年2月25日にシンポジウムを行う予定である。これは研究成果の質量の向上とともに、研究推進のための体制を整えることに貢献するものである。

「その他」

- ① 2016年12月23日に第1回国際公開セミナーを開催する。ロシア極北チュクチを対象とした映画「ツンドラブック」を上映し、映画監督アレクセイ・ヴァフルシェフ氏を招聘し、拠点リーダーの池谷の他、呉人徳司（東京外国語大学アジア・アフリカ文化言語文化研究所准教授）、山田孝子（京都大学名誉教授）によるコメント、討論を行う。このセミナーは日本でほとんど知られていないチュクチに関して高い水準での議論を行い、また研究成果の普及に貢献する。
- ② 2017年2月に第2回国際公開セミナーを開催する予定である。モンゴル人研究者を招聘してモンゴル国の農

村の持続可能性について、北東アジア内の共通性と特殊性に焦点を当てるもので、北東アジア地域の理解に寄与するものである。

#### (2) 教育プログラム等

先述の月例会において、総合研究大学院大学の大学院生、民博外来研究員も出席し、議論に積極的に参加しており、若手の人材育成につながっている。

#### (3) 展示等

2016年6月16日にリニューアルオープンした常設展示「中央・北アジア／アイヌの展示」に、北東アジア地域研究・民博拠点の構成員が展示、および関連するイベント16件に協力した。これは研究成果の還元として社会に貢献するものである。

### 研究プロセスの国内外に向けた情報発信

北東アジア地域研究みんぱく拠点のオフィシャルウェブサイトを4月より運用し、事業の概要、所属メンバーの紹介の他、ニュース、イベント、活動報告、研究成果、出版物の項目を設け、随時更新を行っている (<http://www.minpaku.ac.jp/nihu/cnaas/index.html>)。また、年度内に一部英語による対訳を付す予定である。これにより研究プロセスを国内外に提示している。

### 若手研究者の人材育成の取組み

国立民族学博物館拠点では推進センター研究員の辛嶋博善に、先述の月例会（第2回）、IIASでの発表の他、調査（モンゴル国）への派遣の機会を与えることにより、若手研究者の育成を図っている。

連携機関である国立歴史民俗博物館においては特任助教の箱崎真隆氏を調査に同伴し、サンプリングや測定・分析という一連の調査を担当させ、韓国側との共同研究のやり方などを修得させている。

### その他

2016年11月19日に秋田大学で開催された「中東と南アジアの外来移入種メスキート問題——砂漠化対処から水・エネルギー・食料の資源ネクサスへ——」において本拠点リーダーがコメントを行った。これは人間文化研究機構「現代中東地域研究」秋田大学拠点、「南アジア地域研究」京都大学拠点の共催に本拠点が協力して行ったものであり、コメントにより研究水準の向上に寄与するとともに、他の地域研究事業との共同によって研究体制の強化につながっている。

### ●ネットワーク型：現代中東地域研究

地球規模の変動下における中東の人間と文化——多元的価値共創社会をめざして

中心拠点「中東地域における文化資源の現代的変容と個人空間の再世界化」

代表者：西尾哲夫

#### 概要

現代中東地域研究では、国立民族学博物館拠点を中心拠点とし、その他国内の四拠点と共同で研究活動を進めている。端的に述べると現代中東地域研究とは、中東地域における「個」と社会（共同体）のあり方の現代的動態に基づき、グローバル化と地域をめぐる双方向の複眼的な分析ベクトルをもって、人類や人間文化という普遍的な価値を視野に入れた研究である。

本拠点では、現代的諸問題を解決するための基盤形成のために中東地域における社会構築のプロセスを、文化知識の資源化プロセスに着目して研究している。中東地域を基点として広がる空間においては、世界を形成・構想するうえで、生身の個人が経験する未知なる人・場・情報との遭遇が重要な役割を担っている。流動する諸個人が暫定的に構築してゆく場の継起・累積から社会を構想する方法を、文化知識の資源化という側面から検討することで、個人が織りなす世界の特質を解明することが可能となる。そこで（1）「個」から世界への視点による他者観と、（2）社会的心性としての世界観にかかるサブプロジェクトを連携させた活動を実施している。

#### 調査研究活動

個から世界への視点による他者観にかかる研究班と、社会的心性としての世界観にかかる研究班の連携によって、中東地域の人びとの世界の構築方法に関する研究を開始した。また本年度においては、現代中東地域研究のプロジェクト内の機関との連携を図るために共催の研究会・ワークショップを実施した。またフランス社会科学高等研究



をはじめ国外の研究機関、また国内外の他の外部資金で研究を実施する研究グループとも積極的にコンタクトをとり、共益的な協力体制の構築を進めた。

## 研究成果

### (1) 報告書・成果論集、シンポジウム、データベース等

- ① グローバルな知識の環流という観点から現代中東世界と日本との文化的関係について検討する国際ワークショップを東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所拠点と共同で開催した。同ワークショップは、これまでの中東地域研究においては十分に検討されてこなかった一方で、日本において中東地域研究を実施していく上で不可欠な相互の関係性の理解という新たな研究テーマに取り組んだという研究上の意義がある。また中東地域研究として十分に研究協力が進んでこなかったイスラエルを対象とした研究、またイスラエル国内の研究者とも協力したという研究体制上の意義もある。
- ② 国立民族学博物館共同研究事業「個－世界論——中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム」（代表・齋藤剛）と連携し国内で研究会を重ねるとともに、現代中東の民衆文化に焦点をあて、個から世界への他者観が社会的心性としての世界観との間でどのような相互作用と相互変容を迎えてきたのかをテーマに、フランス社会科学高等研究院との学術協定に基づく共同事業としてパリで国際シンポジウムを開催した。
- ③ 中東地域内外の博物館等における文化表象に関する動向調査ならびに関連データベース構築にむけて、パレスチナ、イラン、トルコ共和国、また仏語圏を中心に博物館の所在および収蔵物の内容、さらにはGoogle Mapを利用した位置情報などのデータ整理を進めた。本データベースの作成は、国内の研究者に対する情報発信であるだけでなく、観光業など中東地域関連した事業を展開する一般の企業、旅行者に対する情報発信という二重の目的をもっている。
- ④ 国立民族学博物館の共同研究「物質文化から見るアフロ・ユーラシアの沙漠社会の移動戦略に関する比較研究」（代表・縄田浩志）と連携し、民博や国内大学所蔵の中東民族資料に関する調査を始めるとともに、秋田大学拠点と国立民族学博物館拠点の研究連携として国際ワークショップを開催した。
- ⑤ 「中東民衆文化研究資料」シリーズとして、今なお絶大な人気をもつエジプト人歌手ウム・クルスムについて日本の研究者だけでなく国外の研究者による中東地域における民衆文化の音楽的側面からの研究を推進するため、世界で初めて全楽曲を含む英訳歌詞資料集を出版した。
- ⑥ 2016年3月開催のプレシンポの成果も盛り込んだ論文集『中東世界の音楽文化』を刊行した。

### (2) 教育プログラム等

- ① 中東地域の教育用プログラムとしてイスラーム世界の現代的多様性をテーマとした教材開発「世界のイスラームばっく」作成のための資料収集と資料情報の整理を行うとともに、教育プログラムの開発の準備を行った。
- ② 拠点の研究成果目標を達成する上で必要不可欠な中東地域をめぐる最新の研究動向について、海外の第一線で活躍する中堅・若手研究者によるレクチャー・シリーズを2017年1月以降順次実施し、大学機関における教育へのフィードバックを期待しながら日本国内の大学等研究機関に所属する研究者に対する教育活動を推進した。

### (3) 展示等

- ① 2019年度に開催予定の秋田大学拠点との共催による企画展示のために、国立民族学博物館ならびに東京大学博物館等が所蔵する中東民族資料の悉皆調査を開始した。
- ② 次年度以降に企業関連の博物館との連携した展示を行うために資料整理を実施した。

## 研究プロセスの国内外に向けた情報発信

- ① 国内外に向け研究活動と研究成果の情報発信を目的に拠点のウェブサイトを作成するとともに、Facebookを拠点のウェブサイトと連携して利用することで、迅速な情報発信を進めてきた。Facebookを利用することで迅速な情報発信が可能となっただけでなく、Facebookでは添付できないPDFファイルなどについてDocs.comなどのアプリを連動させることでワークショップのプログラムなどの印刷物についても迅速に情報発信が可能となり、積極的な広報を実施してきた。
- ② 研究動向に関する情報交換のフォーラムとしてレクチャー・シリーズを企画し、海外から若手・中堅クラスの第一線の研究者を招へいし、あわせて今後の協力体制についても意見交換をした。

## 若手研究者の人材育成の取組み

- ① 研究会でのおよそ40歳未満の若手研究者に発表の機会を与える試みとして、拠点研究員による発案で現代中

東地域研究を推進するための中東地域をめぐる人類学的研究の理論的整理を行う研究会を実施した。

- ② 中東地域研究において必要不可欠な中東地域の言語習得を促進し、2016年8月26日～9月1日にかけてアラビア語集中講座合宿を研究分担者である鷺見朗子と共同で企画し、実践的教育プログラムの開発のための養成プログラムを実施した。

#### その他

- ① 国立民族学博物館友の会に協力して、現代中東地域研究推進事業設置関連の講演会を大阪と東京で計4回実施した。
- ② 競争的外部資金として科学研究費の基盤研究(B)(特設分野)「中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化」(代表・西尾哲夫)を獲得し研究の活性化を図るとともに、若手の研究分担者にも競争的外部資金の申請を促した。
- ③ 研究分担者の森千香子(一橋大学法学研究科・准教授)の中東地域とグローバル化という本プロジェクト全体にも深く関係する内容の著書『排除と抵抗の郊外——フランス〈移民〉集住地域の形成と変容』東京大学出版会(2016年3月出版)が、第16回大佛次郎論壇賞および2016年度第33回渋沢・クローデル賞特別賞を受賞した。

#### ●ネットワーク型：南アジア地域研究

グローバル化する南アジアの構造変動——持続的・包摂的・平和的発展のための総合的地域研究

中心拠点「南アジアの文化と社会」

---

代表者：三尾 稔

#### 概要

急速な経済発展とともに社会文化も大きく変わりつつある南アジア地域の現状は、わが国にとっても到底無視できるものではない。本事業は、人文・社会諸科学を中心に自然科学分野とも協働して、地域的一体性の強い南アジア全体の総合的・俯瞰的な理解を深める研究プログラムを推進している。このプロジェクトには、副中心拠点である国立民族学博物館をはじめ、京都大学(中心拠点)、東京大学、広島大学、東京外国語大学、龍谷大学の6拠点が参加し、ネットワーク型の共同研究事業を行っている。

民族学博物館拠点では、南アジア発の人や文化・価値の環流状況の解明や社会変化の中でも維持される南アジア的な社会結合の特性の解明を通じ、地域固有の社会的レジリエンスの特徴を抽出し、グローバル化の中で生ずる社会的リスクへの対応という問題解決に貢献する。また、国際シンポジウムの開催、研究成果の英文叢書の刊行、国際学術協定の拡大、国際研究センター・コンソーシアムの構築など、拠点事業全体の国際化の推進を担っている。

#### 調査研究活動

南アジア(インド4名、パキスタン1名、ネパール1名)をはじめ海外の各地(フランス、カナダ、マレーシア各1名)に若手や他大学在籍者を含むメンバーを派遣し、グローバル化時代における南アジア発の社会・文化変容に関する現地滞在調査を行った。これにより、若手研究者の研究能力育成や他大学との連携体制の強化はもちろん、グローバル化の中での南アジアの社会と文化の動態の最新動向を把握することができた。

また、ユニット別の研究会を3回(予定を含む)、テーマ別の2ユニット合同研究会を計4回(予定を含む)実施し、メンバー間での知見の共有や議論を通じた研究水準の向上を図るほか、2020年度に刊行予定の本拠点独自の成果論文集の出版に向けた議論を開始した。

研究交流協定を結んでいるエジンバラ大学との研究協同を推進するため、インドの医療人類学を専門とする若手研究者を招聘し、本拠点が主催して若手研究者や院生に向けた公開の国際研究セミナーを開催した。これを通して、欧米の医療人類学に関する最新動向を把握することが可能となり、議論を通して参加者間で研究の視野を広げ今後の研究の展開に示唆を得ることとなった。

デリー大学との共同で行う予定であったシンポジウムは先方の資金不足や会場確保の困難から今年度の開催は見送らざるを得なかったが、来年度以降の開催のため協議を続けている。

国際的な南アジア研究センター間の連携やネットワーク化を目指し、東アジア・東南アジア諸国(韓国、シンガポール、タイ、ベトナム)の主要な南アジア研究センターの代表研究者を招聘し、2016年12月に「アジア・太平洋地域南アジア研究センター・コンソーシアム」設立準備会合を開催した。会合では、2017年度以降の協同的研究事業として、国際学会の共催やメーリングリスト作成など具体的な方針についての議論を進めた。これらの協同的研究事業体制を整備することで、研究の国際水準での向上や国際発進力の向上が大いに期待される。

## 研究成果

### (1) 報告書・成果論集、シンポジウム、データベース等

報告書・成果論集に関して、2015年12月に国立民族学博物館で開催した国際シンポジウム“Transformation in Globalizing South Asia: Comprehensive Area Studies for Sustainable, Inclusive, and Peaceful Development”の成果論集の編集をすすめ、現在研究出版委員会による査読の行程にある。これにより、ここまでの主要な研究成果の国内外への発信が達成される見込みである。

写真家沖守弘氏の撮影した約2万点のインドの祭礼・工芸・芸能等に関する写真のデータベースを作成し、国立民族学博物館のホームページ上で「沖守弘インド写真データベース」として公開し、貴重な研究資料の一般への普及を達成した。

### (2) 教育プログラム等

拠点研究員の竹村嘉晃が関西大学文学部で担当する「南アジア・内陸アジア論」の授業の一環として、国立民族学博物館で学外演習を実施し、南アジア展示の見学と南アジアに関するビデオトークの鑑賞およびグループワークを行い、学生たちに物や映像を通して南アジア世界への理解を深めさせた。また、同館図書館を訪れ、卒業論文などの資料収集に向けた活用方法について解説した。また、拠点構成員である上羽陽子が大阪芸術大学工芸学科で担当する「学外授業」と「博物館実習」にて、及び京都精華大学ポピュラー・カルチャー学部で担当する「クラフトⅠ」と同芸術学部「文様史Ⅰ」にて、それぞれ南アジアの展示案内を中心とした国立民族学博物館の活用方法について解説した。いずれも、国立民族学博物館と大学の連携や、同館の教育的活用に貢献する内容となっている。

### (3) 展示等

国立民族学博物館の事業と連携して、一般の来館者が南アジア展示により親しみやすくなるよう、同館の南アジア展示場の展示改修や新しい展示ガイドの制作に協力した。

また将来の研究展示の展開に向けて、インドの織機や楽器の収集を支援した。インドの織機は、国立民族学博物館はもとより、国内の研究機関や博物館にもほとんど収蔵されておらず、南アジアの手仕事の伝統を具体的な「モノ」を通じて理解・紹介する上で貴重な資料である。一方、インドの楽器はインド東部ベンガル地方の名家であるタゴール家で100年以上前から所有されてきたものであり、インドの音楽発展史の研究に大きく貢献する資料である。

## 研究プロセスの国内外に向けた情報発信

「現代インド地域研究」プロジェクト期に構築したホームページを活用して情報の一般社会への発信に努めた。特に今年度は英文情報ページを充実させて研究情報の海外への発信を強化した。これにより、日本だけでなく南アジアを含む海外からの読者に向け研究の最新動向を発信することが可能となった。

## 若手研究者の人材育成の取組み

PDや若手助教・講師レベルの研究者の海外調査（計6名、予定を含む）、研究会での発表（計6名、予定を含む）を促し、これらを通じて若手の研究能力の育成に取り組んだ。対象となった若手研究者の大半は他大学に所属しており、調査や発表の機会を提供することを通じて、若手の横のネットワーク形成を促し、そこでの議論をフィードバックさせることにより当該所属大学における南アジア研究の更なる発展にも貢献した。

## その他特記事項

当拠点に配置されている拠点研究員のうち、2016年12月に竹村嘉晃が拠点での研究を含む研究活動に対して舞踊学会奨励賞を受賞した。同賞は、南アジアのドリットたちの生を捉える視角に、舞踊論という新たな分析軸を導入し、グローバル化時代を生きぬく人びとの実践を活写したことを高く評価されたものである。また同じく拠点研究員の中川加奈子は2017年4月1日付けで追手門学院大学社会学部でのテニュアトラックの准教授職への就職が決定した。これは同氏による食肉を切り口としたネパールのカースト社会に関するこれまでの研究を評価されてのことであり、今後は同大学での教育活動を通して「食」を介した南アジア社会理解に関する教育支援が期待される。

南アジア地域研究プロジェクトの国際化を担う副中心拠点として、「アジア・太平洋地域南アジア研究センター・コンソーシアム」の構想と具体化を推進した。その一環として、2016年12月に東アジア・東南アジアの主要国の南アジア研究センターの代表を招聘し、コンソーシアム設立準備会合を開催し、2017年度以降の国際協同的研究事業を国際セミナーの共同開催などのかたちで展開することで合意した。

## 2-3 外部資金による研究

### 科学研究費助成事業による研究プロジェクト

#### 2016年度科学研究費補助金 採択課題一覧

区分	研究種目	研究課題	氏名	研究年度
新	新学術領域研究 (研究領域提案型)	人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築	野林厚志	2016 ～2020
	新学術領域研究 『学術研究支援基盤形成』	地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化	吉田憲司	2016 ～2018
	基盤研究 (A) 海外	チベット・ビルマ語族の繋聯言語の記述とその古態析出に関する国際共同調査研究	長野康彦	2016 ～2019
	基盤研究 (A) 海外	アンデス文明における権力生成と社会的記憶の構築	關 雄二	2016 ～2019
	基盤研究 (B) 海外	2015年ネパール地震後の社会再編に関する災害民族誌的研究	南 真木人	2016 ～2018
	基盤研究 (B) 特設分野研究	中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化	西尾哲夫	2016 ～2020
	基盤研究 (C) 一般	ポスト家畜化時代の鵜飼文化とリバランス論 ——新たな人・動物関係論の構築と展開	卯田宗平	2016 ～2019
	基盤研究 (C) 一般	カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの人類学的研究	藤本透子	2016 ～2020
	基盤研究 (C) 一般	スリランカ系タミル人によるインド舞踊の発展と再々構築化に関する全体関連的研究	竹村嘉晃	2016 ～2018
	基盤研究 (C) 一般	国立天文台水沢収蔵資料から読み解く緯度観測所120周年	馬場幸栄	2016 ～2019
規	若手研究 (A)	中国甘肃仏教石窟壁画の制作技法に関する多面的研究	末森 薫	2016 ～2018
	若手研究 (B)	現代インドにおける遺伝子の社会的布置に関する人類学的研究	松尾瑞穂	2016 ～2018
	若手研究 (B)	社会をつくる芸術： 「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」の人類学的研究	登久希子	2016 ～2018
	挑戦的萌芽研究	日本手話と台湾手話の歴史変化の解明： 歴史社会言語学の方法論の確立に向けて	相良啓子	2016 ～2018
	研究活動スタート 支援	南アジアの都市における食肉をめぐる社会関係の文化人類学的研究	中川加奈子	2016 ～2017
	特別研究員奨励費	ネパールにおける教育の市場化と生活世界の変容 ——貧困層の親族・移動・暴力に着目して	安念真衣子	2016 ～2017
	特別研究員奨励費	現代ペルーにおける文化遺産の活用に関する文化人類学研究	關 雄二 SAUCEDO SEGAMI Daniel Dante	2016 ～2018
継 続	新学術領域研究 (研究領域提案型)	植民地時代から現代の中南米の先住民文化	鈴木 紀	2014 ～2018
	国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化)	日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究 (国際共同研究強化)	伊藤敦規	2015 ～2018
	基盤研究 (A) 一般	アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト ——エジプト系伝承形成の謎を解く	西尾哲夫	2012 ～2016
	基盤研究 (A) 海外	熱帯の牧畜における生産と流通に関する政治生態学的研究	池谷和信	2014 ～2017
	基盤研究 (A) 一般	ネットワーク型博物館学の創成	須藤健一	2015 ～2019
基盤研究 (A) 一般	アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究	吉田憲司	2015 ～2019	



	基盤研究 (A) 一般	アンデスにおける植民地的近代 ——副王トレドの総集住化の総合的研究	齋藤 晃	2015 ～2019
	基盤研究 (A) 海外	中国周縁部における歴史の資源化に関する人類学的研究	塚田誠之	2015 ～2017
	基盤研究 (A) 海外	グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究 ——伝統継承と反捕鯨運動の相克	岸上伸啓	2015 ～2018
	基盤研究 (B) 一般	ミュージアムと研究機関の協働による制作者情報の統合	丸川雄三	2014 ～2016
	基盤研究 (B) 海外	墳墓からみたインダス文明期の社会景観	寺村裕史	2014 ～2016
	基盤研究 (B) 海外	台湾原住民族の分類とアイデンティティの可変性に関する人類学的研究	野林厚志	2014 ～2017
	基盤研究 (B) 特設分野研究	多世代共生「エイジ・フレンドリー・コミュニティ」構想と実践の国際共同研究	鈴木七美	2014 ～2016
	基盤研究 (B) 一般	セルロース系ナノファイバーの紙資料保存への応用	園田直子	2015 ～2017
	基盤研究 (B) 一般	東日本大震災で被災した民俗文化財の保存および活用に関する基礎研究	日高真吾	2015 ～2017
	基盤研究 (B) 一般	映像人類学とアーカイブズ実践 ——活用と保存の新展開	大森康宏	2015 ～2017
	基盤研究 (B) 海外	ポスト福祉国家時代のケア・ネットワーク編成に関する人類学的研究	森 明子	2015 ～2017
継	基盤研究 (C) 一般	トランスナショナルな社会運動と政治参加の人類学： オセアニア大国の移民を事例に	丹羽典生	2013 ～2016
	基盤研究 (C) 一般	インド災害後のローカル文化再編におけるコミュニティ資源としての「手工芸」の意義	金谷美和	2014 ～2017
	基盤研究 (C) 一般	現代インドにおける染織技術の戦略的継承法に関する民族芸術学的研究	上羽陽子	2014 ～2017
	基盤研究 (C) 一般	現代イタリア社会におけるローカリティに関する文化人類学的研究	宇田川妙子	2014 ～2017
	基盤研究 (C) 一般	ガリラヤ地方とレバノンのキリスト教徒によるアラブ・ナショナリズムの再考	菅瀬晶子	2015 ～2017
続	基盤研究 (C) 一般	本州とその周辺の島々及び多島海海域における民俗芸能の研究	笹原亮二	2015 ～2019
	若手研究 (A)	日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究	伊藤敦規	2014 ～2017
	若手研究 (A)	北パキスタン諸言語の記述言語学的研究	吉岡 乾	2015 ～2018
	若手研究 (B)	言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究	鈴木博之	2013 ～2016
	若手研究 (B)	アフリカの無形文化保護における民族誌映画の活用	川瀬 慈	2013 ～2016
	若手研究 (B)	博物館展示の再編過程の国際比較による「真正な文化」の生成メカニズムの解明	太田心平	2013 ～2016
	若手研究 (B)	『千一夜物語』仏語訳者マルドリユス再考 ——〈遺贈コレクション〉の分析を中心に	岡本尚子	2014 ～2016
	若手研究 (B)	滞日ネパール人の生活実践と労働動態の研究	森田剛光	2014 ～2016
	若手研究 (B)	植民地インドにおける商業カーストの邸宅建築に関する基礎的研究	豊山亜希	2014 ～2016
	若手研究 (B)	現代イランにおける東洋的身体技法の実践とイスラーム的転回をめぐる人類学的研究	黒田賢治	2014 ～2017
	若手研究 (B)	笑い話に注目した日本語ナラティブの「型」と「技」の地域比較	金田純平	2015 ～2017

継 続	若手研究 (B)	世界文化遺産バンチェン遺跡と地域社会： 住民の生活史の視点から	中村真里絵	2015 ～2017
	若手研究 (B)	アフリカ障害者の生活基盤に関する地域研究	戸田美佳子	2015 ～2017
	挑戦的萌芽研究	法・会計・文化融合型の公共政策国際比較研究 チャリティ制度を事例に	出口正之	2015 ～2016
	研究活動スタート 支援	モノを通してみる現代バレーにおける聖人信仰の形成と発展に 関する人類学的研究	八木百合子	2015 ～2016
	研究成果公開促進費 データベース	梅棹忠夫資料のデジタルアーカイブズ	久保正敏	2013 ～2016
	研究成果公開促進費 データベース	服装・身装文化デジタルアーカイブ	高橋晴子	2014 ～2018
	特別研究員奨励費	花街の担い手コミュニティの日常実践に関する歴史人類学的 研究	松田有紀子	2015 ～2017
特別研究員奨励費	シヨナ音楽文化と憑依儀礼の政治・宗教人類学的研究	松平勇二	2015 ～2017	

## 受託事業

『日本財団助成手話言語学研究部門』の設置および手話言語学事業の推進

委託者：公益財団法人 日本財団

担当教員：菊澤律子

実施期間：2016年4月1日～2017年3月31日

### 目的と概要

先端人類科学研究部下に「日本財団助成手話言語学研究部門」を五年間設置し、常勤研究員二名、併任研究員一名、客員研究員一名を配置する。五年先を見据えた学術研究の推進を基盤とし、当該分野のアウトリーチおよび通訳養成研究等を効果的に推進する。具体的には以下の通り。

- 手話言語学のアウトリーチにおいては、以下の事業展開により、研究者の輩出および社会における手話言語の認知をはかる。
  - 共同研究会形式による研究の推進、
  - 年一回の国際学会形式の研究会開催による国内での言語学の最新動向の報告および議論の場の提供、
  - 大学院生および一般研究者を対象とした夏期もしくは冬期講習の実施（今年度は実施に関する検討）、
  - 話者情報収集等研究基盤の整備、
  - 諸大学における手話言語学の授業および講演開催のための講師派遣、
  - 大学院生および音声言語研究者への手話言語研究のための研究費の支給。
- 学術手話通訳者養成事業においては、以下のような事業を展開することで、関西地区を中心とした学術通訳者養成および手話通訳ニーズのある大学への派遣につなげる。
  - 学術手話通訳研究事業（スクリーニングにより対象者4～6名を専攻）、
  - 大学でのニーズの発掘と派遣事業（今年度は基礎調査とパイロット派遣）、
  - 言語学的知識に基づく通訳クリニックの開講（一般通訳者の参加を広く募集し、学術通訳候補者等の発掘につなげる）、
  - 将来的な高等教育機関における養成につなげる方法の模索。
- 言語学講座の開講や自主勉強会のサポートを行い、社会還元につなげる。

### 実施状況

予定通り、先端人類科学研究部（研究部改組のため2017年度より「人類基礎科学研究部」）下に「日本財団助成手話言語学研究部門」を新たに設置、常勤研究員二名、併任研究員一名、客員研究員一名を配置した。

#### 1. アウトリーチ関連の達成状況

##### (1) 共同研究会形式による研究の推進

共同研究という形はとらなかったが、所属研究員間で共同研究をすすめ、それぞれの研究成果に反映させた。具体的には、Engberg-Pedersen・池田による研究報告、相良・菊澤による歴史言語学研究の推進等がある。

げられ、その成果は順次、国際学会や論文の形で公開予定である。

<http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/sillr03.html>

- (2a) 年一回の国際学会形式の研究会開催による国内での言語学の最新動向の報告および議論の場の提供  
昨年度まで開催していたフェスタの継続事業として SSL2016 を開催、終了した。

<http://www.r.minpaku.ac.jp/ritsuko/ssl2016/index.html>

- (2b) 大学院生および一般研究者を対象とした夏期もしくは冬期講習の実施（今年度は実施に関する検討）  
検討の結果、2017年度より学術通訳に関する集中講座を実施することにした。

- (3) 話者情報収集等研究基盤の整備

研究者および話者のニーズおよび対応に関する情報収集のためのアンケート作成の段階まで行った。

- (4) 諸大学における手話言語学の授業および講演開催のための講師派遣

先行事業に引き続き、目標通り行った。

<http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/2013-2015/103.html>

(2016年度内容を <http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/sillr011.html> に移行中。)

- (5) 大学院生および音声言語研究者への手話言語研究のための研究費の支給

研究費を直接支給するのは現在の民博の規程下では難しいということになり、研究部門事業に直接かかわっていただく形での研究支援に形を変える必要があることがわかった。年度内に切り替えて実施するのは難しいため、今年度は大阪教育大学学生二名の通訳およびコーディネーター業務見習い雇用とし、2017年度に具体化を検討することとした。

## 2. 学術手話通訳者養成事業関連の実施状況。

- (1) 学術手話通訳研究事業（スクリーニングにより対象者4～6名を専攻）

計画通り行った。

<http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/sillr02.html>

- (2) 大学でのニーズの発掘と派遣事業（今年度は基礎調査とパイロット派遣）

大阪教育大学支援室、大阪大学支援室と協力し、大阪府の方針確認等を含む基礎調査を進めた。

- (3) 言語学的知識に基づく通訳クリニックの開講（一般通訳者の参加を広く募集し、学術通訳候補者等の発掘につなげる）

予定通り行った。

<http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/2013-2015/102.html>

- (4) 将来的な高等教育機関における養成につなげる方法の模索。

上記(2)参照。

## 3. 言語学講座の開講や自主勉強会のサポートを行い、社会還元につなげる。

ELAN 講習会、たのしい言語学を学ぶ会等を行った。

<http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/2013-2015/104.html>

以下、それぞれ具体的な事業内容を申請書の事業計画に従って記す。

### 事業内容 1. 新規職員採用

以下の通り、採用人事を行い、採用した。

飯泉菜穂子（特任准教授、終年度まで継続して雇用予定）

相良啓子（ろう者、特任助教、終年度まで継続して雇用予定）

池田ますみ（ろう者、事務補佐員（研究支援）、終年度まで継続して雇用予定）

磯部大吾（ろう者、事務補佐員（研究支援）、終年度まで継続して雇用予定）

石原和（事務補佐員、2017年度からプロジェクト研究員として雇用）

原大介（客員研究員、規程上限の2021年3月まで雇用予定）

その他

宮谷祐史（事務補佐員、大阪教育大学大学院生、2016年度のみ）

鎌綾香（事務補佐員、大阪教育大学学生、2016年度のみ）

児玉茂昭（プロジェクト研究員、2016年度のみ）

## 事業内容 2. 学術手話通訳研修事業

実施済みの事業

- (1) 期 間：2016年5月～2016年10月
- (2) 場 所：大阪・国立民族学博物館
- (3) 対象者：関西在住を中心とする通訳者の中で一定の通訳技能を持つもの（スクリーニングにより選考）
- (4) 内 容：関西における学術通訳チーム養成
- (5) 参加者数：通訳者4名
- (6) 受け入れ研究者：非該当
- (7) 使用言語：日本語、日本手話、英語

学術通訳に必要な知識を身につけ、技量を伸ばすことができるよう、月一回、通訳者養成の専門家を招待してのミーティングや評価等を行った。カリキュラム作成および運営業務は飯泉菜穂子が担当。

### 通訳者

川鶴和子、山崎晋、隅田伸子（継続）、月東渉（新規）

### 運営メンバー

飯泉菜穂子（国立民族学博物館）  
市田泰弘（国立障害者リハビリテーションセンター学院／国立民族学博物館）  
野口岳史（国立障害者リハビリテーションセンター学院）  
岡森結子（通訳コーディネーター）  
菊澤律子（国立民族学博物館）

### 講 師

木村晴美（国立障害者リハビリテーションセンター学院）  
吉川あゆみ（世田谷福祉専門学校）  
西村雅子（日英通訳者）  
甲斐更紗（九州大学）  
（ウェブサイト <http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/sillr02.html>）

## 事業内容 3. 公開講座の開講

以下の通り、公開講座を開講した。

1. 講 師：吉岡乾（国立民族学博物館）  
場 所：国立民族学博物館  
日 程：2016年4月より8月まで全6回  
内 容：「たのしい言語学を学ぶ会」  
聴講者数：35名程度（一般ろう・聴）  
コーディネーター：飯泉菜穂子  
使用言語：日本語・日本手話（学術手話通訳研修事業 OJT による手話通訳）  
<http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/2013-2015/102.html>
2. 期 間：2016年10月～2016年11月、全10講座  
場 所：大阪・国立民族学博物館  
対 象 者：通訳者および通訳者を目指す方  
内 容：手話通訳者のための「みんなくで手話言語学を学ぼう！」  
参加者数：各回20～30名  
コーディネーター：飯泉菜穂子  
使用言語：日本語、日本手話（「NPO 法人日本手話教師センター」の協力によるろう通訳OJT）  
講 師：飯泉菜穂子（国立民族学博物館）、原大介（豊田工業大学／国立民族学博物館）、武居渡（金沢大学）  
<http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/2013-2015/102.html>

## 事業内容 4. 手話言語学の専門家の諸大学への派遣

以下の通り、諸大学および研究機関に手話言語学の専門家を派遣し、講義もしくは講演を行った。

1. 講 師：池田ますみ



- 派遣先：関西学院大学  
 日程：2016年10月26日（講義）  
 内容：「香港中文大学の手話言語学プログラムでの経験」  
 聴講者数：30名程度（学生、教員）  
 受け入れ研究者：関西手話研究会（関西学院大学）  
 使用言語：日本手話（日本語への通訳付き）
2. 講師：全15名によるリレー講義（コーディネーター 菊澤律子）  
 派遣先：東北大学  
 日程：2016年後期（開講三年度目）  
 内容：全学教育授業「手話の世界と世界の手話言語☆入門」  
 聴講者数：80人  
 受け入れ研究者：小泉政利（東北大学大学院 文学研究科・文学部 言語学研究科）  
 実施言語：日本語、日本手話、英語。  
 日本手話による講義については原則として通訳を派遣。  
[http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/2013-2015/103\\_2016d01.html](http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/2013-2015/103_2016d01.html)
3. 講師：市田泰弘  
 派遣先：東京大学  
 日程：2016年通年講義のうち、半年間（15日間）  
 内容：言語学概論（大学院および学部）  
 聴講者数：確認中  
 受け入れ研究者：非該当  
 実施言語：日本語  
 ※昨年に引き続き、本事業開始以前から開講されていた講義の継続。制度面での整備による協力。
4. 講師：全5名によるリレー講義（コーディネーター 飯泉菜穂子）  
 市田泰弘（国立障害者リハビリテーションセンター学院／国立民族学博物館）  
 木村晴美（国立障害者リハビリテーションセンター学院）  
 中野聡子（大阪大学）  
 原大介（豊田工業大学・国立民族学博物館）  
 飯泉菜穂子  
 派遣先：大阪教育大学  
 日程：2016年後期（11月から3月）  
 内容：手話通訳、手話言語学に関する講義  
 聴講者数：30～70人（見込み）  
 受け入れ研究者：池谷航介（大阪教育大学）  
 実施言語：日本語・日本手話  
[http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/2013-2015/103\\_2016d02.html](http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/2013-2015/103_2016d02.html)

#### 事業内容 5. 研究基盤データベース作成

担当者（原大介）により、ニーズ調査票および質問項目を作成した。2017年6月上旬までに研究者およびろう者への予備調査を行い、データベースシステムの作成にとりかかる。

#### 事業内容 6. 国際研究集会の開催

以下の通り開催した。

- 時期：2016年9月23日（通訳と発表者打ち合わせ）  
 2016年9月24-25日（国際会議）  
 場所：大阪・国立民族学博物館  
 対象者：国内外の大学生、大学院生、および研究者（一般の聴講可）

内 容：招待講演二件および一般からの公募・採択による手話言語学研究発表14件

参加者数：270名

受け入れ研究者：非該当

使用言語：英語、アメリカ手話、日本語、日本手話（一部、国際手話付き発表あり）

インターネット配信つき（アクセス数9月23日283名、9月24日186名）

二日目に関しては、民博館側の施設の不備で配信が不能になった時間があったため、視聴率が下がったと思われる。来年度以降に向けて改善に努めたい。

詳 細：<http://www.r.minpaku.ac.jp/ritsuko/ssl2016/index.html>

#### 事業内容. その他

以下の通り、「手話による ELAN 講座」（コーディネーター：相良啓子）を開催した。

時 期：2017年2月3-4日（土、日）

場 所：大阪・国立民族学博物館

対 象 者：国内外の大学生、大学院生、および研究者

内 容：ELANによる手話映像処理の入門講座

参加者数：15名

講 師：菊地浩平（総合研究大学院大学・学融合推進センター・助教）、アシスタント 牧野遼作（国立情報学研究所・特任研究員）

使用言語：日本語（日本手話通訳付き）

詳 細：<http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/2013-2015/104.html>

また、関西学院大学手話言語研究センターでの開講講座の企画計画への協力（原大介、菊澤律子）、および講師として協力（原大介、飯泉菜穂子、菊澤律子）した。その他にも、手話言語学関連の依頼の内容に応じて、各研究員および事務補佐員が協力・講演・対応を行った。

#### 成果

手話言語学研究部門という民博の公的な研究部門を設立したことで、名実ともに、民博の館の事業として研究事業を進めることができるようになった。時限付きとはいえ、まとまった年数でスタッフを確保できるようになり、それぞれが長期的な目標を見据えて研究や事業の運営に取り組むようになった。また部門設立により、継続および新規いずれの事業においても、これまで民博と直接関わりのなかった研究機関や研究者からの関心や協力を得ることができるようになった。来年度以降、国内の関連機関との連携、アジアの他の関連機関との連携も視野に入れて事業を進めてゆくための基盤ができたと考えている。

#### 事業成果物：

- 事業広報のための研究部門ウェブサイトを新規に作成した。

<http://www.r.minpaku.ac.jp/shuwa/index.html>

（報告書提出時点で英文サイトは翻訳済み、アップ待ち状態。）

- 国際研究集会（SSL2016）ウェブサイト

<http://www.r.minpaku.ac.jp/ritsuko/ssl2016/index.html>

- 国際研究集会（SSL2016）写真（CDにて提出）

<https://www.dropbox.com/sh/9kw9tcl8sc6wg1o/AADWMec2iCTqvscyUQMn4qfWa?dl=0>

- 国際研究集会（SSL2016）内容のビデオ記録（DVDにて提出）

- 国際研究集会（SSL2016）論文集準備中

- リレー講義資料および学生アンケート（印刷物の形で提出）

「台湾文化光点事業計画——民族誌映画にみる文化への視点 台湾、日本、ノルウェー、エチオピアの作品より」

委託者：The Ministry of culture, ROC (Taiwan) CHU WEN CHING

担当教員：川瀬 慈

実施期間：2016年6月14日～11月30日

## 目的と概要

### 1. 概要

2016年11月12、13日に国立民族学博物館において台湾文化光点計画上映会・シンポジウム『民族誌映画にみる文化への視点——台湾、日本、ノルウェー、エチオピアの作品より』を開催した。本会では、台湾原住民の映像作家が、自らの文化や社会の変容をテーマに制作した民族誌映画の上映を行い、さらに台湾との比較の見地から、ノルウェーの先住民や、日本、エチオピアのマイノリティの文化をテーマにした民族誌映画の上映を行った。本会では、全5作品の制作責任者である映画監督全員が上映・議論に参加した。台湾からは『虹の物語』を監督したタイヤル族の比令亞布氏、『靈山』を監督した、タロコ族の血をひく蘇弘恩氏と同作プロデューサーの李桂玲氏が、またノルウェー、トロンソ大学博物館より、『受け継ぐ人々』を監督したロセラ・ラガッチ准教授が参加した。本館からは『僕らの時代は』を監督した川瀬、そして『怒 大阪浪速の太鼓集団』監修の寺田吉孝教授が参加し上映、発表を行った。台湾原住民による作品を世界の他の国々の研究者の作品と並べて上映することによって、台湾文化の独自性や創造力、各作り手の映像に対する価値観や思考を浮き彫りにすることをねらった。2日目の午後には、シンポジウムを開催し、各作品の制作責任者と、台湾研究の専門家である民博の野林厚志教授が発表、討論を行った。台湾作品、そしてノルウェーの作品については、本邦初公開であり、それらの作品の上映と監督本人による作品解説や来場者との議論を行うことができ、貴重な機会となった。

### 2. 内容

本会では、下記5本の映画の上映と解説、ならびに作品監督の発表を中心とするシンポジウムを行った。各映画の上映直後に作品の監督が登場し、川瀬との対話形式で、作品制作のきっかけや、作品の方法論、対象となった民族や集団についての解説を行った。その後、フロアの観客も交えて、作品に関する質疑応答を行った。さらに、会場である講堂外のロビー（ホワイエ）へ監督が移動し、通訳を交えて観客と触れ合う機会を設けた。ロビーでは、台湾文化の研究者をはじめ映像人類学研究者、ドキュメンタリー映画や商業映画の制作者が、各監督と密に接し、意見交換を行った。以下に上映作品の紹介を行う。

## 実施状況

### 上映作品

#### 作品1.

『虹の物語』（彩虹的故事 58分 1998年 比令亞布監督 タイヤル語（日本語字幕））

タイヤル族の老人によれば、タイヤル族の者が亡くなると、死者の魂は虹を通してタイヤル族の天国に行くという。ただし、虹を通過する際、祖霊によって、死者の顔に刺青がほどこされているかどうか、厳しいチェックが入るのだという。もし、その顔に刺青がない場合、魂は天国に到達することができなくなるそうだ。私（監督）自身、タイヤル族の出自を持つ。本作は、タイヤル族の老人たちへの聞き取りを中心に、刺青と虹にまつわる物語について描いた。タイヤル族の伝統的な刺青文化が次第に消失していく過程をとらえつつ、伝統文化の復興という課題について考えたい。

#### 作品2.

『靈山』（靈山61分 2015年 蘇弘恩監督 タロコ語、中国語（日本語字幕））

例えば過去400年を振り返ると、台湾は数々の政治体制の元に置かれてきたことがわかる。オランダ、スペイン、日本、そして中華民国、それぞれの国が、この島に大きな足跡を残してきたといえよう。これらの政治体制の変化に最も強く影響を受けてきたのが台湾の原住民だ。様々な統治者のもとで、原住民の分類のありかたや原住民であることの意識も変化してきた。本作の主人公はタロコ族の老人である。本作では、この老人のライフコースから、台湾原住民と原住民の権利回復運動の歴史を照射する。

#### 作品3.

『受け継ぐ人々』

（Firekeepers 57分2007年 Rossella Ragazzi 監督 サーミ語、ノルウェー語、英語（日本語字幕））

若いサーミ先住民であるローラとサラはサーミの伝統的な歌唱法ヨイクの伝統の継承と革新にとりくんでいる。ヨイクは長い間、シャーマニックな実践として位置づけられ、キリスト教の教会からは、“邪悪な表現”というレッテルをはられてきた。また、二人の先祖たちは、ノルウェー政府による先住民文化の抑圧や同化政策のなかで苦しんできた。

本作では二人が率いるロックバンド Adjågas の活動を追いかけ、自らのコミュニティとの対話を大切にしつつも、グローバルな世界や音楽産業とのつながりのなかで、ヨイクの継承と革新をめざす主人公たちの葛藤を描き出す。

#### 作品 4.

『僕らの時代は』(Kids Got a Song to Sing 45分 2006年(2016年再編集)川瀬慈監督アズマリ隠語、アムハラ語(日本語字幕))

弦楽器マシニコを弾き語るアズマリは、エチオピア北部の地域社会において古くから音楽をなりわいにしてきた職能集団である。本作は、アズマリの少年少女が歩む人生の道程を、映像によって数年ごとに記録してゆくプロジェクトである。本作では、思春期の少年二人、タガブとイタイアに焦点をあてた。音楽職能を生きる二人の日々の営みや葛藤とともに、アズマリ集団内部における彼らと大人たちとのなわばり争い等を、ナレーションや解説字幕を極力廃し、撮影者と二人の対話を中心に描いた。

#### 作品 5.

『怒 大阪浪速の太鼓集団』

(Angry Drummers: A Taiko Group from Osaka, Japan 85分 2010年 寺田吉孝監督)

この映像番組は、大阪市浪速区の被差別部落に活動の拠点をおく太鼓集団「怒」のドキュメンタリーである。同地区は、300年以上の太鼓づくりの伝統をもつが、太鼓職人たちは皮革業に対する不浄観などから差別や偏見に晒される時期が長く続いた。「怒」は、あらゆる差別をなくすことをスローガンにして活動を続けている太鼓集団であるが、彼らの活動は、最初から差別の経験と直線的に結びついていたわけではない。番組では、メンバーたちが、個人的な楽しみで始めた太鼓演奏が、地元の支援を受けるにつれて、その支援の背景となっている差別の歴史を理解するようになり、太鼓演奏のなかに人権啓発の手段としての可能性を見出していくプロセスが描かれる。また、グループの活動に対するメンバーの意識や関わり方は一様ではなく、彼らが活動の拠点としている部落解放同盟浪速支部の運動形態・実践とも、一定の距離を置いている点が示される。

#### シンポジウム

前5作品の上映を終えた2日目午後には、各作品の監督に、本館の野林を加え、シンポジウムを行った。

各監督が、どのような目的を持って、映画制作を行ってきたかそれぞれふりかえり、今回の上映会で発表された作品が各監督の作品制作履歴の中でどのような位置付け、重要性があるのか、あるいは、方法論的な特徴があるのかについて詳細に解説した。

作品1の比令亞布監督は、自らの映画制作の実践が先住民文化の保存と、失われつつある先住民文化の復興を喚起するためにある点を指摘した。また、映画制作が、先住民文化の、いわばネガティブな報道に対抗する、オルタナティブな表象を実現させる実践であることを強調した。作品2の蘇弘恩監督は、比令亞布監督の指摘した、文化を保存し、復興させるデバイスとしての映画の可能性を認めつつも、次世代の先住民作家の役割として、先住民の部落内部の利害関係をはじめとする複雑なポリティックスをも注視して記録する必要性を説いた。このように本シンポジウムでは、台湾先住民の監督であっても世代間(比令亞布監督と蘇弘恩監督の年齢には20年の隔りがある)による記録への意識の差を浮き彫りにすることになった。作品3のラガッチ監督は、先住民文化のマニフェストとしての映画の役割について述べ、自文化を映し出す鏡あるいは、自己のアイデンティティの認識、自覚のために先住民に使用してもらうためのツールとしての映画制作について、自身の経験に基づき報告した。

また、野林は、20世紀の先住民やマイノリティの権利に関するグローバルなレベルでの運動の盛り上がりや踏まえつつ、台湾の先住民が社会運動としての先住民運動を起こし、自分たちの文化を表象、発信してきた点を指摘した。台湾の先住民が、世界の状況をうまく取り入れながら、自文化の発信を戦略的に進め、そのようななか、台湾の憲法が多元文化を認めるにいたったいきさつについて解説した。

#### 成果

これまで人類学者によって研究され、表象される側にあった、先住民/先住民あるいはマイノリティたちが、自



らの文化を自らの手で撮影・記録し、発信していこうという運動が世界各地の先住民／原住民の作家、活動家、学者のあいだで高まっている。世界各地の先住民／原住民が、映画制作をはじめ、テレビ局やラジオ局の開設、絵画や工芸等の芸術活動を通して、時には、ラディカルに自らのアイデンティティを広く社会にアピールしている。学界は、こうした動きに対して、少し距離を置き、先住民／原住民のメディア実践を客体化してとらえ、分析する姿勢が一般的であった。そのようななか本会では、映画制作という共通のプラットフォームの上で、台湾の原住民映画監督、ノルウェーと日本の研究者が親密に議論したことで、原住民、研究者のそれぞれの記録のアプローチ、記録への態度が浮き彫りになった。台湾の原住民族の権利回復運動をはじめ、多様な原住民の文化に対する政治的なまなごしの変遷等、映像を通して台湾の原住民文化をめぐる社会状況を学ぶことができたと同時に、先住民／原住民、マイノリティによるメディア実践と自文化の表象における世界各地の事例との比較から意見交換ができた点は大きな意義がある。

さらには、映画制作方法論、たとえば参加型、観察型のアプローチの狙いやその効果をめぐって等、映画制作者ならではの具体的な建設的な意見交換が行われ、記録映画の制作を志す者にとっては刺激的な場となった。

2日間を通して、台湾文化に興味を持つ一般の観客をはじめ、人類学の研究者や学生、ドキュメンタリー映画の関係者等が、招聘された各監督と密に交流を行う機会となった。本会をきっかけに、映像を通して台湾文化を学び議論する新たな企画が生まれ育っていくであろう。

#### 参加人数

11月12日 国立民族学博物館講堂 148名

11月13日 国立民族学博物館講堂 69名

#### 掲載紙情報

『万博記念公園だより』11月号

『サンケイリビング新聞』北摂中央版10月29日

『サンケイリビング新聞』北摂西版10月29日

『市報すいた』11月号

#### 学術研究動向調査「文化人類学・民俗学分野に関する学術研究動向

——文化人類学における理論的研究の新しい展開——

委託者：日本学術振興会

担当教員：森 明子

実施期間：2016年4月1日～2017年3月31日

#### 目的と概要

現代世界の文化人類学研究は、隣接分野と重なりながら展開していて、その輪郭はとらえにくい。本調査は、この状況で行われている研究のテーマやキーワードの傾向を明らかにし、また、学際研究がどのような体制で行われているのか、明らかにすることを目的とした。

#### ○テーマ、キーワードの傾向

近年の科研、共同研究、学会口頭発表のデータを整理した結果、テーマとしては、宗教・儀礼、移民・難民、生態、ネオリベラリズム・グローバル化が上位を占め、医療、開発、災害、モノ、ケア、身体が、これにつづいた。USAのレビュー誌でも、ほぼ同じ傾向がみられた。ただし、日本で多い宗教・儀礼はUSAで少なく、UKのジャーナルでは多い。最近年の傾向としては、USAの論文キーワードに、倫理、イスラム、ネオリベラリズム、国家、官僚制、公共、メディアが急増している。ここから、全体として移民、生態、開発など地球規模の現象がテーマ化する中で、政治、国家、公共を問い直す方向と、身体、倫理、モラルを問い直す方向があらわれていると考えられる。

#### ○学際研究に関する訪問調査

- ・ビーレフェルト大学学際研究センター（ZiF）：2016/17年度は人類学と歴史学の学際プロジェクト「親族と政治」が展開している。5名のコアメンバーが1年間センターに常駐し、世界中から社会学や政治学を含む研究者を招聘して、ワークショップを連続開催している。ワークショップを通して、学際研究者ネットワークがつけられ、家族・親族研究の新しい展開もおこりつつある。
- ・ケルン大学グローバル・サウス研究センター（GSSC）：「南」の視点から、学際的、国際的なプロジェクトを推進するセンターで、現在、人類学者がリーダーをつとめるプロジェクトは、アフリカからアラブ首長国連合や中国

への移民現象を、学生の教育とリンクしながら研究している。

- ヨーロッパの民族誌博物館に、移民や異文化理解をテーマ化した、新しい動きが起きている。

## 民間などの研究助成金などによる研究活動

### • 寄附金

順益台湾原住民博物館研究賛助金 ————— 順益台湾原住民博物館

総合的な「食文化データベース」構築へ向けた基礎的研究（三島海雲記念財団学術研究奨励金）

————— 公益財団法人 三島海雲記念財団

国立民族学博物館活動助成金 ————— 佐々木史郎

## 2-4 研究成果の公開

### 刊行物

#### ●国立民族学博物館研究報告

41巻1号（2016年8月31日発行）

##### • 論文

レプリカの天女様のゆくえ——バリ島天女の舞トパン・レゴンにおける仮面の複製 ————— 吉田ゆか子

##### • 研究ノート

エチオピアの音楽職能集団アズマリの職能機能についての考察 ————— 川瀬 慈

##### • 資料

高齢認知症者のエイジング・イン・プレイスに向けた包摂的活動——アメリカ合衆国における「ブリッジ」のメモリーケアを中心に ————— 鈴木七美

41巻2号（2016年3月10日発行）

##### • 論文

Nominal Echo-Formations in Northern Pakistan ————— Noboru Yoshioka

##### • 研究ノート

敦煌莫高窟の西魏代における石窟空間構成——千仏図の描写設計を中心として ————— 末森 薫

##### • 資料

Temporary Exhibition of Khachkars: The Story of Armenian Cross Stones ————— Gevorg Orbelyan

41巻3号（2016年3月21日発行）

##### • 論文

モノを通じた信仰——インド・メーワール地方の神霊信仰における身体感応的な宗教実践とその変容

————— 三尾 稔

##### • 研究ノート

資本主義批判としてのアート——オアハカ州のASAROを事例として ————— 山越英嗣

##### • 資料

Reconsidering of the Meaning of “Children Are Reared by Society as a Whole”:

Focusing on the Practices of Two Villages in Twentieth Century Japan ————— Yoko Taniguchi

41巻4号（2016年3月30日発行）

##### • 研究ノート

Materializing Memories of Disasters: Individual Experiences in Conflict Concerning Disaster Remains in the Affected Regions of the Great East Japan Earthquake and Tsunami ————— Isao Hayashi

本館展示の新構築とその心——40年ぶりの改変をおえて ————— 須藤健一

## ● Senri Ethnological Studies

No.93 (2016年8月31日発行)

Takako Yamada, Toko Fujimoto (eds.) *Migration and the Remaking of Ethnic/Micro-Regional Connectedness.*

No.94 (2016年12月7日発行)

Kazunobu Ikeya, Robert K. Hitchcock (eds.) *Hunter-Gatherers and their Neighbors in Asia, Africa, and South America*

## ● Senri Ethnological Reports (国立民族学博物館調査報告)

No.137 (2016年9月20日発行)

伊藤敦規編『伝統知、記憶、情報、イメージの再収集と共有——民族誌資料を用いた協働カタログ制作の課題と展望』

No.138 (2016年12月16日発行)

上羽陽子・中牧弘允・中山京子・藤原孝章・森茂岳雄編『学校と博物館でつくる国際理解教育のワークショップ』

No.139 (2017年2月22日発行)

飯田卓・朝倉敏夫編『財団法人日本民族学協会 附属民族学博物館 (保谷民博) 旧蔵資料の研究』

No.140 (2017年3月13日発行)

伊藤敦規編『国立民族学博物館収蔵「ホビ製」木彫人形資料熟覧——ソースコミュニティと博物館資料との「再会」1』

No.141 (2017年3月30日発行)

鈴木七美編『アーミッシュたちの生き方——エイジ・フレンドリー・コミュニティの探求』

## ● 民博通信

No.153 (2016年6月30日発行)

評論・展望 無形文化遺産の継承における「オーセンティックな変更・変容」 飯田 卓

No.154 (2016年9月30日発行)

評論・展望 新たな民博の研究に向けて 西尾哲夫・池谷和信・野林厚志

No.155 (2016年12月26日発行)

評論・展望 手話言語学が拓くコトバの研究の未来 菊澤律子

No.156 (2017年3月25日発行)

評論・展望 北東アジア地域研究の新しい地平——人やものの移動からみた自然・文化・文明 池谷和信

## ● 研究年報2015 (2017年2月15日発行)

## ● 外部出版

Naoko Sonoda (ed.) *New Horizons for Asian Museums and Museology.* Springer Singapore (2016年7月21日刊行)

岸上伸啓編『贈与論再考——人間はなぜ他者に与えるのか』臨川書店 (2016年7月31日刊行)

西尾哲夫・水野信男変『中東世界の音楽文化——うまれかわる伝統』スタイルノート (2016年9月28日刊行)

Akira Saito y Claudia Rosas Lauro (eds.) *Reducciones: la concentración forzada de las poblaciones indígenas en el Virreinato del Perú.* 教皇庁立ペルーカトリカ大学出版会 (2017年2月28日刊行)

池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』東京大学出版会 (2017年3月21日刊行)

信田敏宏・宇田川妙子・白川千尋編『グローバル支援の人類学——変貌する NGO・市民活動の現場から』昭和堂  
(2017年3月31日刊行)

#### ●共同研究の成果

廣瀬浩二郎編著『ひとが優しい博物館——ユニバーサル・ミュージアムの新展開』青弓社、2016年。

\*共同研究「触文化に関する人類学的研究——博物館を活用した“手学問”理論の構築」(2012～2014年度)

池谷和信編『狩猟採集民からみた地球環境史——自然・隣人・文明との共生』東京大学出版会、2017年。

\*共同研究「熱帯の『狩猟採集民』に関する環境史的研究——アジア・アフリカ・南アメリカの比較から」(2012～2014年度)

古谷嘉章・關 雄二・佐々木重洋編『物質性の人類学——世界は物質の流れの中にある』同成社、2017年。

\*共同研究「物質性の人類学(物性・感覚性・存在論を焦点として)」(2011～2014年度)

信田敏宏・宇田川妙子・白川千尋編『グローバル支援の人類学——変貌する NGO・市民活動の現場から』昭和堂、2017年。

\*共同研究「NGO 活動の現場に関する人類学的研究——グローバル支援の時代における新たな関係性への視座」(2011～2014年度)

## 国立民族学博物館学術情報リポジトリ

「みんぱくりポジトリ」は、一般公開後7年が経過し、リポジトリシステムを JAIRO Cloud (共用リポジトリサービス)に移行後1年以上たったが、順調に登録・公開を進めている。

2017年3月末時点で公開コンテンツ数は4,458件である。2016年度に新しく公開したコンテンツ数は253件であった。月平均ダウンロード数は17,691回と広く利用に供されている。

2016年7月に「国立民族学博物館学術情報リポジトリ運用指針」を見直し、研究成果の出版として館内出版物の『民博通信』を2017年度から恒常的に登録すること、職員は館内出版物に関して著作物利用許諾書を一度提出するのみとする包括同意を行うことを決定した。また、英文による論文検索を充実させるため、既にリポジトリに登録されている『国立民族学博物館研究報告』掲載の論文について「タイトル」「著者名」等に英語表記をつける作業を行う計画を立てている。

## 学術講演会

### ●みんぱく公開講演会

「私たち人類はどこへ行くのか? スイカで踊る、クジラを祭る——生き物と人 共生の風景」

実施日 2016年11月10日

場 所 日経ホール (東京)

共 催 日本経済新聞社

参加者 402人

講演1 「生き物の地球から人間中心の世界へ」

講 師 遠藤秀紀 (東京大学総合研究博物館教授、作家)

内 容 地球の歴史にとある時間感覚を持ち込もう。大ざっぱに言って過去5億年が多様な生き物たちの生きてきた時間だ。他方で、人類は二本足で歩き出して500万年。ホモ・サピエンスは20万年。家畜を手にして1万年。文明などたかだか5000年である。一瞬にして傲慢なまでに支配者面を振る舞うに至ったこの生き物の正体は何か、考えてみた。

講演2 「現代文明からみた生き物——クジラなどの野生動物の利用と保護をめぐる」

講 師 岸上伸啓

内 容 人類は地球環境の中で生き抜くために、クジラやアザラシなど野生生物を食料や道具の原材料として利用してきた。ところが21世紀以降の文明社会では人類と野生生物の関係が、利用から保護へと大きく変わりつつある。クジラやアザラシなど野生生物の利用と保護の事例に基づいて人類と生き物の共生のあ



り方について考えた。

**講演3 「野生と文化からみた生き物——栽培化や家畜化が変えた野生の風景」**

**講師** 池谷和信

**内容** 野生スイカは、数千年前にアフリカで栽培化されてその後世界中に広まった。そして現在、育種が進められ種が産業化され文明のスイカになった。一方で現在、アフリカスイカのアミノ酸（シトルリン）が健康のために注目されている。野生、文化、文明と展開する人類の社会進化の考え方は正しいのか。家畜や栽培植物の利用と保護に焦点を当てて考えた。

**パネルディスカッション**

遠藤秀紀×岸上伸啓×池谷和信

**司会** 野林厚志

**内容** 1980年代以降、地球温暖化や生物多様性の喪失など、世界的に環境問題が注目されてきた。一方で私たちは、文明のなかにどっぷりとつかって経済中心の生活を送り、自然との関係の破綻、食糧の供給不足、心の問題などがかかえている。ここでは、生き物と人との新しいかかわり方を紹介することとおして、21世紀に直面している生き物・人関係をめぐる諸課題の現況とその未来について議論した。生き物の多様性は必要であるのか否か、保護と開発の両方の実現は可能であるのか、生き物と人の共生について考えた。

**「恵みの水、災いの水——川、湖、海」**

**実施日** 2017年3月21日

**場所** オーバルホール（大阪）

**共催** 毎日新聞社

**参加者** 238人

**講演1 「東日本大震災から学ぶ——豊かな暮らしのために」**

**講師** 竹沢尚一郎

**内容** 東日本大震災は三陸各地に甚大な被害をもたらしたが、この地域の人びとが生活の糧としてきたのは海の恵みであった。沿岸の縄文式遺跡の多くが津波の被害を受けていないという事実は、海のもたらす恵みと破壊が古くから理解されていたことを物語っている。海と共に生きるすべをどのように再発見していくか、さまざまな事例から考えた。

**講演2 「『遠い水』『近い水』——琵琶湖から生存可能な関西を構想する」**

**講師** 嘉田由紀子（びわこ成蹊スポーツ大学 学長）

**内容** 「水と人間のかかわり」を、琵琶湖を中心に、アメリカの五大湖周辺、ヨーロッパのレマン湖、アフリカのマラウイ湖などと比較研究。わかった事はかかわりの構図には三つの層：「自然」「文化」「文明」が重層化しているということだ。日本の自然・文化的に「近い水」が、文明的な「遠い水」になった今、改めて関西での「近い水」の再生を訴え、災害多発日本の生存可能性を提案した。

**パネルディスカッション**

竹沢尚一郎×嘉田由紀子

**司会** 池谷和信

**内容** 最近、異常気象などのために日本列島では、これまでにない地域での水害が多発している。同時に、夏場になると都市での水不足が生じることが多くなっている。私たちの暮らしのなかで、水とのかかわりは最も重要な課題の一つである。今回の会では、津波、水害、干ばつなどの水にかかわる災害への人の対応を研究および政策実践されてこられた講演者が、恵（めぐ）みの水、災（わざわ）いの水という視点から、人と水との多様なかかわりかたとこれからの課題を論じた。私たちにとって「本当の豊かな暮らしとは何か」について考える機会になったら幸いである。

## 2-5 学会開催

### 学会開催

2016年11月3日 非営利法人研究学会 NPO 法人部会

開催場所：国立民族学博物館

2016年12月3日～12月4日 第21回古代アメリカ学会研究大会・総会

開催場所：国立民族学博物館

2016年12月4日 第6回アジア食文化会議「食文化の交流——過去・現在・未来」

開催場所：立命館大学草津キャンパス

2017年2月19日 Colloquium “Thinking about care as social organization: A Discussion with T. Thelen and K. Buadaeng”

開催場所：国立民族学博物館

## 2-6 研究員制度

### 外来研究員

AH KEN ETEUATI Ailini (ア ケン エトゥアティ アイリニ) サモア 教育・スポーツ・文化省博物館上級スタッフ  
研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

ALFARAJAT Rami Mohammed Akeela (アルファラド ラミ モハメド アキーラ) ヨルダン ペトラ開発観光局 (PDTRA) 観光部広報担当

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

ARCE TORRES Emma Susana (アチェ トレス エマ スサナ) ペルー 文化省イカ州博物館館長

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

CARRILLO HERRERIAS Magdalena Sofia (カリリョ エレリアス マグダレナ ソフィア) メキシコ エクス・テレーザ国立現代美術センター副センター長

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

DAHL SHAYNE (ドール シェーン) カナダ トロント大学大学院人類学部博士課程

研究課題：東日本大震災発生以降の山岳宗教と巡礼——山形県出羽三山信仰をめぐって

ERTL, John (アートル ジョン) 米国 金沢大学外国語教育研究センター／国際文化資源学研究センター准教授

研究課題：考古学の民族誌——考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究

HASSANZADEH Yousef (ハッサンザデ ユセフ) イラン イラン国立博物館出版部部長

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

HEO MOON KYUNG 許 文卿 (ホ ムンキョン) 韓国 全州大学校文化観光研究所研究教授

研究課題：食と観光に関する研究——朝鮮半島を中心として

IBRAHIM Mariem Danial-boktor (イブラヒム マリエム ダニエルボクトール) エジプト エジプト考古庁コプト博物館教育部キュレレーター

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

KIM Satbyul 金 セッピョル (キム セッピョル) 韓国 総合研究大学院大学文化科学研究科 博士後期課程単位修得退学/蘭田学園女子大学非常勤講師/関西大学非常勤講師/宮崎公立大学非常勤講師

研究課題：韓国における国家主導型の自然葬の形成に関する人類学的研究

KIM, Wolduk 金 月徳 (キム ウォルドク) 韓国 全北大学校人文大学国語国文学科非常勤講師

研究課題：民俗文化の解釈と変容についての談論の検討

KOBELYAN Khachatur (コベリアン ハチャトゥール) アルメニア セルゲイ・パラジャーノフ博物館展示普及部部長

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

KUNIK, Damien Benoit (クニク デミアン ベヌア) スイス ジュネーブ大学文学部東洋学科 専任助教

研究課題：日本とフランス文化圏における物質文化研究の比較史——過去・現在・未来

MANSOUR Mohammed (マンスール モハメド) パレスチナ 観光遺跡庁博物館部キュレーター

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

MARZEC AGNIESZKA (マジェッツ アグネシカ) ポーランド

研究課題：異文化接触場面におけるコミュニケーション・ストラテジー——在日外国人を中心に

MOSCO JAIMES Alejandra (モスコ ジェイムス アレハンドラ) メキシコ 国立保存・修復・博物館学学校博物館学大学院プログラム研究教授

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

RJOOB Jaber A. J. (ルジューブ ジャベル エイ ジェイ) パレスチナ 観光遺跡庁遺産保護部調査官 (Al Badd Museum 担当)

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

SAUCEDO SEGAMI Daniel Dante (サウセド セガミ ダニエル ダンテ) ペルー 日本学術振興会外国人特別研究員 (一般)

研究課題：現代ペルーにおける文化遺産の活用に関する文化人類学研究

SCHROEDER, Anja (シュローダー アニヤ) ドイツ カイザースラウテルン大学戦略マネジメント学科PD/日本学術振興会外国人特別研究員 (欧米短期)

研究課題：巨大災害の経験を生かしたリスク管理における空間マネジメント

SIHACHAK Vilayvanh (シハチャク ヴィライヴァン) ラオス ラオス情報文化観光省ラオス国立博物館副館長

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

SOLIMAN Fatma Ahmed (ソリマン ファトマ アハメド) エジプト エジプト考古庁大エジプト博物館 (GEM) 教育センター・子供博物館キュレーター/ツタンカーメン王展示担当メンバー

研究課題：「博物館とコミュニティ開発」コース

SU RI NA 苏日娜 (ソリナー) 中国 中央民族大学蒙古语言文学系博士後期課程

研究課題：内モンゴル草原遊牧文化の変遷とその背景分析——梅棹忠夫の調査から見る内モンゴル遊牧文化の70年

SUN NA 孫 娜 (ソン ナ) 中国 厦門大学人文学院人類学と民族学科博士後期課程

研究課題：中日漢語の対照研究と歴史研究

TANG SHAOLING 湯 紹玲 (トウ ショウレイ) 中国

研究課題：日本の盆行事と中国の中元節の比較研究

Wu Tianyue 吳 天躍 (ゴ テンヤク) 中国 中国中央美术学院人文学院博士院生

研究課題：仏教的文化遺産保護に関する日中比較研究——景観人類学の視点から

YAMADA, Naomi 山田 ナオミ (やまだ なおみ) 米国 中央大学総合政策学部非常勤講師

研究課題：中国の教育現場における民族起源の表象に関する教育人類学的研究

Yimin 伊敏 (イミン) 中国 滋賀県立大学大学院人間文化科学研究科博士後期課程単位取得退学

研究課題：中国における少数民族言語地名の漢字表記にみる歴史と文化——内モンゴル地域におけるモンゴル語と満洲語の地名を中心に

ZHAO Furong 趙 芙蓉 (チョウ フヨウ) 中国

研究課題：中央・北アジア展示の電子ガイドコンテンツの製作——モンゴル地域の宗教文化を中心に

ZONG Xiaolian 宗 曉蓮 (ソウ ギョウレン) 中国 福岡女子大学国際文理学部非常勤講師

研究課題：中国雲南省麗江市における「世界遺産テーマパーク」開園以降の文化の資源化をめぐる研究

相島 葉月 (あいしま はつき) 日本 マンチェスター大学人文学部・講師 (現代イスラーム)

研究課題：現代エジプトのオルタナティブ・モダニティとしての空手実践に関する社会人類学的研究

荒田 恵 (あらた めぐみ) 日本 関西大学政策創造学部非常勤講師

研究課題：アンデス形成期の祭祀遺跡における工芸品製作

安念 真衣子 (あんねん まいこ) 日本 日本学術振興会特別研究員

研究課題：ネパールにおける教育の市場化と生活世界の変容——貧困層の親族・移動・暴力に着目して

飯田 淳子 (いいだ じゅんこ) 日本 川崎医療福祉大学医療福祉学部准教授

研究課題：医療者向け医療人類学教育の検討——保健医療福祉専門職との協働

市野澤 潤平 (いちのざわ じゅんぺい) 日本 宮城学院女子大学学芸学部准教授

研究課題：確率的事象と不確実性の人類学——「リスク社会」化に抗する世界像の描出

伊藤 渚 (いとう なぎさ) 日本 総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程単位修得退学

研究課題：ラオス北部サムヌア・サムタイ地方の女性による織りとその変容

伊東 未来 (いとう みく) 日本 大阪大学人間科学部非常勤講師／関西大学社会学部非常勤講師／龍谷大学社会学部非常勤講師／摂南大学外国語学部非常勤講師

研究課題：西アフリカにおける交易都市の歴史人類学的研究

井家 晴子 (いのいえ はるこ) 日本 アムステルダム大学客員研究員

研究課題：妊娠・出産の異常とその対処法に関する文化間比較研究

今中 崇文 (いまなか たかふみ) 日本 大阪人間科学大学人間科学部非常勤講師／摂南大学外国語学部・看護学部非常勤講師／佛教大学歴史学部非常勤講師

研究課題：中国陝西省西安市における回族の宗教指導者の変遷をめぐる人類学的研究

浮ヶ谷 幸代 (うきがや さちよ) 日本 相模女子大学人間社会学部教授

研究課題：現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究



宇田川 彩（うだがわ あや）日本 東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位修得退学

研究課題：アルゼンチンとイスラエルを中心としたユダヤ人類学の展開

内田 修一（うちだ しゅういち）日本 総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程単位修得退学

研究課題：都市的環境におけるソングイの精霊憑依の実践

梅津 綾子（うめつ あやこ）日本 南山大学人類学研究所非常勤研究員

研究課題：親子・家族概念の再考——ナイジェリアの里親養育と日本のセクシュアル・マイノリティの家族を事例に

大石 高典（おおいし たかのり）日本 東京外国語大学世界言語社会教育センター特任講師

研究課題：消費からみた狩猟研究の新展開——野生獣肉の流通と食文化をめぐる応用人類学的研究

太田 好信（おおた よしのぶ）日本 九州大学大学院比較社会文化研究院教授

研究課題：政治的分類——被支配者の視点からエスニシティ・人種を再考する

大場 千景（おおば ちかげ）日本 日本学術振興会特別研究員 PD（大阪府立大学）

研究課題：南北エチオピア、ライヤにおける社会変動と歴史認識の動態

岡田 朋子（おかだ ともこ）日本 筑波大学大学院人文社会科学研究所歴史・人類学専攻一貫制博士課程修了

研究課題：インドにおける名づけと名乗りに関する人類学的研究

岡田 浩樹（おかだ ひろき）日本 神戸大学大学院国際文化学研究科准教授

研究課題：宇宙開発に関する文化人類学からの接近

岡本 尚子（おかもと なおこ）日本 国際基督教大学高等学校教務員

研究課題：『千一夜物語』仏語訳者マルドリユス再考——〈遺贈コレクション〉の分析を中心に

奥村 京子（おくむら きょうこ）日本 大阪大学大学院文学研究科博士後期課程単位修得退学

研究課題：1980年代以降のジェルジ・リゲティ作品における異文化表象

小尾 淳（おび じゅん）日本 大東文化大学国際関係学部研究補助員

研究課題：インドの宗教歌謡「キールタン」の環流とソーシャルメディアの役割

鏡味 治也（かがみ はるや）日本 金沢大学人間社会研究域人間科学系教授

研究課題：生活用品から見たライフスタイルの近代化とその国別差異の研究

金田 純平（かねだ じゅんぺい）日本 神戸大学大学院国際文化学研究科非常勤講師

研究課題：笑い話に注目した日本語ナラティブの「型」と「技」の地域比較

金谷 美和（かねたに みわ）日本 京都大学地球環境学堂三才学林研究員／大阪芸術大学芸術学部非常勤講師

研究課題：インド災害後のローカル文化再編におけるコミュニティ資源としての「手工芸」の意義

川田 牧人（かわだ まきと）日本 成城大学文芸学部教授

研究課題：呪術的实践 = 知の現代的位相——他の諸実践 = 知との関係性に着目して

神田 每実（かんだ つねみ）日本 愛知県立芸術大学美術学部教授

研究課題：造形美術様式と風土の関係

工藤 由美（くどう ゆみ）日本 東邦大学看護学部看護学科非常勤講師

研究課題：チリの先住民マプーチェによる文化復興運動に関する人類学的研究

- 窪田 幸子（くぼた さちこ）日本 神戸大学大学院国際文化科学研究科教授  
研究課題：表象のポリティックス-グローバル世界における先住民／少数者を焦点に
- 児玉 茂昭（こだま しげあき）日本 アジア太平洋無形文化遺産研究センターアソシエイトフェロー  
研究課題：学術コーディネートを通してみる手話の言語性と手話話者の当事者性への理解
- 呉屋 淳子（ごや じゅんこ）日本 山形大学教育開発連携支援センター講師  
研究課題：高等教育機関における伝統芸能の教授に関する研究
- 是澤 博昭（これさわ ひろあき）日本 大妻女子大学家政学部准教授  
研究課題：モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究——国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に
- 近藤 宏（こんどう ひろし）日本 立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員  
研究課題：20世紀における南米低地地域の人類学の発展と先住民権の展開
- 齋藤 剛（さいとう つよし）日本 神戸大学国際文化科学研究科准教授  
研究課題：個-世界論：中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム
- 杉島 敬志（すぎしま たかし）日本 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授  
研究課題：エージェンシーの定立と作用——コミュニケーションから構想する次世代人類学の展望
- 杉本 敦（すぎもと あつし）日本 東北学院大学文学部・法学部非常勤講師／盛岡大学文学部非常勤講師  
研究課題：EU農政下におけるルーマニア牧畜の再編に関する文化人類学的研究
- 鈴木 博之（すずき ひろゆき）日本 Laboratoire Parole et Langage (CNRS) PD 非常勤研究員  
研究課題：言語多様性の記述を通して見る中国雲南省チベット語の方言形成の研究
- 高橋 晴子（たかはし はるこ）日本 大阪大学コミュニケーションデザイン・センター招へい教授  
研究課題：服装・身装文化デジタルアーカイブ
- 高村 美也子（たかむら みやこ）日本 南山大学人類学研究所非常勤研究員  
研究課題：スワヒリ地域におけるヤシ科植物の利用についての環境人類学的研究
- 田中 鉄也（たなか てつや）日本 関西大学大学院文学研究科博士課程後期課程修了  
研究課題：現代インドにおける公益信託と信仰に基づいた市民活動の政治学
- 玉山 ともよ（たまやま ともよ）日本 南山大学人類学研究所非常勤研究員  
研究課題：北米先住民族聖地での地下資源開発をめぐる国際的な「協働」のありかたについての研究
- 辻 輝之（つじ てるゆき）日本 The University of the West Indies Visiting Fellow  
研究課題：多宗教共存とエスニシティ共生——旧英領カリブ社会における民族紛争抑制のメカニズム
- 辻本 香子（つじもと きょうこ）日本 総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程単位修得退学  
研究課題：東アジア地域におけるリズム楽器を使用したパフォーマンスの研究
- 中田 梓音（なかた しおん）日本 総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程単位修得退学  
研究課題：対人関係の構築過程における言語コミュニケーション研究

長谷 千代子（ながたに ちよこ）日本 九州大学大学院比較社会文化研究院講師

研究課題：宗教人類学の再創造——滲出する宗教性と現代社会

中野 歩美（なかの あゆみ）日本 関西学院大学大学院社会学研究科博士課程単位修得満期退学

研究課題：インド・タール砂漠地域における定住後の移動民に関する人類学的研究

中原 聖乃（なかはら さとえ）日本 中京大学社会科学研究所准教授

研究課題：放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究

中村 真里絵（なかむら まりえ）日本 岡山理科大学非常勤講師／四條畷学園短期大学 非常勤講師

研究課題：世界文化遺産バンチェン遺跡と地域社会——住民の生活史の視点から

中村 亮（なかむら りょう）日本 福井県里山里海湖研究所研究員

研究課題：インド洋西海域世界の比較研究：資源利用と管理にみる多民族共存と環境・生活影響評価

西本 太（にしもと ふとし）日本 長崎大学大学院国際健康開発研究科助教

研究課題：ラオス農村社会の人口変化に関する人類学研究

野澤 豊一（のざわ とよいち）日本 富山大学人文学部准教授

研究課題：音楽する身体間の相互作用を捉える：ミュージッキングの学際的研究

登 久希子（のほり くきこ）日本

研究課題：社会をつくる芸術——「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」の人類学的研究

萩原 英子（はぎはら えいこ）日本 大阪芸術大学大学院芸術研究科博士課程（後期）修了

研究課題：喫茶文化にみられる和様化と日常性の研究

長谷川 清（はせがわ きよし）日本 文教大学文学部教授

研究課題：資源化される「歴史」——中国南部諸民族の分析から

比嘉 夏子（ひが なつこ）日本 京都中央看護保健大学校非常勤講師

研究課題：ふるまいの同期と社会空間の生成：オセアニアにおける相互行為プロセス

平田 晶子（ひらた あきこ）日本 日本学術振興会特別研究員（京都文教大学総合社会学部）

研究課題：身体技法をめぐる科学技術の利用に関する学際的研究

福岡 まどか（ふくおか まどか）日本 大阪大学大学院人間科学研究科准教授

研究課題：東南アジアのポピュラーカルチャー——アイデンティティ、国家、グローバル化

藤倉 康子（ふじくら やすこ）日本 The New School for Social Research (USA) Ph.D.

研究課題：ネパールにおける移動の記憶——共同体の再編と家族形態の変容

堀田 あゆみ（ほった あゆみ）日本

研究課題：モンゴル遊牧社会における情報の人類学的研究

松岡 格（まつおか ただす）日本 獨協大学国際教養学部准教授

研究課題：文化実践としての命名——台湾原住民族の姓名についての研究

松岡 葉月（まつおか はつき）日本

研究課題：全天候ドームスクリーンを活用した文理融合的アプローチによるデジタル科学映像の研究と教育普及

松田 有紀子（まつだ ゆきこ）日本 日本学術振興会特別研究員  
研究課題：花街の担い手コミュニティの日常実践に関する歴史人類学的研究

松平 勇二（まつひら ゆうじ）日本 日本学術振興会特別研究員  
研究課題：シヨナ音楽文化と憑依儀礼の政治・宗教人類学的研究

盛 恵子（もり けいこ）日本  
研究課題：セネガル、ニアセン教団における境界の超越とアフリカ諸国への拡大の比較研究

森田 剛光（もりた たけみつ）日本  
研究課題：滞日ネパール人の生活実践と労働動態の研究

矢野原 佑史（やのはら ゆうし）日本 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士後期課程単位修得退学  
研究課題：知識・経験・想像の共有を目的とした映像人類学

山崎 浩平（やまざき こうへい）日本  
研究課題：インド・ヒジュラ社会における共同性と移動の人類学研究

山本 文子（やまもと あやこ）日本 和歌山県立医科大学保健看護学部非常勤講師  
研究課題：現代ミャンマー都市部における精霊信仰の民族誌的研究

吉江 貴文（よしえ たかふみ）日本 広島市立大学国際学部准教授  
研究課題：近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開

吉村 健司（よしむら けんじ）日本 総合研究大学院大学文化科学研究科博士後期課程単位修得退学  
研究課題：沖縄県本部町におけるカツオー一本釣漁の存立基盤と生産技術体制の変容

米山 知子（よねやま ともこ）日本  
研究課題：マイノリティーの美的パフォーマンス実践の場としての映像——トルコのセマーを事例として

## 特別共同利用研究員

本館は、大学共同利用機関として研究活動を展開すると同時に、大学院教育の一環として、全国の国公立大学の博士後期課程に在籍する学生を、当該大学院生の所属する大学院研究科からの委託を受けて特別共同利用研究員として受け入れ、一定の期間、特定の研究課題に関して研究指導をおこなっている。

特別共同利用研究員は、各々の特定の研究課題に応じて指導教員から研究指導を受け、本館の諸施設を利用し研究を遂行するだけでなく、本館に設置されている、総合研究大学院大学文化科学研究科の講義を受けることができる。

2016年度は、国立大学2人、公立大学4人、計6人の大学院生を受け入れた。





## ●標本資料の収集・利用状況

### • 2017年3月31日現在の収蔵資料数

海外資料／178,864点 (未登録資料含む)      国内資料／164,717点 (未登録資料含む)      総点数／343,581点 (未登録資料含む)

### • 大学・博物館等への貸し出し

総点数／691点

## ●映像音響資料の収集・利用状況

### • 取材

寺田吉孝 在日コリアン音楽の現状

埼玉県桶川市 (2016年12月9日)

川瀬 慈 地域社会の伝承歌の記録、継承、創造

岐阜県郡上市 (2016年6月4日～6月5日、6月10日～6月11日、8月27日～8月28日)、岐阜県揖斐郡 (2016年8月6日～8月7日、9月20日、11月16日)、岐阜県本巣市 (2016年11月15日)、徳島県三好市 (2016年10月10日～10月11日、11月27日～11月29日、2017年1月23日～1月24日、2月26日～2月28日)、岡山県倉敷市 (2016年10月9日)、愛知県名古屋市 (2017年3月6日～3月8日)

### • 2017年3月現在の収蔵資料数

映像資料／8,168点      音響資料／62,651点      総点数／70,819点

### • 資料の利用

利用総件数／121件 (内、大学38件)      資料利用総点数 542点 (内、大学205点)

#### 館内利用など

利用件数／64件      資料利用点数／257点

#### 特別利用 (館外での上映・試聴など)

利用件数／57件      資料利用点数／285点

## 文献図書資料の収集・整理・利用状況

### ●2016年度図書室の活動

#### 1. 利用者サービス

- 1) 教員からの要望で研究に資するため、館内貸出冊数を制限なしと規定改正した。
- 2) 万博記念公園入園時間や博物館入館時間に鑑み、一般利用者の入室時間を16:30までと定めた。

#### 2. 利用者講習会の開催——教育・研究支援

- 1) 外来研究員オリエンテーション
- 2) 総研大新入生ガイダンス
- 3) 博物館学コース (JICA) オリエンテーション
- 4) 国立国会図書館職員研修
- 5) 若手研究者奨励セミナー 等  
\*随時受付のツアーも、実施している。

#### 3. 資料整備関係

- 1) 遡及入力を引き続き実施し、図書約1,700冊、雑誌174タイトル、マイクロ資料約5,570点 (北米学位論文約5,000点、新聞雑誌86タイトル570点) を登録した。図書の遡及入力はほぼ完了した。
- 2) 昨年度より5年計画で開始した蔵書実査 (4年目) として、書庫5層および書庫4層の一部、探究ひろばなどの別置図書も含め、234,915冊の蔵書実査を行った。
- 3) 研究の重要な情報源となり得るため、図書のカバー装備を開始した。

#### 4. 施設整備

- 1) 厚みのあるブックエンドを薄型のL字ブックエンドと交換し、書庫狭隘化の軽減を行った。
- 2) 請求記号のインデックスを見直し、代本板からカードケース方式に変更してわかりやすい表示とするとともに、書庫狭隘化の軽減となった。
- 3) 蔵書の増加率に従い書庫3層の空きを見直し、今後の資料増加に備え、再配架を行った。

- 4) 書庫2・4・5層の電灯をLED化および人感センサーにした。  
 5) マイクロリーダー本体1台および27インチ縦型モニター、A3対応プリンターを整備した。  
 6) 書庫1層にてカビが発生したため資料の隔離、カビの除去および空気清浄機を設置し対処を行った。データロガーを3台置き、定期的に温湿度を測る体制を整えた。

#### 5. 広報、社会貢献その他

- 1) 「みんぱく図書室ニュース」を月に一度発行し、図書室の情報提供を行った。  
 2) 中学生の職場体験学習受入れ。  
 箕面市立止々呂美中学校 (2016年10月19日 2年生男子1名)  
 茨木市立豊川中学校 (2016年11月9日 2年生男子1名)  
 箕面市立第一中学校 (2016年11月18日 2年生男子2名)

#### ●2016年度新規受入数

日本語図書	2,233点	外国語図書	2,149点		
AV資料他	50点	製本雑誌	659点	合計	5,091点

#### ●2016年3月末現在の収蔵図書数

日本語図書	270,944点	外国語図書	399,113点	合計	670,057点
日本語雑誌	10,114種	外国語雑誌	6,913種	合計	17,027種
HRAF	385ファイル	HRAF原典(テキスト)	7,141冊		

#### ●利用状況(2016年度)

入室者	全体	11,113人
	館外者	1,659人
時間外入室者		130人
うち日曜、祝日		43人
貸出	図書	11,783冊
	雑誌	539冊
うち館外貸出図書		3,129冊
HRAF利用受付		7件 (カウンター受付件数)

文献複写	受付	国内(うち謝絶)	1,451(212)件
		国外(うち謝絶)	37(25)件
		来室*	4,213件
	依頼	国内	251(16)件
国外		4(0)件	
現物貸借	受付	国内	659(34)件
		国内	447(12)件
	依頼	国内	4(0)件
		国外	4(0)件
事項調査	受付	34件	

\*うち大学等の機関1,380件

## 民族学資料共同利用窓口

本館の所蔵する民族学資料は多岐に渡り、館内外における諸分野の研究や教育、他の博物館への貸し付けなどを通して社会に還元し利用されるためには、各種問い合わせに効率よく対応する必要があった。そうした観点から、2006年度から「民族学資料共同利用窓口」が設置された。

2016年度の問い合わせ利用件数は、277件であった。

問い合わせ者別	(件)
教員(大学)	34
大学院生	7
大学生	5
教員(小・中・高)	6
学生(小・中・高)	2
博物館・美術館関係	19
図書館	6
教育・研究機関	2
マスコミ関係	9
会社・団体	45
一般	65
民博教職員	77
計	277

問い合わせ者の所属機関別	(件)	
公的機関	大学・大学図書館	47
	博物館・美術館	33
	小・中・高	9
	その他教育機関	0
	研究機関	1
	公共図書館	4
	地方公共団体	4
	各種団体	0
	民間	研究機関
会社	38	
団体	12	
個人	館外	65
	館内	63
	不明	0
計	277	

## 資料の利用目的

(件)

調査・研究	研究* <sup>1</sup>	72
	論文作成	7
	学習* <sup>2</sup>	3
	図書館から	4
	授業で利用	44
	その他	34
	小計	164
館内利用	刊行物作成	1
	館の事業	11
	参考資料	1
	資料の複製	9
	小計	22

業務用	展示用	36
	番組制作	13
	出版物作製	19
	参考資料	15
	入手方法	2
	その他	0
	小計	85
その他	寄贈申出	4
	その他	2
	小計	6
合計		277

\* 1 大学生以上の調査を「研究」とする

\* 2 高校生以下の調査を「学習」とする

## 民族学研究アーカイブズの構築事業

本館には発足以来、民族学者の研究ノートや原稿、フィールドワークで生成、収集された映像・録音記録など、さまざまな資料が蓄積されている。2005年、民博創設30年を迎えるにあたり、民族学研究の拠点である本館が備えるべき機能の一つとして、アーカイブズ管理体制整備の必要性が検討され、かつ、これらの資料・情報を公開し、研究・教育での共同利用や社会還元に供してその価値を再認識しようと、「民族学研究アーカイブズ」の構築事業が開始された。

2007年度に、民族学研究アーカイブズ Home Page を立ち上げ、これまで青木文教、泉靖一、岩本公夫、梅棹忠夫、大内青琥、桂米之助、鹿野忠雄、菊沢季生、杉浦健一、土方久功、馬淵東一、及び「日本文化の地域類型研究会」アーカイブの資料目録の作成等を行い、その成果を順次公開している。

2016年度は、昨年度に引き続き資料の整理作業を行い、沖守弘・インド民族文化資料アーカイブの目録を Web 公開した。また、資料の受入れの流れについて現状に合うように整理検討を行った。

目録を公開し、利用に供しているアーカイブは13件である。2016年度の利用状況は閲覧29件、特別利用11件であった。

## データベースの作成・利用状況

## ●館外公開しているデータベース

## • 標本資料目録

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。ほぼすべての資料について、標本名、地域、民族、寸法・重量、受入年度などの基本情報を収録。

2015年度までの作成件数	279,540
2016年度の作成件数	3,735
2016年度のアクセス件数	61,072

## • 標本資料詳細情報

本館が所蔵する標本資料（生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など）の情報（画像あり）。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。

2015年度までの作成件数	61,578
2016年度の作成件数	6,441
2016年度のアクセス件数	7,077

## • 標本資料記事索引

本館関連出版物から所蔵標本資料の解説部分を抽出し、その書誌事項を標本資料別に整理した情報。

2015年度までの作成件数	58,949
---------------	--------



- |               |       |
|---------------|-------|
| 2016年度の作成件数   | 1,524 |
| 2016年度のアクセス件数 | 2,888 |
- 韓国生活財
 

ソウルの李さん一家の生活財を網羅した情報。アパートの中にあったすべての物について、配置と入手方法、物にまつわる家族の思い出を記録（画像あり）。

2015年度までの作成件数	7,827
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	3,190
  - ジョージ・ブラウン・コレクション（日本語版、英語版）
 

宣教師であり神学博士でもあったジョージ・ブラウン氏が19世紀末から20世紀初頭にかけて南太平洋諸島で収集し、現在、本館に収蔵されている民族誌資料の基本情報（画像あり）。

2015年度までの作成件数	2,992
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	2,992
  - 映像資料目録
 

本館が所蔵する映画フィルム、ビデオテープ、DVDなど映像資料の情報。

2015年度までの作成件数	8,009
2016年度の作成件数	159
2016年度のアクセス件数	5,348
  - ビデオテーク
 

本館展示場で提供しているビデオテーク番組の情報。番組をキーワードで検索したり、ビデオテークブースと同じメニューから探すことができる。

2015年度までの作成件数	740
2016年度の作成件数	27
2016年度のアクセス件数	5,555
  - 音楽・芸能の映像
 

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。映像は館内限定公開。

2015年度までの作成件数	849
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	302
  - 松尾三憲旧蔵絵葉書コレクション
 

松尾三憲（みのり）氏が、1919年から1923年までの海軍在職中に、訓練航海の途上訪れた現地で買い求めた絵葉書の情報（画像あり）。

2015年度までの作成件数	170
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	1,277
  - 京都大学学術調査隊写真コレクション
 

「京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊」（1955年）、「京都大学探検部トンガ王国調査隊」（1960年）、「京都大学アフリカ学術調査隊」（1961年～1967年）、および「第二次京都大学ヨーロッパ学術調査隊」（1969年）が撮影した写真の情報（画像あり）。

2015年度までの作成件数	22,316
2016年度の作成件数	45
2016年度のアクセス件数	7,946
  - 西太平洋およびインドおよびを中心とする海洋民族写真資料——大島襄二写真コレクション
 

大島襄二氏が、1967年から1991年にかけてアジアやオセアニアなどの調査で撮影した写真の情報（画像あり）。

2015年度までの作成件数	—
2016年度の作成件数	7,889
2016年度のアクセス件数	—

• アフリカ カメルーン民族誌写真集——端信行コレクション

端信行本館名誉教授が1969年から90年代にかけて行った、おもにアフリカ カメルーン共和国の民族学的調査で撮影した写真の情報（画像あり）。

2015年度までの作成件数	—
2016年度の作成件数	6,530
2016年度のアクセス件数	—

• 沖守弘インド写真（日本語版、英語版）

沖守弘氏が1970年代後半から20年あまりにわたりインド全域で撮影した、宗教祭礼・民俗画・芸能・生活文化に関する写真の情報（画像あり）。

2015年度までの作成件数	—
2016年度の作成件数	20,125
2016年度のアクセス件数	5,678

• ネパール写真（日本語版、英語版）

「西北ネパール学術探検隊」（1958年）に参加した高山龍三氏（当時大阪市立大学大学院生）らがネパールで撮影した写真、および、同隊が収集し、現在本館に収蔵されている標本資料の情報（画像あり）。

2015年度までの作成件数	3,879
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	3,817

• 音響資料目録

本館が所蔵するレコード、CD、テープなど音響資料の情報。

2015年度までの作成件数	62,651
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	1,471

• 音響資料曲目

本館が所蔵する音響資料について、音楽の曲単位、昔話の一文単位で収録した情報。

2015年度までの作成件数	351,802
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	646

• 図書・雑誌目録

本館が所蔵する図書・雑誌資料（マイクロフィルムなどを含む）の書誌・所蔵情報。

2015年度までの作成件数	645,663
2016年度の作成件数	4,961
2016年度のアクセス件数	400,215

• 梅棹忠夫著作目録（1934～）

梅棹忠夫本館初代館長の論文・著書から本の帯の推薦文まで、あらゆる著作を網羅した目録情報。

2015年度までの作成件数	6,594
2016年度の作成件数	49
2016年度のアクセス件数	4,685

• 中西コレクション——世界の文字資料——

世界のさまざまな文字で書かれた図書・新聞・手稿・標本などの資料に関する分析情報と書誌情報、文字サンプルの画像。これらの資料は、中西印刷株式会社・故中西亮氏が世界各地で収集。

2015年度までの作成件数	2,729
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	43,977

• 吉川「シュメール語辞書」

吉川守氏（広島大学名誉教授）が40年ほどの年月をかけて完成させた、シュメール語の研究ノート。親字33,450語をキーワードに検索・閲覧できる。

2015年度までの作成件数	33,450語（40,596頁）
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	400

- Talking Dictionary of Khinina-ang Bontok (ボントック語音声画像辞書)  
Lawrence A. Reid 氏 (ハワイ大学名誉教授) が編集した、フィリピン・ルソン島北部で話されるボントック語のギナン方言の辞書。語の派生関係、例文、音声・画像などのデータを結びつけたマルチメディア・データベース辞書。

2015年度までの作成件数	7,637
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	665
  - 日本昔話資料 (稲田浩二コレクション)  
稲田浩二氏 (当時京都女子大学教授) らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料 (446本のテープ・約190時間) の情報 (音声あり)。音声は館内限定公開。

2015年度までの作成件数	3,696
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	1,332
  - rGyalrongic Languages (ギャロン系諸語) [英語、中国語]  
長野泰彦本館名誉教授と Marielle Prins 博士が編集した、中国四川省の西北部で話されるギャロン系諸語のデータベース (音声あり)。81の方言ないし言語それぞれについて、425または1200の語彙項目と200文例を収録している。

2015年度までの作成件数	39,826語 (文例: 15,706件)
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	8,378
  - 衣服・アクセサリ  
本館が所蔵する衣服標本資料とアクセサリ標本資料の詳細分析情報、および関連フィールド写真の情報 (画像あり)。

2015年度までの作成件数	25,237
2016年度の作成件数	1,302
2016年度のアクセス件数	23,140
  - 身装文献  
身装文化に関する雑誌記事、図書の索引情報。1) 服装関連日本語雑誌記事 (カレント)、2) 服装関連日本語雑誌記事 (戦前編)、3) 服装関連外国語雑誌記事、4) 服装関連日本語図書、5) 服装関連外国語民族誌で構成。

2015年度までの作成件数	170,115
2016年度の作成件数	3,271
2016年度のアクセス件数	12,759
  - 近代日本の身装電子年表  
洋装がまだ日本に定着していなかった1868年 (明治元年) から1945年 (昭和20年) の日本を対象とした身装関連の電子年表。「事件」と「現況」、「その年の情景」、「回顧」、テキスト画像で構成される。当時の新聞記事と身装関連雑誌から情報を収録。

2015年度までの作成件数	10,049
2016年度の作成件数	1,500
2016年度のアクセス件数	1,370
  - 身装画像——近代日本の身装文化  
和装と洋装が拮抗していた期間である1868年 (明治元年) から1945年 (昭和20年) までの日本を対象とした身装関連の画像データベース。当時の新聞小説挿絵、写真、図書中の図版、ポスターなどから画像を収録。

2015年度までの作成件数	—
2016年度の作成件数	5,108
2016年度のアクセス件数	16,104
- 館内で利用できるデータベース
- 標本資料詳細情報 (館内専用)  
本館が所蔵する標本資料 (生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など) の情報 (画像あり)。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。

2015年度までの作成件数	264,404
2016年度の作成件数	25
2016年度のアクセス件数	39,060

• **カナダ先住民版画**

本館が所蔵する代表的なカナダ先住民版画の基本情報と解説（画像あり）。特別展「自然のこえ 命のかたち——カナダ先住民の生み出す美」（2009年）の展示資料を中心に収録。

2015年度までの作成件数	158
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	93

• **音楽・芸能の映像**

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に関係する部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。

2015年度までの作成件数	849
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	102

• **3次元CGで見せる建築——東南アジア島嶼部の木造民家**

佐藤浩司本館准教授が1981年以来調査してきた東南アジア各地の木造建築物の情報。3次元CGで再現した民家を元に作成したgifアニメーションで、建築物内外を巡回して見ることができる。

2015年度までの作成件数	—
2016年度の作成件数	50
2016年度のアクセス件数	—

• **京都大学学術調査隊写真コレクション**

「京都大学カラコルム・ヒンズークシ学術探検隊」（1955年）、「京都大学探検部トンガ王国調査隊」（1960年）、「京都大学アフリカ学術調査隊」（1961年～1967年）、および「第二次京都大学ヨーロッパ学術調査隊」（1969年）が撮影した写真の情報（画像あり）。

2015年度までの作成件数	42,060
2016年度の作成件数	135
2016年度のアクセス件数	865

• **梅棹忠夫写真コレクション**

梅棹忠夫本館初代館長が、世界各地における調査研究活動の過程で撮影した写真の情報（画像あり）。

2015年度までの作成件数	35,420
2016年度の作成件数	61
2016年度のアクセス件数	1,018

• **オーストラリア・アボリジニ研究フィールド写真**

小山修三本館名誉教授が、1980年から2004年にかけて、オーストラリア・アボリジニ文化の調査で記録した、儀式から風景までの多彩な写真の情報（画像あり）。

2015年度までの作成件数	7,999
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	153

• **朝枝利男コレクション**

朝枝利男氏が1930年代にアメリカの学術調査団に数回にわたり同行し撮影した、南太平洋の人々や動植物の写真の情報（画像あり）。

2015年度までの作成件数	3,966
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	375

• **西太平洋およびインドを中心とする海洋民族写真資料——大島襄二写真コレクション**

大島襄二氏が、1967年から1991年にかけてアジアやオセアニアなどの調査で撮影した写真の情報（画像あり）。

2015年度までの作成件数	—
2016年度の作成件数	8,842



- |               |   |
|---------------|---|
| 2016年度のアクセス件数 | — |
|---------------|---|
- 沖守弘インド写真（日本語版）  
沖守弘氏が1970年代後半から20年あまりにわたりインド全域で撮影した、宗教祭礼・民俗画・芸能・生活文化に関する写真の情報（画像あり。）
 

2015年度までの作成件数	—
2016年度の作成件数	20,274
2016年度のアクセス件数	396
  - 西北ネパール及びマナスル写真  
「西北ネパール学術探検隊」（1958年～1959年）が撮影した写真の情報（画像あり）。一部に「日本山岳会第一次マナスル登山隊」（1953年）科学班の写真（推定）を含む。本館に移管された旧文部省史料館資料の一部。
 

2015年度までの作成件数	620
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	44
  - タイ民族誌映像——精霊ダンス——  
田邊繁治本館名誉教授が調査したタイの精霊ダンスの写真情報（画像付き）。精霊ダンスの系統、開催地域、祭主から写真群を閲覧できる。写真は調査報告（タイ語）とも関連づけられている。
 

2015年度までの作成件数	10,082
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	33
  - 東南アジア稲作民族文化総合調査団写真  
日本民族学協会が1957年から1964年にかけて三次にわたり東南アジアに派遣した調査団のうち、第一次調査団（1957年）と第二次調査団（1960年）が記録した写真の情報（画像あり）。
 

2015年度までの作成件数	4,393
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	105
  - 日本昔話資料（稲田コレクション）  
稲田浩二氏（当時京都女子大学教授）らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料（446本のテープ・約190時間）の情報（音声あり）。
 

2015年度までの作成件数	3,696
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	67
  - 国内資料調査報告集  
日本国内における、1）民具などの標本資料類の所在、2）伝統技術伝承者の所在、3）民族・民俗映像記録の所在、4）民族・民俗関係出版物の所在、に関する情報。本館が委嘱した国内資料調査委員による調査報告集（1980年～2003年）をデータベース化。
 

2015年度までの作成件数	21,373
2016年度の作成件数	0
2016年度のアクセス件数	31
- 2016年度に館外公開されたデータベース
    - 沖守弘インド写真（日本語版）（2016年4月28日公開）
    - 身装画像——近代日本の身装文化（2016年5月25日公開）
    - 沖守弘インド写真（英語版）（2017年3月29日公開）
    - アフリカ カメルーン民族誌写真集——端信行コレクション（2017年3月29日公開）
    - 西太平洋およびインド洋を中心とする海洋民族写真資料——大島襄二写真コレクション（2017年3月29日公開）
  - 2016年度に館内公開されたデータベース
    - 西太平洋およびインド洋を中心とする海洋民族写真資料——大島襄二写真コレクション（2017年2月24日公開）
    - 3次元CGで見せる建築——東南アジア島嶼部の木造民家（2017年3月24日公開）

## 2-8 みんなく施設の利用

### 博物館施設の利用状況

#### ●国立民族学博物館（展示場）を利用した大学・研究機関等（50音順、カッコ内は人数）

愛知県立大学 (33)、アジュ大学 (22)、ECC 国際外語専門学校 (402)、上田安子服飾専門学校 (116)、追手門学院大学 (229)、大阪デザイン専門学校 (10)、大阪大谷大学 (76)、大阪学院大学 (68)、大阪観光大学 (7)、大阪教育大学 (136)、大阪経済法科大学 (26)、大阪芸術大学附属大阪美術専門学校 (14)、大阪芸術大学 (252)、大阪工業大学 (14)、大阪樟蔭女子大学 (15)、大阪成蹊大学 (51)、大阪総合デザイン専門学校 (158)、大阪体育大学 (5)、大阪大学 (179)、大阪デザイナー専門学校 (55)、大阪電気通信大学 (8)、大阪文化国際学校 (13)、大阪文化服装学院 (5)、大阪モード学園 (53)、大谷大学 (7)、岡山大学 (6)、岡山県立大学 (17)、沖縄県立芸術大学 (23)、金沢大学 (82)、関西大学 (130)、関西学院大学 (11)、岐阜女子大学 (53)、京都外国語大学 (62)、京都光華女子大学 (4)、京都嵯峨芸術大学短期大学部 (35)、京都産業大学 (16)、京都市立芸術大学 (166)、京都精華大学 (252)、京都造形芸術大学 (87)、京都橘大学 (148)、京都ノートルダム女子大学 (2)、京都府立大学 (27)、近畿大学 (17)、甲南大学 (169)、甲南女子大学 (36)、神戸大学 (133)、神戸芸術工科大学 (33)、神戸女学院大学 (49)、神戸女子大学 (126)、神戸親和女子大学 (14)、神戸山手大学 (2)、札幌大学 (23)、滋賀県立大学 (28)、滋賀大学 (4)、四天王寺大学 (15)、首都大学東京 (10)、杉野服飾大学 (30)、杉野服飾大学短期大学部 (39)、駿台観光&外語ビジネス専門学校 (15)、成安造形大学 (27)、成蹊大学 (9)、摂南大学 (154)、専修大学 (10)、専門学校アートカレッジ神戸 (12)、専門学校ルネサンス・デザインアカデミー (23)、千里金蘭大学 (45)、宝塚大学 (4)、タキイ研究農場付属園芸専門学校 (84)、帝塚山学院大学 (41)、帝塚山大学 (15)、東亜大学校 (22)、東京大学 (96)、東京芸術大学 (17)、同志社大学 (31)、東北学院大学 (60)、東北生活文化大学 (25)、獨協大学 (14)、ドレスメーカー学院 (107)、名古屋大学 (9)、奈良大学 (6)、奈良教育大学 (13)、奈良女子大学 (14)、日韓学生観光交流促進プロジェクト (40)、日本メディカル福祉専門学校 (20)、Bangkok University (21)、阪南大学 (33)、広島女学院大学 (17)、広島大学 (22)、福井大学 (5)、佛教大学 (7)、文化服装学院 (60)、北海道教育大学 (3)、宮城学院女子大学 (5)、桃山学院大学 (12)、大和大学 (93)、立命館大学 (5)、龍谷大学 (285)、LAKELAND UNIVERSITY JAPAN (16)

\*注 利用申請手続きを行った大学・研究機関等

#### ●来館目的（アンケート回答より、順不同抜粋）

- ・ 新生生の研修
- ・ 学生が個人的に鑑賞しに行くことが少なく「博物館」にふれることもほとんどないため
- ・ 世界中から集められた器物を間近で見ることができるため
- ・ 本校1回生の授業課題にて、各学生のこだわりの道具を制作するにあたり、様々な機能やかたち、素材を備えた道具をたくさん鑑賞できる場所だと考えたため
- ・ 多様な文化コンテンツを展示しているので、異文化をよりわかりやすく理解することができると思ったから
- ・ 民族学・文化人類学という他館と異なる専門分野、研究機関としての役割に重点をおく博物館施設の特色から
- ・ アジアに関する民族資料を多数所蔵しているため
- ・ 大学院のアジアンデザイン授業
- ・ 世界の民族や地域の文化に触れ、また今後の研究活動で利用してほしいと思ったため
- ・ 地域のことを魅力的に展示している一番良い事例となるから
- ・ 様々な文化の中で生まれた色や模様、形を観察し、その中から生徒の気になるものを見つける
- ・ 学芸員課程の履修者を対象にした学外見学実習
- ・ 展示方法をはじめ、コレクションの内容や運営理念等が独創的であり、一般的な美術館、博物館との比較に有効
- ・ 博物館実習の授業の一環
- ・ 異文化表象をテーマとしたゼミ
- ・ 学部生が文化人類学について考えるいい機会になると考えたため
- ・ 国内最大級の規模をもち、豊富な実物資料と映像資料を公開する博物館の活動の実際を学ぶため
- ・ 民族学資料と展示方法の調査
- ・ フィールドワークに根ざした研究を奨励している科目において、関西方面でのゼミ旅行のプログラムの一環として取り入れた
- ・ ギャラリーが十分に広く、かつセミナー室も使える
- ・ 近いということとキャンパスメンバーズなので

- ・授業（コース）内容と、民博の展示場のあり方（展示方法・方針、リニューアルとその背景など）が密接に関係していたから
- ・映像資料を含む数多くの民族誌資料が多いため

#### ●国立民族学博物館キャンパスメンバーズ利用実績（カッコ内は人数）

大阪大学、京都文教学園大学・短期大学、同志社大学文化情報学部・文化情報学研究科、千里金蘭大学、学校法人立命館、学校法人塚本学院（2,503）

## 施設の整備状況

### 博物館施設の整備状況

#### 1) 障害を有する来館者等への配慮についての取組状況

- ・講堂1階に身障者の方が安心して利用できる多目的トイレを設置し、オストメイトやベビーベッド、フィッティングボードも設置した。
- ・講堂舞台に、車いすの方でも登壇できるように、移動式の段差昇降機を設置した。

#### 2) 既存施設・設備の有効活用への取組状況

- ・施設の有効利用及び適切な管理のための施策の検討を行うために、施設マネジメント委員会を2016年度は10回開催した。

#### 3) 施設の維持管理の取組状況

- ・防災設備の誘導灯設備や自火報設備、非常放送設備、ガス消火設備等の経年による老朽修繕改修や現行法に適合させるための改修を行った。また、展示場にカメラ及びスプリンクラーの補助散水栓を増設し、防災設備の強化を行った。
- ・電波の届かないエリアでの作業時の緊急連絡手段としてPHS設備を導入した。
- ・本館3階の廊下の床材が経年により劣化していたため、張替を実施した。
- ・代表電話番号に自動応答設備（音声案内）を導入した。
- ・衛生的環境を確保するため、2016年度も館内害虫駆除を行った。
- ・自主点検及び保全業務の報告書に基づいて、予防保全・不良箇所を含めて計画的に改修計画を推進し、修繕経費の抑制を図った。
- ・安全対策として、館内（展示場・収蔵庫除く）の状況調査を行い、防災管理点検、安全巡視点検の結果と照合し、危険箇所の改善を行った。

#### 4) 省エネルギー対策等や地球温暖化対策に対する取組状況

- ・昨年に引き続き、夏季及び冬季における省エネルギーへの取組について館内に周知した。
- ・書庫の4層、5層や収蔵庫等の点灯時間が長い場所の照明器具をLEDタイプに更新し、省エネルギー化に努めた。
- ・誘導灯についてLEDタイプに更新し、省エネルギー化に努めた。

## 2-9 受賞・特許

### 受賞

#### ●2016年度の職員受賞者

日高真吾	2016年6月26日	第10回文化財保存修復学会業績賞
關 雄二	2016年7月20日	外務大臣表彰
小長谷有紀	2016年11月3日	第3回ゆとりぎ賞

### 知的財産形成・特許出願など

2016年度 なし